
響空の言祝【きょうくうのことほぎ】

さくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

響空の言祝【きょうくうのことほぎ】

【Nコード】

N9791Q

【作者名】

さくも

【あらすじ】

歌によって命あるものを癒す、唄鳥の民。その中で内気な少女ハフリは音痴ゆえに落ちこぼれと言われていた。そんな彼女のもとに、金色の翼獣を従えた少年が現れて……【児童文学風異世界ファンタジー】

(1) (前書き)

感想等いただけると励みになります。

この物語が誰かの心に少しでも残るものであれば幸いです。

森の外には、さらさらと揺れる緑と澄み渡った青しかない。
それでも、少女は見続けていた。

色白の華奢な身体。その身体を包み込む麻作りのチュニックには、襟首に極彩色の幾何学模様が刺繍されていた。

三つ編みにされているのは、細くくせのある小麦色の髪。長く伸びた前髪の奥に隠れているのは、髪と同色の長いまつげで囲まれた瞳で、深い緑色をしている。

小ぶりな口や鼻とは対照的に大きいその瞳で、少女は二色に分かれたその世界を見つめていた。

その少女の名を、ハフリという。

………

森からはみ出てしまったかのようにぽつりと立つ樹。きのこのように枝葉を広げるその樹の下で、ハフリはひざを抱えたまま、青い草原の匂いとともにそうっと息を吸った。

小さなくちびるから、言葉がこぼれる。それは、歌と言うよりはささやきで、抑揚も、音の高低も感じられないものだった。

鳥よ、われらに調べを与えよ

風よ、われらの歌を運べ……

その声はあまりにもか細く、生まれた言葉は風にさらわれることもなく消えていった。まるで、聴かれることを忌むかのように。

いのちあるものに幸あれ

すべてのものに癒しあれ……

それが祈りの歌であり、同時に祝福の歌であることをハフリは知っていた。それでも、自分が紡いでるのは祈りでも祝福でもないと思う。これは誰のためにも響かない、臆病で陰鬱な、ただの声だった。

われらの声、まさしく……

そこで、ハフリは声を発するのをやめた。そつとくちびるをなめ、目を伏せる。そして、空っ風のように寂しげな細い息をはき、ひざを伸ばした。もものうえに置かれたのは、厚みのある何か。黄ばんだ羊皮紙がのぞく、擦り切れた革張りの本だった。

ぱらり、とハフリは表紙を開ける。そのとき、ぶわりと風が吹いた。淡い小麦色のおさげが宙で揺られる。

同時に、風によって届くものがあつた。

祈れ、祝え、万物の安らぎを

愛でよ、そのいのちのかがやきを……

ハフリの耳に飛び込んできたのは、先刻までハフリがささやいていたものとはまったく異なるもの。まさしく、歌声だった。森のなかを飛びかうような弾みをもった、丁寧で美しい旋律。それが、足音とともに、近づいてくる。

ハフリは本を閉じると抱きしめ、またもやぎゅうつとひざを抱えてうつむいた。樹になってしまいたいと強く思った。

ハフリの心とは相反した、軽快な足音がどんどんと大きくなっていく。まるで踏みつけられる草になったかのような心地がした。

(こないで。見つけないで)

「また、こんなところにいたのね」

振ってきた声にしようがなく顔をあげると、そこにいたのは一人の人物。濃い蜜色の髪をかきあげて、呆れたように自分を見る、勝気そうな少女だった。強い光を宿す若葉色の瞳から、ハフリは思わず目をそらす。そんなハフリと視線を合わせるように少女　キリはかがみこんで、白く細いハフリの手をとった。そして、きめ細かいその肌に、幾筋もついた紅い線に顔をしかめる。

「それに、なんで近道だからっていばら道を通るのよ。また切ってる」

ハフリはその手を引つ込ませようとしたが、キリはそれを許さない。ハフリの手を握ったまま、小さく息を吸う。

そして、歌う。ささやくように小さく、しかし森のなかに響いていたものと同じ美しい声で。

唄う鳥は、風とともに生き

すべての調べは、いのちの礎とならん……

ぼうっとハフリの手の周りがぼんやりと光る。小さな光の玉は、傷口に近づくと、しみこむように消えていった。そこにあるのは、傷一つない元通りの手だ。綺麗にふさがってしまった傷を見て、ハフリは顔をゆがめ、泣き笑いのような顔をした。

そんなハフリには気付かずに、キリは茶化したように言う。

「これぐらいは、自分で治せるようにならないとね」

ずきんと、音が外に響いたのではないかと思うくらいに、ハフリの胸が鳴った。本を抱く片方の手にぎゅっと力がこもる。それを見たキリは、心底不思議そうに問うのだった。

「そんなずーっと昔の人たちが残した物なんて読んでどうするのよ。読めない文字だってあるし、わけのわからないものしか出てこないじゃないの」

《唄鳥の民》。金の髪と緑の瞳を持つ民。歌によって生命ある

ものを癒す者。

けれど、ハフリは歌うことができない。小さな声は、歌おうとすれば掠れて消える。それに、どれほど頑張つて旋律を紡ごうとしても、かすかに生まれるその音は、失笑か落胆を買うような突拍子もない音律なのだった。それを、音痴だと人は言う。そしてハフリは、落ちこぼれだと言われている。

いばらの道を通ってきたのは、安全に森の外に出るには、たくさん人のいるところを通らなくてはいけないからだ。キリにとってはなんのことはないだろうが、ハフリにとってはそれは苦痛以外の何者でもない。しかし、それを知らないキリは、言葉を続ける。

「毎日こんなところにきて。寿命が縮まっても知らないんだから」

《唄鳥の民》は、森の外では生きられない。テリトリ

それは、昔々からまことしやかに言い伝えられていることだった。嘘か真か定かでないが、誰も森の外にはでない。森は豊かで、食べ物にも寝る場所にも困ることなどないからだ。

森の外には、たくさんの村テリトリがあり、《唄鳥の民》とはまったく違う容姿をし、異なつた暮らしを営む人々がいるという。しかし、言い伝えがあるから《唄鳥の民》は森の外へは出ない。そして、この森に他の民が来ることもハフリが知る限りなかった。だから、ハフリはここに居るしかない。

「だからさ、一緒にいようよ。逃げるようにこんなところこなくてもいいじゃない。歌だつて教えてあげる」

他意がないことなんてわかっている。それでも胸は痛むのだ。きつとキリは、この痛みなんて知らない。そう思うと、恨めしくなる。そつと目線を上げると見えるのは、キリの頭に巻かれた布。空を

飛ぶ鳥の背景にチュニツクと揃いの幾何学模様が刺繍された額当て。そして、耳の上あたりにさされている鮮やかな瑠璃色の羽根だった。額当てと羽根は、一人前の『歌い手』として認められた者のみが付けることを許される装身具だ。もちろん、ハフリにはない。

うつむきながら、ハフリは小さな声で呟く。本当は、叫びたい言葉を、あまりにも小さく。

「キリは、美人だし、歌も上手いから……」

「ハフリ？」

首をかしげるキリに、ハフリは息と共に言葉を吐いた。諦めたように、顔をゆがませて。

「放っておいていいんだよ。私のことなんか」

咎めるように自分を呼ぶ声から逃げるように、ハフリは身を翻した。

歌によって癒す者。森でしか生きれない者。

自由に空を翔る鳥は、歌えなくてもいいだろう。しかし、籠のなかにいる鳥は、美しくてはならないし、歌えなければ意味がない。

だからハフリは、自分は森にいられないと思う。けれど、外に行く勇氣もない。だから、あの樹にすがるので。

視線を地面に向けたまま、ハフリは遮二無二に走り続け、手が棘に引っかかるのもかまわず、いばらに突っ込んだ。そして、思い知る。結局、戻るしかないことを。逃げる場所なんて、本当はどこにもない。ハフリもキリも、同じ籠のなかにいるのだから。

「痛っ」

目の下を引っかいて、さすがにハフリは声を上げた。行き場のなかったやるせない気持ちは、すうっと引いたかと思うと、今度は痛さと情けなさに覆い隠される。涙がせりあがってきて、ぽろぽろとこぼれた。息も荒くなり、肩が上下する。声にならない声が漏れ、地面にひざをついた。土に爪を立てても、何も変わらない。いつそ誰にも見つからず、このまま荊のなかで眠ってしまいたかった。本当にまどろみに身を任せてしまおうかと思ったとき、どこからかでびい、と高い音がした。ぴゅう、と続けて音がする。どこか苦しげな音だった。

ハフリは目元をふいて声のもとを探す。すると、少し離れた場所に、荊と地面に挟まれるようにして小鳥かまねどりがもがいていた。蒼穹を切り取ったような青色の鳥。《風真似鳥》だ。

一体どうやってこんなところに迷い込んだのか。とにかくハフリは涙をぬぐいあげて手を差し伸べ、小鳥に覆いかぶさっていた荊をどけた。その際に、棘が翼に当たってしまい、小鳥は甲高い鳴き声を上げる。その悲鳴に、ハフリはびくりと身をこわばらせる。そっ

と動かしつつもりでも、時折小鳥は苦しげな声を出し、そのたびにハフリはまたもや泣きそうになる。しかし、やめるわけにはいかなかった。荊はハフリの手をも傷つけ、指先から痺れるような痛みが広がる。知らずのうちに額を汗が伝う。それでもハフリは、慎重に荊をどかし続けた。

やっとのことで荊から解放された小鳥はぐったりとしていた。小さな足から紅い血が流れている。それはハフリ指先から滴る血よりも鮮烈な色をしていて、まるで命が流れ出ているかのように思えた。そう思うと、身体の震えが、止まらない。

脳裏に、キリの旋律が響く。歌えさえすれば、こんな傷。なのに。「ごめんね……」

ハフリは細い声で謝る。そして、かろうじて思い出した。こういう時、この本にはなんと書いてあった？

ハフリが持っているのは、遠い昔に誰かが書き残した本、とある人物によってハフリに手渡されたものだった。歌がなくとも、時間がかかろうとも、傷を癒すすべの記された書物。森にはない道具なども書かれていたが、使える知識もある。

そうだ、とハフリはつぶやいて、自らの服の端をびりりと細く引き裂き、小鳥の足に結び付ける。たしか、止血と言っただろうか。そして、そつと両手でその小さな身体を救い上げ、かばうように胸に抱いた。手のひらに感じるほんわかとしたあたたかさ。それがいつ消えてもおかしくないのだと思うと、どうしようもなく怖い。

(助けなきや)
足早に自らの家^{テント}に向かいながら、ハフリはただただそれだけを思っていた。

父も母も幼いころに病でなくしたハフリは、森の隅の天幕^{テント}で一人

暮らしている。

母親は自分を生んですぐ亡くなった。父は、ハフリが五才になるまでは生きていた。あの本をハフリにくれたのは父だ。文字の読み方、薬に使える草、それらを教えてくれた人だった。

『ハフリ、お前はね、少しみんなと違うかもしれない。けれど、まったく違うわけではないんだよ』

少しさびしそうに、口癖のようにそうつぶやいていた父。揺れる髪の毛は銀。ハフリに注ぐがれるなざしの色は鈍色だった。父は《唄鳥の民》ではなかったのだ。そして、自らもある日に、眠ったままになってしまった。

（お父さんが《唄鳥の民》じゃないから、私は歌うことができないのかな）

思いたくないのに、思ってしまう。しかしハフリは、その黒い感情を振り払うように、ぶんぶんと首を振った。思い出の中の父は、寂しげでも、優しくかった。だからこそ、そう思うのは父にも、ひいては母にも悪いことだと思う。悪いとしたら自分だ。変わらない、弱い自分に違いない。

ハフリは、顔をゆがめる。泣き笑いのようなその表情が、父のそれとよく似ていることを、彼女は知らない。

そんなハフリが見つめるのは、《風真似鳥》の子供。

傷はあまり深くなかったらしく、止血のおかげがすぐに止まった。それよりも、衰弱のほうの問題で、迷い込む前からかなり弱っていたようだった。水を葉ですくって少しずつ飲ませ、ふっくらとした植物をしいてそのうえに寝かす。時折弱弱しく鳴く声を聞いて、ハフリはいたたまれない気持ちになった。おそらく、時間をかければ、元気になるだろう。それでも、歌えれば、この子に痛い思いも辛い思いもさせずに済むのだ。歌えさえすれば……。

果実の汁をやったり、試行錯誤の看病をして二日。小鳥は自ら起

きれるようになった。しかし、飛ぶことはできないらしく、ハフリは自分のせいではないかと暗鬱な気分になっていた。しかし、また一日経って、新たなことが判明した。小鳥の羽は、まるで胸についたように離れないのだ。

《風真似鳥》は、この森で子育てをし、子が巣立てる年になると、一斉に飛び立っていく。それは時期で言うと一月ほど前のことだ。ということとは、この鳥の親も、もうこの森にはいない。

(ひとりに、なっっちゃったんだ……)
ハフリにとって、ひとごとではない。

そのことがわかってから、ハフリは丈夫な葉を探して縫い、首に掛けられる小袋を作った。きよとんと首をかしげる小鳥を取り上げて、そっと袋の中にいれる。首だけ出るようにしてやると、袋の中が暖かいのか、居心地よさそうに目を細めた。

「助けてあげられなくてごめんね。でもこれから、一緒にいるから」
袋を掲げて、小鳥と目をあわす。ぱちぱちとまばたきをした小鳥は、甲高い声ではなく、まるでそよ風のように、フウ、と鳴いた。

《風真似鳥》は、さまざまな音を真似できるといって、普段の声はその名のとおり風の音らしい。

「私は、ハフリ。ええと、名前はどうしよう」
フウ、と小鳥は無邪気にさえずる。その声に、ハフリは思わずほほ笑み答えた。

「そうだね、フウにしよう」

風が吹く。森の香ばしい匂いと、草原の青い匂いを混ぜて運びながら。

ハフリはまた、あの樹の下に来ていた。

「フウ、あんまり遠くに行っちゃだめだよ」

「ダメダヨ？」

風を真似るのに飽きたのか、時折ハフリを真似るようになったフウは、わかっているのかいないのか、短い足をととととせわしく動かして、自らの身の丈ほどの草の合間を走り回っている。そんな様子が愛らしくて、ハフリからは自然と笑みがこぼれていた。

森の木々は檻のようで、葉のざわめきは嘲笑われているかのようだった。一人の小屋は孤独を思い知らされるばかりで、いばらの道が傷つけるのは体だけではない気がした。

それでも、とハフリは思い、目を閉じる。かげることを知らない空と緑が絶えることのない草原のあわいの場所は、いつだって心地よい。

視界を横切っていくのは、白い鳥。規則正しく並び、風にのって飛んでいく。

高い空から見下ろす景色は、一体どんなものなのだろうか。そんな事を考える。ここから見えるのは、果て無き草原のみ。この先に草原以外の景色があるのかどうかすら、ハフリは知らない。

目を細め空を仰ぐ。すると、にわかには鳥たちが騒ぎ散り散りになっていった。まるで何かから逃げるようなその様に、ハフリは目を凝らし、あっ、と思わず声を上げた。

雲ひとつない蒼穹に、まるで時間を間違えたように金色の星が輝いていた。

否、それは 翼を持った金色の獣。

ハフリが読んだことのある本に描かれた動物に、どれもあてはまらない。いや、どれも当てはまる獣だった。

優美な曲線を描く嘴を持った、鷲の頭。ひづめの付いた前肢。しなやかな胴と後ろ足。鋭い爪は獅子のもの。尾は馬。そして、とにかく大きく、金色の光を振りまく翼。

きれい、と思わずハフリから言葉がこぼれた。どんな獣よりも獐猛そうでありながら、気高く、美しい。太陽から生まれたようないきものだと思った。

心奪われているうちに、姿が鮮明になっていく。我に返ったハフリに見えたそれは、見紛うこともなき猛獣の猛々しい、荒ぶった姿だった。そして、それが自分に近づいてきている。

(食べられる)

はっとしたハフリは、フウを引っつかみ、自らの胸にぎゅっと抱いた。そして、自らも身体を丸めてうずくまる。ばさり、ばさりとした羽音に、ハフリの背筋が冷えた。恐れもあったが、さしていた陽光がさえぎられたのだ。それほどまでに、近い。腕のなかで、きゅんとフウが鳴いた。

一瞬がとてつもなく長く感じられた、そのとき

「ティエン、止める。下がって着地。よし」

はきはきとした闊達な声をきいた。続いて、一回羽音が響き、落ち着く。

それでもまだ、ハフリは顔を上げることができなかった。すると、今度は草を踏む音が近づいてくる。

「おい、大丈夫か？」

とん、と肩に手が当てられ、ハフリはびくりとはねるように身を起こした。

そこに居たのは、少年だった。

見た目は硬そうであるのに、しなやかに風に揺れるのは、温かみのあるこげ茶色の髪。瞳の色も同様で、少しつりあがっている。そ

の瞳はのぞきこめば写るものが見えそうなほどに澄んでいた。口は大きく弧をえがき、丸めの輪郭のせいか、やや幼い顔立ちをしている。

少年は、ハフリの驚きように驚いたのか、やや距離を置いて、両手を挙げて何も持っていないことを示した。そして

「おまえ《雨燕あまひばりの民》か？」

ふるふる、とハフりは首を横に振った。《雨燕の民》は、砂漠を放浪しながら生きる流浪の民だと本で読んだことがある。

ハフリの反応に、「違うのか」と少年は落胆したようにつぶやいた。

あ、とハフりはやっとことで声を振り絞った。それはあまりにも小さく、少年に聞こえるはずがなかった。しかし

「なに？」

少年はハフリの目をまっすぐに見ながら首をかしげた。ハフりは目を見開いて、もう一度、のどを押さえて聞こえてと願いながら、声を発する。

「あの、どこからきたんですか」

んーと、と少年は頭をかきながら答えた。

「この草原のずっと向こうにある山のふもとから」

テリトリ
外の領域の民。

ハフりはぱちぱちとまばたきをした。確かに、見たこともない容姿だ。本では読んだことはない。ハフりは麻づくりのチュニツクと暖地の服装だが、彼はぶ厚めのキルトのような服装をしている。寒いところから来たのだろう。こことはまったく違うところから。

ハフリが少年を観察していると、少年は小さく悔しげにつぶやいた。

「……七日も飛んできたのにな、ちくしょう」

やりきれなさがにじみ出ているその声に、ハフりは思わず身をすくめた。

「ごめんなさい」

「どうしておまえが謝るんだ？」

不思議そうに問いかける少年に、ハフリは答えることができない。少年は思案気に空を仰いで、

「あのさ、ここで一番物知りな人のところに連れて行って欲しいんだけど。できる？」

ええと、とハフリは精一杯に考えをめぐらし、おずおずと口を開く。心の隅で、この少年の役にたてることを願いながら。

「たぶん、セトおじいさんなら……」

金色の獣は森の外に待たせたまま、ハフリは少年を連れて森へと入る。ふたりが歩くのは開けた道。外からの客人に、いばらの道を通らせるわけにもいかなかったからだ。遠巻きに注がれるまなざしは、隠者のような生活をしている自分に対してか、それとも外界からの客人にか。ともかく居心地悪い。

しかし後ろを歩く少年は萎縮どころか、まわりの視線にさえ気づかないようだった。興味深そうにくるくると目を動かして森を見回している。小さく口笛までふきだす始末。

「たくさんの植物があるんだな。この森は、すごい豊かだ」

少年が感嘆したように言った。ハフリはそれに答えるべきか迷い、とりあえず小さくうなずいた。

「セトさんとやらのいるところまで、どのくらい？」

「……もうすこし、です」

セトは、この森の中で一番長く生きている老爺だ。森の中央、開けた広場にその庵^{テント}はある。簡素で小さな住処だが、《唄鳥の民》は皆セトを敬っている。若かりしころのその声を響かせれば、森の隅で病に苦しむものも救えたのだ、と。

ハフリはセトが好きだった。しわくちやの顔、しわの奥にある瞳はおだやかだった。そして、セトの庵にはたくさんの本が積まれており、ハフリがそれを読むことを、セトはとがめない。しかし、大きくなり、普通ならば『一人前の歌い手』になるころになると、ハフリはセトのところへ気安く行くことができなくなった。

怖いのだ。優しくしてくれていた人に、落ちこぼれの烙印を押されることが。

広場に差す光がとてつもなく明るい。それとは反対に、ハフリの心は沈んでいくばかりだった。

「なんで、うつむいてんの？」

ふいに少年が前に回りこんできた。そして、思わず身をこわばらせたハフリに苦笑する。

「おれ、怖い？」

いいえ、と首を横に振る。うつむいているわけをあっけらかんと言えたら、どんなに楽だろうと思う。

そつと、目をあわし、少年を見る。少年からは、乾いた匂いがした。砂の香りだ。おそらく、疲れているのだろう。目にはくまができてくる。あの、と声を出す。

「泊まっていられるんですか」

「訊くこと聞いたらでていくよ」

疲れた顔で笑う少年に、ハフリは違うんです、と思わず声を大きくする。それは、普通の人が発する大きさだったが、ハフリにとつては驚くべき音量だった。

「お疲れの、ようだから……」

少年はぱちくりと瞳を見開いた。そして、やわらかく目を細め、笑う。苦笑ではなく、無邪気でうれしそうな表情だった。

「ありがとな。でも、急いでるから」

「そつ、ですか」

尻すぼみになってしまった声。すると、少年はそつとハフリの頭に手を載せた。まるで妹にするかのような自然なしぐさだった。そしてもう一度、ありがとな、と言った。少し高いところにある焦げ茶の瞳に、自分の泣きそうな顔が見えて、ハフリは申し訳なく思った。会ったばかりの人にまで、気を遣わせるなんて、自分はどこまで情けないのだろう。

またもやうつむきそうになったハフリに、少年は尋ねた。

「おれはソラト。おまえは？」

「……ハフリ、です」

ハフリか、と少年　ソラトは呟く。ぽつと、心の中に何かか灯ったような気がすると、妙にこそばゆくなる。どこからかわきあ

がって来るその感覚に促され、ハフリは思わずそつとほほ笑んだ。

そして、思う。この少年、ソラトも、用さえ済めば此処から去ってしまうのだと。

さびしい。

出会ったばかりの少年。もう会うことなどないであろう外の人間。誰かが去ってしまうことに対して、こんな感情を持つのは、久々だった。そしてその痛みはハフリのを、ちくりちくりといつにも増して刺すのだった。

(3) (前書き)

この部分からソラトの一人称が「おれ」から「俺」になっています。
これより前の表記は、随時直しておきますので、ご了承ください。
い。

セトの庵の周りは、香のかがりが漂っていた。花の匂いを凝縮したような濃さをもった、どこか古めいたかおりだ。ハフリはくんとそれをかいで、懐かしく思う。一体前にかいだのはいつだったろうかと。

そっと、色とりどりの刺繍を施されたすだれをめくる。うずたかく積み上げられた本の中心に、胡坐をかいた小さな老人が座っていた。

「お久しぶりです、セトおじいさん」

ゆっくりと、老爺が顔を上げる。しわにうずもれた小さな瞳をハフリにむけ、おお、と呟いた。

「これは珍しい。ハフリではないかの」

「……はい」

ハフリはソラトを手招きする。新たな客人に、セトはさらに驚いたようで、声が上がった。

「外からの客人じゃの。して、何か御用で？」

ソラトはゆっくりと室内に入ると、セトの前にひざまずいた。

「俺は、草原のずっと東にある山ふもとからきた《山鳥の民》、ソラトです」

「ずいぶんお若いのに長い距離をかけてきたものじゃ。一体どうやって、なんのために？」

「ここには翼獣で飛んできました。本当は、《雨燕の民》彼ら
が持つ、雨乞いの術を探しに来たんです。彼らがどこに住んでいるのか、知っていますか？」

ふむ、とセトは考え込み、やや困ったような顔をした。

「おぬしは方角を間違えてきたのじゃろう。おぬし、《竜の山》のふもとの民じゃな？」

ソラトは驚いたように目を見開きうなずいた。すると、セトは相

変わらず困った顔のまま

「ここは、《竜の山》からはるか南の地。《雨燕の民》が暮らすのは、ここよりもっともつと飛んだ先にある南西の砂漠じゃ。それに、翼獣は寒地には強いが、乾いた土地では体力が持たぬと聞く。残念じゃが、一度村に戻ったほうがよからう。《雨燕の民》は流浪の民じゃ、広大な砂漠を定住地を持たずに移動する。見つけるのすら難しいじゃろからの」

ハフリは、セトがこんなにも外に関する知識を持っているとは思っていなかったで、少なからず驚いた。《竜の山》、砂漠の地……想像もできない外の世界、その広さを感じ、とくんとくんと胸が高まる。

しかし、ソラトはずいぶんと落ち込んでしまったようだった。「そう、ですか」

声は傍目にもわかるほど強張っており、先ほどまでの闊達さは感じられない。セトはいたわりを含んだ声でたずねた。

「おぬしはなぜ、《雨燕の民》を探すのじゃね？」

ソラトはひざの上でこぶしを握り締めたまま、低く答えた。

「俺の村は、寒くて、貧しいところで。それが、《竜の山》の向こうにある《トカゲ山》の噴火からでた灰で、空が覆われて、もつと寒さを増したんです。しかも、雨が降らなくて。育てた作物も、水がなければ育ってはくれないし……それよりも、積もった灰のせいで、川がせき止められてしまって。だから、せめて雨が降ればと……」

セトはしばらく考え込んでいたが、ぽつりと答えた。

「村で考えたほうがよからう。お若い人。近くにあるものほど、見えづらいものじゃ」

それを聞いて、ソラトはいつそう肩を落とした。ハフリはかける言葉がないまま、突っ立っていることしかできない。

「もう、お帰りになるのかの」

セトが尋ねると、ソラトは硬い声で「はい」と答えた。

「できるかぎり早く、帰ろうと思います」

「少しだけ、時間をとれんかね。書物をあさってみよう。何かがあるかもしれん。ハフリ」

はっとしたようにソラトが顔を上げた。一方、突然声をかけられ、ハフリは急いではいと答える。

「おぬしの家にある本も調べておいてくれ。せつかく遠路をここまできたのじゃ、手ぶらで帰らせるわけにはいかん」

ハフリはこくこくとうなずいて、身を翻した。

……

結果的に、ハフリの探索は徒労に終わった。ハフリの父が遺した書物は医学書ばかりで、外の世界に関するものは何一つなかったのだ。

ただひとつ本の山の影に見出したのは、方位磁針。首にかけるために鎖が付いており、その汚れ具合からすると、ずいぶん古いものようだった。

錆びついた金属の枠の中で、ゆらゆらと薄い磁石が頼りなさげに揺れる。それを眺めながら、ハフリはふと考えた。

(この方位磁針は……)

他の領域テリトリーの民のことはわからないが、《唄鳥の民》は金属を加工する術を持たない。

日常で使ったりする刃物などの金属物は、定期的にやってくる《虎鷄トウキの民》。褐色の肌と大きな体躯を持つ、商いを生業とする人々と物々交換をして得ている。

つまり、ここ森にある金属物は、すべて森の外からやってきたものということだ。

しかし、この森で生活するにあたって、方位磁針は必要ない。つ

まり、この方位磁針は

(お父さんのだ)

『外』の世界からやってきた、父親のもの。『外』の世界に出ることのないハフリには、必要のないもの。このままここに置いて行くだけでは、森の空気にひたされて、外の空気に二度と触れないまま、黒く錆びついていくだけだ。

(……もしかすると、あの人の役には立つかもしれない)

ね、と胸元の袋に収まる小鳥に思わずつぶやくと、フウは満足そうな声で鳴く。ぎゅっと、手の中に方位磁針を握って、ハフリはテントを後にした。

………

「ありがとうございます」

俺が見えてきたころ、そこから出てくるひとりの影があった。ソラトだ。ハフリは思わず駆け足になって、少年へと走りよった。手からはみ出たぼろぼろの鎖がこすれあって、小さくしゃりしゃりと音を立てる。緊張のせいで、少し走っただけで息が乱れる。

「み、見つかりましたか」

ソラトは曖昧に肩をすくめた。

「これ、って物は見つからなかったけど、地図をもらった」

左手に持った丸めた羊皮紙を掲げ、そう言う。そして、右手を持ち上げて

「あとちゃんとした方位磁針も。これだけでも収穫だよ」

しゃらん、と金色の鎖が涼やかに鳴った。ハフリの身体が無意識にこわばる。

錆びもほとんどない、華奢な鎖に繋がれた方位磁針。磁石の上に被せられている硝子は傷一つなく澄み渡り、森の木漏れ日を弾いて

きらきらと光る。あまりにまぶしくて目が、心が、痛くなるほどに、光る。

「ハフリ？」

ソラトの声にハツとして、咄嗟に手を背中に回していた。するとさっきまでしつかり握りしめていた錆び錆びの方位磁針が、まるでハフリから逃げるかのように、するりと手から抜ける。あつと思つた時にはもう遅い。鈍い音を立てて地面に落ちたそれは、傷だらけで曇った硝子をハフリに向けて、嘲笑うかのように木漏れ日をぼやぼやと反射する。声にならない声もれるだけで、逃げ出してしまいたいのに、身体が凍ったかのように動かない。

ソラトが屈み、落ちたそれを拾い上げた。ハフリはやつこのことでぎゅうつと目を閉ざしてうつむく。何も見たくなかった。なのに肌は恐ろしいほどに敏感になり、空気を感知取るうとする。ソラトが動く気配がする。ハフリに一步、近づく。そして

しゃらんと、ハフリの胸元で音が鳴った。

え、と思わず目をあけると、ハフリの胸元　フウの頭上にあるのは、華奢な鎖に繋がれた金色の方位磁針で。目線をあげると、ソラトは頭をがさがさとかいて、ぶっきらぼうに言った。

「俺にはこんな綺麗なの、似合わないからさ」

でも、これは、とハフリがぶつ切りの言葉を発すると、彼の顔は悪戯めいた笑みに変わる。

「もう貰ったものなんだから俺のもの。どうしようも、俺の勝手」
それとも、と錆びついた方位磁針をハフリの目の前にぶらさげて、「これ、俺にはあげられない？　大切なもの？」

その問いに、その声に、なんだかほつとして、身体がゆるむ。すると、すうつと喉に空気が入ってきた。声が、出る。

「あげ、ます」

情けないほどに、小さな声だった。けれども、伝われ、伝われと、

願う。

「そのために、持ってきたんです」

そっか良かった、とソラトは目を細めて笑った。くまの付いた顔で、まるで疲れなんてどうってことないかのように。本当は、疲れでいて、ここまで来たのに何も見つからなくて、落ち込んでいるはずなのに。

そんな彼に、ハフリは何もできない。

「ごめんなさい、お役に立てなくて」

「おまえ　ハフリはすぐに、謝るのな」

ソラトはおかしそうにそういうと、ふいに真面目な顔をしてハフリを見た。まっすぐな視線に見つめられて、ハフリの心がどきりとはねる。視界を覆う長い前髪に向こうにある、つややかな瞳から目をそらすことができずに、魅入っていた。この少年の瞳の輝きは、あの金色の獣の瞳によく似ている。強靱でゆるぎない、強いものの瞳だ。

(私とは違う)

そう認めるのは、どうしようもなく虚しく、情けないことだった。そして、誰かにこんなにもまっすぐ見つめられるのが久方ぶりだと気づく。それがここから去っていく少年だということに、一抹の悲しさを覚えた。

(見つめてもらえただけでも、よかったのかもしれない)

諦めにも似た想いを悲しさにかぶせる。諦めを受け入れてしまえば楽だということを、ハフリは知っていた。自分はここにいない。歌えないままにいるしかない。誰かに見つめられることなく生きなければいけない。すべて、仕方のないことだと。

そう思った刹那、地面を撫でるかのようにぶわりと風が吹く。ハフリのおさげが上に持ち上げられ、チュニックがはためく。首にかけられた鎖が、きらきらと揺れて、鈴のような音を立てる。森の木々がざわめき、木漏れ日が生き生きと飛び回る。フウがピィ、と甲

高く鳴いて

空に導かれるような感覚を味わうなか、ソラトの音がハフリの諦めを貫いた。

「ハフリ、俺の村に来るか？」

ハフリ、俺の村に来るか？

まるで雷のように自分を貫いたその申し出に、え、とハフリは思わず声を漏らす。びりびりと身体が痺れているような感覚のなか、続けて呆然とつぶやく。

「……どうして？」

ソラトはあさつての方向を見ながら、ぼりぼりと頭をかいた。

「外の話聞いてるとき、すごく興味深そうだった、から」

そのあまりにもはりぼてなような態度に、ハフリはびんときた。

「セトおじいさんが、何か言っただんですね」

ハフリの沈んだ声に驚いたのか、ソラトはあたふたと手を振る。

「いや、セトさんが言っていたのは、お前が外に憧れてるってことだけだ。それに、お前がテイエンを見つけたとき、本当に、なんていうか、目が輝いていたから」

ハフリは、ソラトの目を見た。すんと何かが落ちてきて、落ちて着いたような気分だった。

「私が、連れて行ってとிட்டなら、連れて行ってくれますか」

その言葉に、ソラトはこくりと頷いた。ゆらぎのないその動作に、ハフリは安堵する。そして、深く、深く頭を下げた。

「何でもします。連れて行ってください……！」

ソラトは、心配そうにたずねる。

「さっきも言ったけど、俺の村は、この森みたいに裕福じゃない。それでも？」

「ご迷惑なら、途中で降ろしてもらってかまいません！」

いつしか、声は必死になっていた。これを逃したら、もう外になど出れはしない。そして、ソラトにはもう会えなくなるだろう。

「連れて行ってください！」

頭を下げたまま、どのくらい時間がたっただろう。ふいに、ぽんとあたたかい何かハフリの頭に載せられた。

「俺の村、ここからずっと北なんだ。ぶ厚めの服、ある？」

ばね仕掛けの人形のように、ハフリは体を上げた。正直、信じられなかった。

「いいんですか？ ほんとうに？」

ああ、とソラトは歯を見せてにかりと笑った。

「ティエン あの色やつき、滅多に人に近づこうとしないんだ。でも、お前のほうには誘われるようになってきてさ。だから、なんか、きつとこうすべきだって思うんだ。」

ハフリ、来いよ。俺の村へ」

ぼると、

「俺、お前のこと、ハフリって呼ぶから。だからお前も敬語なしで俺のことソラトって……って、何で泣いてんだ！？」

ハフリの瞳から大きな何か零れ落ちる。ソラトはかなりたじろいで、布を取り出したりとせわしく動き回った。その様子がおかしくて、ハフリは泣きながら目を細めた。

「いろいろ、ごめんなさい。……よろしくおねがいします」

「また、謝る。まあ、いいけどさ」

ソラトはあきれたようにいったが、その表情はとても優しげだった。

………

きしんだ音を立てながら、古びた小棚をあける。最奥からとりだしたのは、すりきれ、泥すらも落ちないほどにしみこんでしまった外套。それは、父の形見だった。

外套からはかすかに、ソラトと同じ匂いがした。かなり古い、土の匂いだ。ハフリはそれに顔をうずめる。

（お父さんがどこの民だったかも、わかるかな……）

知りたい、とハフリは思う。知れたら、ひとつ自分の中での踏ん切りがつくような気がしていた。

さらにもうひとつ、取り出したのは、極彩色の刺繍が施された額あて。これは、母のものだった。

(ここに戻らないなら、もう付けることはないんだろうな)

母から娘へ受け継がれていくもの。《唄鳥の民》の伝統的な装飾具であり、羽根をさしたとき、それは一人前の『歌い手』の証となる。

しかし、自分に羽根が与えられることはない。そう思うと、これを遺してくれた母に申し訳ない気持ちが出た。置いていこうかと、迷う。しかしハフリはしまいかけた額当てをもう一度見つめた。ここに置いておいて、もし、自分が戻らない、いや、戻れなくなったとしたら……。

(持っていこう)

そつと、方に背負った大きめの皮袋のなか、一番奥に、丁寧にしまう。最低限の着替えと、額当て。そして、一冊の本。ハフリが持ち出そうと思うものは、これだけ。

「フウウウー」

「あ、フウもいたんだね」

不満げな声を上げた小鳥に苦笑する。なぜだか、それほど寂しさは感じられないのだった。それが悲しく思えるほどに。

……

いばらの道を抜けると、そこには夕日をあびてあかがね色に輝く獣がいた。

「改めて紹介するよ。こいつはティエン。翼獣だ」

またもやいたるところに棘を引っかけ、髪を乱しているハフリにソラトは苦笑しつつ言った。

「翼獣？ 聞いたことない獣です」

「よくわかんないけど、すごく珍しいものなんだ。俺の相棒。あと、敬語直せよ。なんか誘拐したみたいない気分になるから」

「はい……うん」

ソラトは満足そうに頷くと、ハフリを手招きする。近くによると翼獣、ティエンは二人をやすやすと乗せれるほどに大きかった。瞳はつやめく飴色で、まつげは長い。

「なでてやって。のどもととか、喜ぶよ」

促され、そっと手を伸ばす。ティエンは嫌がらず、ふっと目を細めた。見た目よりも硬い、馬のような毛だった。寒さに耐えるためか、ぎつしりとはえている。

のどもとをかくように撫でてやると、「ごろごろとのどを鳴らした。ソラトが後ろから感心したように言った。

「本当に、ハフリには懐いてるんだなあ。こいつ、絶対他の人間には媚を売ったりしないんだ。気位が高いから」

確かに、この美しい獣には人にすりよるよりも、独りで屹立とたつ姿が似つかわしく思えた。

それでも、こうして初対面の自分に懐いてくれることは、とても嬉しい。ハフリは、精一杯の音量で声を出した。

「よろしく、お願いします。ティエン……ソラト」

「俺の名前はティエンよりあとかあ」

苦笑したソラトは、颯爽とティエンにまたがった。そして、ハフリに向かって手を伸ばす。

「つかまって」

何気なく差し出された手に、ハフリは自らの手を重ねた。こんな風到手をつなぐのは、父としかなかったかもしれない。父のしわの多い、骨ばった手を思い出す。今感じるのは、少し硬く、乾いた肌の感触。しかし、人のぬくもりは変わらない。その温かさに励まされるようにハフリは思う。

（涙も、無力な自分も、すべてここにおいて行こう。せっかくつかんだのだもの）

胸もとの小袋のなか、フウがぴいといとハフリを鼓舞するかのよう
に力強く鳴いた。

ティエンが大きな金色の翼を一振りすると、風が生まれ、草を揺
らす。軽く地面を蹴る音とともに、天空の空気がハフリを包み込ん
だ。

翼は空を掴んで羽ばたき、蹄の前肢と獅子の後肢は力強く宙を蹴る。金色の軌跡を残しながら、翼獣　ティエンは風を切り駆けていく。

森はいつしか緑の鞠のような一点になっていた。目の前に広がるのは、果てなき草原と、すっぽりと世界を包み込む蒼穹。

籠としか思えなかった森。そこから抜け出た今、ハフリの心は少なくとも上向きであるはずだった。しかし、

(怖い)

ハフリの心を真つ先に占めたのは、歓喜どころか恐怖だった。足が地に付いていない状態はとてつもなく心細く、すれ違う疾風の鋭さに恐れおののく。

まるで、世界のすべてが自分に「森に帰れ」と言っているかのような感覚がした。がたがたとした嫌な震えが、止まらない。知らずのうちに、ソラトの腰に回した腕には力がこもっていた。

そんなハフリの異変に気付いたのか、ソラトが顔だけ振り向く。

「ハフリ、怖いのか？」

ふるふると首を横に振る。引き返すなどといわれたら。否、引き返すわけにはいかない。降りたがる身体と、降りたくない心が、ハフリのなかでせめぎあっていた。ソラトと目を合わせたら泣いて弱音を吐いてしまいそうで、目をそらす。ソラトが苦笑するような心配がした。

「仕方ないな」

びくり、とハフリの身体が一際大きく震える。戻ろう、帰ろう

そう言われてしまうのだろうか。続く言葉から耳をふさぎたいのに、手を使うことはできなくて。ハフリはなす術もないまま小さく体を震わせた。

しかし、今回もソラトの放った言葉はハフリの想像を超えるものだった。

「ティエン、落ちろ」

え、と思わず呟いた瞬間、身体の中身を宙に置き去りにしてきたかのような感覚に襲われる。ティエンがほぼ地面と垂直に急降下を始めたのだ。まるで矢になったかのように、空気を切り裂いていく。勢いは増し、少しでも腕の力を緩めたら宙に投げ出されそうだった。ハフリは声にならない悲鳴をあげる。ぐんぐんと地面が近づいていく。その脅威に負け、ハフリは目を伏せそうになる。

そのとき、毅然とした、どこか面白がっている様子さえ感じさせるソラトの声が耳に飛び込んできた。

「ハフリ。怖くなんかないぞ」

その言葉に、ハフリは導かれるようにぱっと目を見開いた。目の前に地面がある。ぶつかると思うのに、目が閉じられない。切羽詰っているはずなのに、心の隅で何かを待っているような心地がした。ふいに、ソラトに抱きついていて手に、温かさが伝わる。手の甲を包み込むようにそっと握られていた。背中越しに、ささやくような声が凜とした響きをたたえて聞こえる。

「大丈夫だ」

刹那、ぐわんと視界が揺れる。翼を一振りし光の粉を振りまくと、ティエンが啼いた。誇り高い、しなやかな獣の鳴き声だった。続いて、ふわりとした浮遊感があったかと思うと、今度は上昇していく。目の前に、空があった。青の世界。吸い込まれるような、その澄んだ色合い。

見ほれていると、ふるると胸元から声がした。あ、とハフリは思う。

（フウの色だ）

テイエンの速度が弱まったのを見計らって、ハフリは片方の手でフウの入った小袋を持ち上げる。黒い瞳をぱちぱちとさせて、フウがほろろと鳴いた。どこか懐かしむような、嬉しげな声音だった。見れたね、とハフリは小さくつぶやく。ハフリもフウも、本来なら見ることでできなかつた光景。それが今、目の前にどこまでも広がっている。

「怖いか？」

ソラトが尋ねる。はっとすると、ソラトと目が合った。悪戯っぽい笑みを浮かべ、笑っている。

「……怖くない」

自分でも驚いて、ハフリは言葉をこぼした。胸の高鳴りは、今や空に焦がれる気持ちから来るものになっている。ソラトが「よかつた」と口角を吊り上げた。そして、嬉しげに言葉を続ける。

「じつちやんがさ、言ってたんだ。『うつむいてるうちに、一番美しいものは通り過ぎていく』って」

顔を前に向け、独り言のように、けれどはっきりとした声でソラトは話した。

「村は貧しいし、寒いし。どうにかしたくてここまできて、それなのに何も見つからなかった」

でもさ、と繋がる声音は力強い。

「俺は、うつむかないって決めてる。大切なことを見逃すわけにはいかないし、落ち込んでる暇なんてないんだ。それに」

ばさりと、テイエンの羽音が一際大きく響いた。少しだけ方向が変わると、フウがぴいと驚いたような声で鳴いた。

もう一度振り向いたソラトは、にかりと歯を出して笑い、身体を少し斜めに倒す。目の前の景色が開かれると、ハフリは、深緑の瞳を大きくした。

視界いっぱい空と大地。いつしか太陽は地平線に寄り添おうとしている。茜に染まった地平近くの空は、徐々に上に行くにつれて青と混ざり神秘的な紫を作り出していた。雲は空の色をはじいて色

づき、流れていく。あかがねの太陽の輝きは、ティエンをさらに美しく照らし出していた。振りまかれる金の軌跡は赤みを帯びて火の粉のように光り、風にさらわれ消えていく。大地の草草は波立ち、物語のなかで見た『海』を思い起こさせた。

ソラトが、ハフリと同じ景色を見ながら呟く。

「こんなにもさ、綺麗なんだよ。世界って」

そして、「見逃せないよな」と笑った。ハフリは思わず頷く。そして、心の奥で強く願った。

(うつむかないでいたい。強くなりたい)

ゆつくりと赤を増し、夜の藍をいざないはじめた空。その変化すらも、ハフリにとってははじめて見るものだった。そして、胸が痛くなるほどに美しいと感じる。

ひたすら景色に見入っていたハフリに、ソラトが縄を差し出した。

「これで、お前と俺を結んでおいて。寝ても落ちないように、な」

そして、どこか遠くを見た。その瞳は、どこか張り詰めている。

(やっぱり、心配なんだ)

ソラトが見ようとしているのは、遙か北の地。灰に閉ざされた村。彼の故郷だと、ハフリは思った。同時に、心が痛んだ。やはりこの先でも、自分は何もできない荷物なのだろうと。

そんなハフリの視線に気付いたのか、ソラトは苦笑しながら言った。

「これから冷え込んでくるから、上着はしっかりと羽織っておけ。で、寝てて良いぞ。まだ村まで何日もかかるし、眠れるときに寝ておいた方がいからさ」

「……ソラトは？」

ソラトの瞳の下にしっかりと浮かぶくま。森までの道のりでさえ、彼はほとんど寝ていないに違いない。それなのに、ソラトはまたしても平気だというようににっこりと笑うって言うのだった。

「大丈夫」

そして、ぼんぼんとハフリの頭を撫で、優しくささやいた。

「おやすみ、ハフリ」

太陽は沈み、星たちのささやかな銀の光が夜空にまたたく。ほんのりと空を藍に染めるのは、満ちて円となった月の明かり。ハフリはその風景を少しでも長く見ていようと思った。ソラトも見ているであろう、この景色を。

そうつとソラトの背中に頭をもたれさせると、心臓の音が聞こえた。跳ねるように、駆けるように　いのちが、ソラトのなかで力強く躍動していた。

（ほんとうに、獣みたいなひとだ）

そして、あたたかい。触れているだけで強くなれるような、そんな気がしてしまう。

どれほどの間、その心地良い感覚にひたっていたのだろうか。しんとした空気の中、ふいにソラトが「あ」とつぶやいた。思わず小さく身じろぎすると、「起きてる？」と問われる。こくりと頷くと、目の前に何か差し出された。

ゆらゆらとゆれる、あわいひかり。これは、

（お父さんの）

ぼろぼろの方位磁針は、底板から薄黄緑色の光を発していた。磁石が浮かび上がり、方位をはっきりと指し示す。ソラトが弾んだ声で言った。

「夜でも使えるよう、底が蛍石で作られてたんだな。これ、本当にもらっていい？」

こくこくとうなずくと、悪戯っぽく「あとで返してとか言うなよ」と返される。そんなこと、言わない。言うはずない。だって私は、あなたの役に立ちたくてこれを渡したのだから。

（よかった）

嬉しくて嬉しくて、ハフリは笑った。すぐに夜闇に隠されてしまったその表情を見て、ソラトは一瞬とても驚いたような顔をして、

慌てたように前へと視線を戻す。

ゆったりとした静寂が、空を満たしていた。

フウがどこで覚えたのか、まるでフクロウのような声で鳴いている。どこか柔らかく、低く心地よい音に、ハフリの意識はゆっくり、ゆっくりとまどろみへと導かれていった。

かさかさ、かさかさ。歩くたびに聞こえるのは、枯れた草々が擦れ合う音だった。

ハフリがふと空を仰ぐと、寒々しい灰色をしたぶ厚い雲がすつぱりと世界を覆っている。ふうっと吐いた息は、かすかに白い。何もかもが森とは別世界だった。

彼女が今着ているのは、麻づくりのチュニックではなく、風を通しにくい素材で作られた白地の衣だ。詰襟と袖の縁に若緑色の糸で刺繍が施されている。腰には緋色の帯を巻き、同色の下裾着と、革で作られた長靴を履いていた。

そんなハフリの横を、風が草笛のように甲高い音を立てて吹き抜けていく。

肌打つ砂塵に思わずハフリは目を閉じたものの、しばらくしてからそつと瞼を持ち上げた。

目の前にそびえ立つは、山。風はそこからやってくる。山おろしと言っのだと、ソラトに教わった。

竜の山 春になると頂上から竜が降り立つように若葉が萌え、さざめくと聞いたその山には、今や枯れ木しか残っていない。大地は乾いてひび割れ、わずかな草がしがみつくように根を下ろすのみだった。

森から見た草原は、青々とした草が生い茂り波打っていた。しかし地続きであるはずのこの土地に、今や緑と言う色は存在しない。

そつと匂いをかいでも、冷たい空気が身体に入り込むだけだ。その事実、ハフリは一抹の寂しさを覚え 振り払うように首を横に振った。

(後悔なんて、してない)

自分の意思で、森を出てきたのだから。ただ、まだ慣れていないだけだ。

気持ちを新たにするように、ハフリは腕に抱えた薪を抱き直す。少し離れた場所にある樵小屋から薪を運ぶのが、彼女に与えられた仕事だった。

この地 《山鳥の民》の村テリトリに来てから七晩。

初めてここに降り立った朝に、ハフリはソラトの祖母であり、この村の長でもあるイグサに会った。ハフリをソラトの家に住まわせ、こうやって仕事を与えてくれたのはイグサである。ソラトの両親や、幼い弟も、ハフリのことを歓迎してくれた。

ただ……とハフリは薪を抱く手に力を込める。

思った通り、ここでもハフリはお荷物なのだった。力仕事らしい力仕事はなにもできず、食べるものも違うために調理も手伝えない。出される食事は温かくて美味しい。しかしそれも、恐らくは家族全員から少しづつ引いてハフリに回してくれている。

役に立ちたい。必要とされたい。気持ちばかりが先走って、焦りばかりが増していく。これでは何も変わらない。視界に水が浮かびそうになるのを、必死で堪える。もう泣かないと決めたのだ。自分との約束くらいは守りたかった。

涙を押しやり前を見る。いくつか見えるのは、白い布を張り巡らせた幕家だ。森にあった円錐状のものではなく、平らな円のような形をしていて大きい。柵のように組み合わされた木が壁を支えているため、風にも負けない強い家屋だった。

ふいに、その幕家のひとつから小さな影が躍り出る。その人物は手を大きく振りながらととと走り寄ってきた。舌足らずな幼い声が彼女を呼ぶ。

「ハフリっ」

念のためもう一度目もとを拭いて、ハフリもその名を呼んだ。

「ハルハ」

少し息を切らせてやってきたのは、ハフリの腰ほどしか身の丈のない幼子だった。ふわふわとしたこげ茶色の髪をしていて、浅葱色の衣に身を包んでいる。まだ少女にも少年にもなりきらない、どこ

か妖精めいたこの幼子はソラトの弟だ。つい最近六の年を迎えたばかりだと、初めて会った時に自慢げに言っていた。

「どうしたの？」

ハルハはあまり身体が強くない。そのため、あまり外には出てこないのが普通だった。そのハルハがわざわざハフリのもとにやってきたのには、何か意味があるはずだった。

予想は当たっていたようで、ふふつとハルハは興奮したように言っただ。

「フウがね、ぼくの名前を呼んだの」

そう言って、胸に下げた小袋を持ち上げる。そこにいるのは蒼穹の色をした小鳥で、真黒な瞳にハフリを写して小首を傾げた。

ハルハは袋の向きを変えて、フウと向き合う。真剣な顔をして「ほら」と促すように言う。

「ハルハ、だよ」

何回かまばたきをしたフウは、ハルハの声をそっくりに真似て答えた。

「ハルハ、ダヨ」

あはは、と鈴を転がすような声音でハルハが笑う。白い肌にわずかに赤がさすほど、嬉しげだった。村には、ハルハと年の近い子どもがいない。フウは彼にとって良い遊び相手のようだった。

「ね、ハフリ。聞いてたでしょ？」

小袋を空にかざすように持って、くるくると回るハルハに、ハフリはくすりと笑って頷く。何故だが、すうつと心が軽くなって行くような気がした。同時に身体まで力が抜けて、薪を取り落としそうになる。おっと、とバランスをとったのち、しばらく跳ね回っているハルハを見つめていた。

ふいに、あつとハルハが声を上げて止まる。

「ハフリ、空見て！」

ハフリは言われるままに空を見上げた。

すると、ぱつと裂けた雲間から、すうつと薄い幕のような光がさ

す。頼りない陽光だが、それは確かに雲の上に太陽があることを示していた。さらさらと揺れ、きらきらと淡く輝く。まるで踊っているかのようにも見えた。

きれいでしよう？ と傍に寄ってきたハルハが、ハフリの衣の裾を引いて、ふんわりと微笑む。ハフリも、まっすぐに自分を見つめる澄んだ瞳に向かって微笑み返した。

ここに暮らす人々は、美しい物を探すのが上手だ。乾いた景色の中から、呼吸をするように潤いを見出そうとする。厳しい環境の中、前を向いて生きる強い人々ばかりだった。

うつむいてるうちに、一番美しいものは通り過ぎていくつてさ。

ソラトの声が脳裏をよぎる。そうだ、うつむいてはいられない。

当のソラトはハフリを村に送り届けて一日寝たのち、風のようにテイエンと飛び立っていった。もちろん、雨を降らす術を探すためにだ。

自らを奮起するように、ハフリは徐々に細くなっていく光をしっかりと見つめた。

(わたしに出来ることをしなくちゃ。例えそれが小さいことだとしても)

光が雲に閉ざされると同時、鋭い風が吹き抜けて行った。くしゅん、と思わずくしゃみが漏れる。

「さむい？」

心配げに尋ねるハルハに「大丈夫」と答えた。するは、ハルハは少し考えるような仕草をしたのち、ハフリの腰に手をまわしてぴとりと抱きついた。

「こうすれば、あつたかいよ」

ね？ とくすぐったそうに笑うハルハを見て、ハフリは胸の奥がじんわりとして、なんだかむずがゆくなるのを感じる。とくと、心が震えた。

「ありがとう」

薪があるため抱き返せないのです、お礼を言うに留める。どういたしまして、とハルハはにっこりとする。

(ここにきて、良かった)

些細なことで、そう思える。頑張っていける気がした。

「薪、届けないとね」

そう言うと、ハルハが小さな手を伸ばしてきた。

「ひとつ、もっ」

ひとつ取り上げて渡すと、嬉しそうに頬を緩めた。身体が弱く、小さい彼にとっても、仕事を与えられるのは喜ばしいことなのかもしれない。

幕家へと向かう途中、ハフリの中からこほっと小さい咳が漏れる。じっと自分を見つめるハルハに笑い返した。

「大丈夫だよ」

(そう、大丈夫。なんともない)

そう思いながら、ハフリはここに来た始めての日のことを思い出していた。

山鳥の村が見えてきたのは、八度目の夜が明けたころだった。

「もう少しだ」とソラトがひとり言のように呟くの聞きながら、ハフリはうとうととしていた。翼獣　ティエンの体温は高く、座っているだけでもぼかぼかとあたたかい。ポンチョのように被った毛布は分厚く、顔をあげれば凍りそうではあったものの、俯いていればさほど辛くはなかった。そしてなにより、背中越しに伝わるソラトの心臓の鼓動が、ハフリを安心させる。とくんとくんと繰り返されるそれは、まるで子守唄のようだ。

森を出てから、暑さに強くないティエンのために、夜に移動して昼に休むを繰り返して幾日。だいたい休むのは草原のなかにぼつぼつと現れる泉の傍だった。樹があれば頭上に布を張り、その下で休む。ソラトはその大半を寝て過ごし、ハフリ自身も、ティエンに乗りながら寝てはいたものの疲れは溜まっていたらしく、ティエンの身体を枕にしてフウと一緒にまどろんでいた。

空がぼんやり赤く染まり始めると、どちらともなく起き始め、ハフリはティエンの毛並みを軽くすいてやり、ソラトは積んであった干し肉などを切り分けて、ふたりと一匹と一羽で食事をとる。ようやく意識がはつきりしてくると、会話がないことに気付いたのか、ソラトが村の様子を語り始めるのだった。

緑の草原に、ぼつぼつと白い幕家が並んでるんだ。幕家には村の細工師たちが模様を彫った扉がひとつあって、決まって南を向いている。扉を開けた家のなかには、壁一面に一針一針丁寧に刺繍された布が張ってあるんだ。だいたい女たちが縫うんだけどさ、俺には絶対無理だなんて思うよ。

犬歯をのぞかせながら豪快に干し肉を噛みちぎり、むしゃむしゃと頬張りながら言葉を紡ぐ。

村の隣にはいくつか牧場まきばがある。羊や馬が多いかな。草が無くなってきたら、違う牧場に移動させるんだ。女は毎日羊の世話をし、男は馬の手入れをする。男も女も、年寄りも子供も馬に乗れる。年に一度、物追射の祭りがあるな。馬に乗ったまま的を射て、当たった数を競い合うんだ。去年俺は、二位だった。ふたつ年下に、すごい奴がいるんだな、うん。

村のことを語るソラトは、とても生き生きとしていた。聞いていられるだけで、ハフリの心もとくんとくんと跳ねまわる。きらきらと草に降りた露を弾きあげながら、草原を風になつたかのように駆ける馬が脳裏に浮かび上がる。知らない世界が、確かに草原の向こうにある。それがどんどん近くなっていく。

ただ最後に、ソラトは小さくつぶやくのだ。ちらと目を伏せて、低く、唸るように。

今はもの寂しくなっちゃったけどな、と。

夢うつつにその言葉と、それを発したソラトの様子を思い出したとき、ぽんぽんと優しく肩を叩かれた。ふわりと一瞬風が舞いあがり、ずん、と重さが身体に戻るような感覚。ティエンが地面に降り立ったのだ。胸元の袋をみると、まだフウは眠っているようだった。

ハフリがゆっくり目をこすると、ソラトは「おはよう」と手短かに告げ「えーっとな」とどう話出すか考えあぐねているかのように言葉が続ける。

「今からおばさまに会いに行くんだけど」

また、頭をかいたり首を傾げたりとひとしきり悩んだ末、

「拾ってきたことにしようと思うんだ」

まだ目がさめやらぬハフリは、しばしその言葉の意味が理解できずに、何度か目をぱちぱちと瞬かせた。

ソラトはソラトで説明の足りなさに気付いたのか、若干慌てたように

「俺、お前を森から連れてきただろ？ それを原っぱに倒れてたのを拾ってきたことにしたいわけ」

それを聞いたとたん、ハフリの背筋がすうっと冷える。目が恐ろしいほどに冴えてしまう。もしかすると自分は、ソラトにとんでもないことを頼んだのではあるまいか。ここに来てはいけなかったのではないか。ぐるぐると考えがめぐる。知らずに身体が震える。

おそらくすべて顔に出ていたのだらう。ソラトはさらに慌ててまくしたてるように言葉を放つ。

「いや、お前をつれてきたことが駄目なんじゃなくて！ その、変な誤解を生むかもしれないからなんだ！」

誤解？ と尋ねそうになり、ハフリははっと口をつぐむ。ソラトがそうしたいのなら自分は従うまでだ。彼が話したくないことならば、訊かないほうがいい。ぎゅうつとこぶしを握る。無意識にくちびるを引き結ぶ。大丈夫、大丈夫 本当、ほんとうに？

「大丈夫だ」

まるでハフリの心を読んだかのように、ソラトは言った。力強い、まっすぐな、ハフリの心をとらえる声。

そしてハフリと目を合わせて「だから」と困ったように眉を下げて、

「そんな顔すんなよ。本当に、大したことじゃないんだ」

こくりと、ハフリは思わずうなずく。不安がゆっくりと心の奥に帰っていく。ソラトはにかりと笑った。

「じゃあ、行こう」

自然に手を取られ、導かれる。少しかさついた、けれども大きくて温かいソラトの手。そつと、握り返すと、思いかけず握り返される。不安が帰って行った自分の奥から、今度は熱にも似た何か湧き上がってくる。身体が、顔が、あつい。とても、あつい。

この感覚が一体何なのかはわからない。ただ、今は、

(小さな声でも、小さな力でも、このひとは気付いてくれる)

そのことが、どうしようもなくうれしかった。

(2) (後書き)

今回の更新はここで切れますが、次回もまだ回想が続きます。明日の更新もよろしくお願いいたします^^

ハフリがいざなわれたのは、村の一番奥にある幕家だった。他のものより一回り大きく、扉には両翼を飛び立つように広げる精緻な鳥の彫刻が施されている。

扉の前まで来ると、ソラトは一度立ち止り深呼吸をした。思わずハフリも息を吸ってしまう。そして、彼が扉に手をかけた、その時

「ソラトか」

年老いた、けれどもどこかハリをもった声とともに響いたのは、ごんという鈍い音。ソラトが扉を引くに先んじて、内側から扉が押し開けられたのだった。結構な勢いで開けられたそれは、見事にソラトの顔に直撃。ハフリの手を握ったまま、ソラトは屈みこみ悶絶する。ハフリは一瞬呆けた後、顔を抑えるソラトを慌てて覗き込む。幸い血は出ていないようだったが、相当痛いようだ。

「まったく、山鳥の民の血を引いているとは思えぬほどに勘が鈍いな、ぬしは」

そう言ったのは、扉を開けた小柄な人物。下に向かってはさばさと広がる、焦げ茶の髪をした老婆だった。鷲鼻も相まって、その姿はまるで小鬼のようでもあり、ハフリは思わず身をすくませる。

すると、ぎよろりと見開かれた髪と同色の瞳と視線がぶつかった。少し黄ばんだ白目の中央にあるのは、樹液のように濃く澄んだ色をした瞳だ。ソラトの血縁であると即座に理解する。ただ、ソラトのそれより随分と威圧感のあるものではあったのだが。

一方ソラトは額をさすりながら立ち上がってぶつぶつと「おばばさまがおかしいんだよ」こぼした。続けて、

「なんで俺が扉の前にいるのがわかるんだか。というかこんな朝早く起きて集会用の幕家で待機してるんだよ」

すると老婆は頭三つか四つ分かは上にあるソラトの顔を仰ぎ、く

くくと笑いながらおかしげに言った。

「でもまあ、ここにおると思つて、来たんじゃろ？」

ソラトは肩をすくめて答える。

「ま、そうだけど」

ハフリは二人のやりとりを眺め、目をぱちぱちさせていた。すると、二対の焦げ茶の瞳が改めてハフリを見つめる。ソラトが口を開いた。

「あ、おばさま。この子は」

言いかけたそのとき、「おぬしは」と老婆が声を発する。

「金色の髪に緑の瞳……《唄鳥の民》じゃな」

鋭い光を秘めた目がハフリを射抜く。自分のすべてを見透かすかのような視線にたじろぎ、無意識に一步後退する。地面が乾いた音を立てる。

すると、かばうようにソラトがハフリの前に出た。

「原っぱに倒れてんだ」

若干かたい声で、ソラトはそう言った。ハフリはただソラトの背中を見つめることしかできない。

老婆は一度嘆息して、短く一言。

「ソラトは一度下がれ」

な、とソラトがたじろぐ。でも、と言いつのるが、相手にされない。

老婆は身を乗り出し、ハフリを見て節くれだった手で手招きした。

「おいで」

ソラトが振り向く。どうしていいかわからないような、心配そうな顔をしていた。

そんな彼を見て、ハフリは考える。このひとは、大丈夫だと言つた。言ってくれた。

あの、とささやくように問いかける。

「ほんとうに、ここにいてもいい？」

ソラトの答えは簡潔だった。

「いいいい」

それでいて、揺らぎがなかった。

ゆつくりと、繋いでいた手を解く。最後の指が一度ほどけて、けれどももう一度指先が触れ合う。一瞬の接触だったのに、ソラトの温かさがハフリに流れてくる。

ハフリは幕家へと、一步踏み出した。

………

幕家に一步入った瞬間、ハフリは息をのんだ。

中に入ってみると天井は案外高い。広さも三、四十人が余裕で輪になって座れるほどだ。地面には敷布が敷かれている。

そして、何よりハフリを驚かせたのは、壁だった。

ソラトに聞いた通り壁はすべて、刺繍の施された布に覆い尽くされていた。

唄鳥の民は直線によって作られる幾何学模様を好むが、山鳥の民の刺繍はとても複雑だ。曲線を使い、花や雲のような模様を連ねたり、はたまたま葡萄のような刺繍を間に施したり。規則的な模様のなかに、時折鳥が飛びかい、馬が駆ける。色も多彩だ。金色や銀色の糸も使われており、きらきらとまぶしく光る。布はキルトから、つ

やつやとした光沢を放つものまであった。

これを、ひとの手が作るのだ。一針一針、丁寧に、時間をかけながら

すごい、と思わず言葉がこぼれる。

すると、くつくつと、笑う声が出た。横に人がいることをすっかり失念していたハフリは、小さく「すみません」と付け加える。

「ここは山鳥の民が大切な時に集まる場所でもあるからね。一番綺麗な刺繍をかざってあるのさ」

老婆は隅の方から座布団をひとつ手に取る。これにもまた、水の波紋のような刺繍が施されていた。それをぼん、とハフリの前に置いて、自分は入口から見ても一番奥にある木製の椅子に腰かけた。視線で座るように促されハフリも座布団の上に正座する。そして横にある台から水晶玉のようなものを取り上げて、ひと撫でし「さて」と。よく通る声で話を始める。

「わしはイグサという。この村の長だ。ソラトの祖母でもある」
ハフリがこくりとうなずくと、老婆　イグサは「さて、どうしたものかね」とひとりごち、端的に言い放った。

「わしはお前さんがここに居ることに異論はない。ずっと居たって構わない」

だがね、と続けて

「お前さんは、いつまでいるつもりでいるんだね？　森の外であるこの地に」

びりりつと、ハフリの中をしびれに似た何かがほとばしる。脳裏に浮かぶのは、ひとつのこと。

唄鳥の民は、森の外では生きられない。

(このひとは)

一体、どこまで知っているのだろう。セトだってそうだ。どうして『長』というのは『外』の世界に深く通じているのだろうか。何かをつかんだような、けれども何か引つ掛かっているような感覚

がする。

どうするんだね、ともう一度問われ、ハフリははっとした。そう
だ、他のことに気を取られてはいけない。ソラトも、長であるイグ
サも、ハフリがここに居ていいといった。ならば自分は、

「置いていただけるなら、いつまでも」

居させてくださいと。

森との別れも、死期が近付くかもしれないことも、ハフリにとっ
てはあまり実感がなく、恐れも不安もなかった。ただ、変わりたい。
新しいこの場所で、自分の居場所を作りたい。そう、強く思う。見
落としたもの、見返さないものの大切さも忘れて、ただ思う。

一方イグサは、あいまいな笑みを一瞬浮かべると、そつと一息つ
いて、

「ここで暮らすからには、村の一員だ。しっかり働かせるからね」
ハフリは目を見開く。イグサを見つめる。ぱあつと内側に光のよ
うなものが生まれて、身体が弾けてしまいそうな気分になる。精一
杯大きな声を出して、ハフリは言った。

「はい！」

… … …

幕家を出ると、ソラトがやってきたところだった。「なんにもな
かった？」と問われ、こくりとうなずく。するとさらに「ほんと？
と尋ねられ、こくこくと首肯すれば、ほっとしたような顔をして「
よかった」と。

実はさ、とちよつと息をひそめてソラトは言う。盗み聞かれるの
を恐れるかのように。

「小さい時にちょっと房飾りが欲しくて馬の尾の毛を切ったことがあるんだけど。そのあと村で一番高い木に一日中縛り付けられたことがあるんだよね。怒るとすげーこえーの、あのひと」

身体を小さくしながらそんな事を言うソラトに、ハフリはくすりと笑ってしまふ。ソラトは不服そうに「冗談じゃないって」とこぼした。そして少し寂しそうに笑って付け足す。

「その樹も、今は枯れちゃってるんだけどな」

そんなソラトの表情をどうすることもできなくて、ハフリははがゆくなる。何か気のきいたことが言えればいいのに。何かを彼にしてあげられれば良いのに

「まあ、可愛いおじょうさんだわ。ほら、あなた、こっちこっち」女性の声が出たかと思うと、人影がこちらに歩み寄ってくる。ひとはソラトよりも大きな男性で、ひとはハフリと同じくらいの背をした女性。そしてひとは、とても小さい。そして、三人ともソラトと同じ焦げ茶色の髪と瞳をしていた。

ハフリがおろおろしていると、ソラトが人影を差しながら紹介する。

「父さんのリクヤと、母さんのオウミ、あと弟のハルハ」

ハフリは急いで「よろしくお願ひします」と頭を下げる。

ぱたぱたと駆け寄ってきたのは、オウミだった。人懐っこい笑みを浮かべ、ハフリの手を取る。そして早口に言った。

「はじめましてハフリさん。どうぞこれからよろしくね。あのね、山鳥の民は遊牧の民でね、移動しながら色んな地に住む人を見るのが大好きなのよ。にしても綺麗な髪と瞳の色！ 肌もきれいだし、若いって素敵ね！」

あまりにはぱぱつと色々なことを言われて、ハフリが目をパチクリしていると、横からリクトが呆れたようにつぶやく。

「驚いているだろうが」

それにオウミは、まるで子供のように頬を膨らませて

「何よあなた、嬉しくないの？ 私たちの息子が、『外』からこんな可愛い子を連れてきたのよ。つまりこの子は」

何かを言いかけたオウミの口を、慌てたようにソラトが抑える。そして、声を潜めながら叱りつけるように「だから、そういうのじやないって！ 拾ってきただけなんだよ！」と。

ハフリが置いてかれていているような気分になっていると、服の裾を引っ張られる。ハルハだった。ハフリはハルハと目線を合わせようと屈みこむ。

ぺと、と小さな手がハフリの頬を触り、前髪をどける。そしてハルハは、幼くやわらかい声で「きれいな目」と、なんのてらいも含みなく言った。そして、にっこりと笑う。そのまっすぐさと愛らしさに、ハフリは思わずほほえんでしまう。あのね、とハルハは続けて

「ぼく、ハルハ。ついこの前ね、ろくさいになったんだよ」

そうなんだ、とそっと焦げ茶色の髪をなでてあげたとき、「フウ」と胸元から声が出た。ハルハは驚いたように小鳥を覗き込む。そして、つぶやいた。

「空の色」

「フウって言うんだよ」

フウ、とハルハはその名前を舌で転がすように呼ぶ。そして、まぶしげに、それこそ本当の空を見上げたみたいに笑う。

ぼん、と肩を叩かれて上を見ると、ソラトと目が合った。何か言わなければ、と思う。このどうしようもないくらいに溢れてくる気持ち、言葉にしなればと思う。けれど喉はうまく動いてくれない。

わかっているとゆうようにソラトはうなずいて、やさしい声がハフリの耳に飛び込んでくる。

「ようこそハフリ、山鳥の村へ」と。

（ 3 ）（後書き）

ここで回想は終わりです。少し長めになってしまいましたが…^^；
これから色々動きだすと思います。どうぞよろしくお願いします。

ハフリ、と自分を呼ぶ声と、ハルハの肩に乗ったフウが鳴く声に、はたと回想から現実に戻される。目線を下にやれば、きよとんとした顔をしたハルハが自分を見上げていた。気づけばソラト一家の暮らす幕家の横??薪置場までやって来ていたのだった。

「あら、おかえりなさい」

ハルハと薪を並べ終えたとき、ひよっこりと幕家の反対側から顔を出したのはオウミだった。手に持っているのは木桶で、中には何か黒いものはいっている。

ととととハルハが歩み寄ってくると、やれやれと言ったように笑って、

「もう、ハルハ。あまり外に出ないでって言ったのに。今日はもうお家に入ってたね」

はい、とハルハは答えて、フウと一緒にばたばたと幕家のなかへと入っていく。今度オウミはハフリに目をやって「ハフリちゃんもお疲れさま」と。

ふとハフリはオウミの手にした木桶の中身が気になって尋ねる。

「あの、それは」

「ああ、これは羊のフンなの。燃やすと火が長持ちするから」

フン、と思わず繰り返す。その一言に逡巡と少しの嫌悪に似た何かを含んでしまったことに気づいて、ハフリは激しく後悔する。本当は、その仕事は私がやりますと言うべきなのだ。なのに、なかなか喉が動かなくて。ハフリの奥の方からせり上げてくるのは、そんな自分への嫌悪感だ。まるで自分の中に正反対の人物たちが相対しているようだった。どうしよう、どうしよう??

オウミはそんなハフリを見て、一瞬手を伸ばしかけたが、止めた。恐らく、ハフリの胸中を察したのだろう。代わりに、ふわりとほほえんだ。その笑みは落胆というよりは困ったような雰囲気なたたえ

ていて、ハフリはさらにどうしていいのかわからなくなる。きつとオウミを、傷つけた。くちびるが、わななく。あの、とこぼれた言葉はあまりに弱々しい。

「わたし、私、」

「少しずつね」

落ち着いた声音が、波紋のように空気に広がる。

「少しずつ、慣れてくれたら、嬉しいわ。急がなくても良いからいつか、ね」

小さな子供に言い聞かせるかのようなそのやわい声は、ハフリのなかにゆっくりと染み込んでゆく。オウミはまだ微笑んでいた。その笑みは、なぜだろう、今度はとても大きく見える。空よりも大きく、すべてをまるっと包み込むような。

はい、とハフリは言葉を返す。小さな声だったろうに、オウミはきちんと聞き取って「良い子ね」とささやいた。ハフリはどう反応しているのかわからない。

思わず目を伏せてしまっていると、オウミの声が続いた。

「今日は、お仕事はこれぐらいでいいわ。あとは家の中にも良いし、外を回って来ても良いし」

そして最後に「また明日、頼むわね」と付け足した。

ぱら、と黄ばんだ羊皮紙をめくる。乾いた冷たい風が耳元を吹き抜けていく。栞代わりになっている額当てに指をすべらせたりしつつ、ハフリはぼんやりと本を眺めていた。

現在ハフリ、村はずれの小屋の壁に寄りかかって座っていた。何があるのかはわからないが、幕家が大半を占める村の中で、この建物だけが木造だ。あまり村人にとっては重要でもないように、ひとはやって来ない。??森はずれの小さな木と同じような場所。

結局、結局自分は、何も変わっていない。役立たずのままなのだ。

それを思い知らされてしまって、その上オウミまで傷つけて。胸の中でもやもやとしたものがどんどん大きくなっていく。

その時だった。

ざ、と荒っぽく地面を蹴る音が響いた。ハフリは思わず身をすくませ、そろりそろりと目線を上げていく。革の長靴、薄水色の下裙着、紺瑠璃の帯、そして上着。さらにその上にあるのは少女の顔。髪の色は青みがかった黒。前髪を一房編み込みにし、大きく出ている額が目立つ。少しつり上がった眉尻に、きゅっと噛み締められたくちびる。ハフリを見つめるは、苛烈な光を宿した夜空色の瞳。

山鳥の民でありながら、ソラトとは全く違う、容姿。

なぜだろうか、この村の人々は《山鳥の民》を名乗りながらも、共通した容姿を持たない。それはハフリが村を見始めてから最初に抱いた疑問であって、現在もまだ解せていないものだった。

そして?? 目の前のことから若干脱線したことに考えが及んでしまふのは、ハフリの悪い癖なのかもしれないなかった。はっとしたときには、少女はさらに眉尻を吊り上げ、もはや思い切りハフリを睨んでいる。しまったと思ったと同時に、高い声が空気を貫く。

なんの緩衝剤もない、剥き出しの容赦ない言葉。

「あなた、自分が役立たずだったことわかってるんでしょ？」

そして何より、それはあまりにも本当のことだ。

ハフリは何もできなくなる。指先にかさかさの紙の感触を感じながら、ただ固まって少女を見上げる。どくどくと、低い音で心臓がなり、内側から鼓膜に響く。高い、耳鳴り。まるで続く相手の声を遮ろうとするかのよう。

けれどそんなものは、少女の高く鋭く、それでいて屈折のない声の前には、全く意味をなさない。乾いた空気はよく音をすいこみ、その音はそのまま、一瞬でハフリの耳に飛び込んでくる。

「あんたみたいな目をした奴、大嫌い」

心が、えぐられるような感覚。痛い。痛い。言葉がどこかに突き刺さっているかのようにだった。手で抜いてしまえたらどんなに楽だろう。

思い返せば、この少女と話したことはない。なのにこんなにも動揺している自分に驚く。自分が臆病だから？ 単に相手が怖いから？
??違う。

彼女の声が、山鳥の民の総意に聞こえるからだ。

ソラトの声に、聞こえるからだ。

やめて、と言いたいのには口は動かない。やめてという資格なんてない。だって彼女の言葉は真実だ。

以前森でキリと相對した時は、腫れ物に触るかのような気遣いが重かった。いつそ本音をぶつけて欲しいとさえ思った。けれど、それは身勝手だったと思ひ知る。目をそらしたい事實は、目の前に突きつけられた瞬間、逃げ場をなくさせるのだ。もう、戻れない。聞くしかない。

ほら、と少女の口調に嘲りが混じる。

「自分はいそいそうって顔をしてる。それで辛いことから逃げ回ってんのよ。こんなところでこそこそして、なんになるの？ あんたは何がしたいの？」

一息置いて、少女は目をすがめる。まるでハフリ奥底を覗き込むかのように。何かを見いだそうとするかのように。

なんで、と少女の口からかすれた声が漏れる。なんで、なんで、ソラトは。

「あんたみたいなのを連れてきたんだろう」

それは独白で、あまりにも小さなつぶやきだった。しかしハフリの耳に届く。いままでで一番大きく、ハフリの内側で響く。

そんなの、ハフリにだってわからない。ただ自分は、森から出たくて。ソラトについてゆきたくて、ここまで来ただけなのだ。

(私は、それでいいの?)

ぐるぐると、思考が巡る。ここままで良いはずがない。何かを変えなければならぬ。けれどどうすれば良いのかわからない。

じわりと浮かぶのは、涙。ちらりと、ずるい思考が脳裏をよぎる。このまま泣いてしまえば、彼女は立ち去ってくれるのではないだろうか。

でも、でも。自分は泣かないと決めた。この約束を守ろうと決めたのだ。嗚咽を漏らしそうになる喉を気力で押さえつけて、口を真一文字に引き結ぶ。

けれども、ふるふると身体が震える。視界も滲む。

そして少女も言葉を休めない。ふつと苦々しげに笑って声を放つ。

「泣くの？ 泣けば良いじゃない。あたしは構わないけど？」

そうして、と続けて。

「あんたは、涙と一緒に色々なものを流して捨てていくんだわ。うつむいたまま、色々なものを見逃していくのよ」

バツカみたい、と付け足された言葉が聞こえたけれど、それはすぐに冷たい風がさらっていつてしまった。代わりにハフリの耳に聞こえた気がしたのは、声。

うつむいてるうちに、一番美しいものは通り過ぎていくつてさ。

そして、思い浮かんだのは、歯を見せてにやりと笑った顔で。

すうっと、涙が引いていく心配がする。ソラトを思い出すだけで、少しだけ、ハフリは強くなれる。噛み締めていたくちびるを緩めれ

ば、緊張もほぐれて??ハフリはやつと、しっかりと目の前にいる少女を見たような気がした。

彼女の夜空色の瞳には、怒りと侮蔑の間に、強い光があった。ソラトと同じ、まっすぐで強いものの光だ。ハフリにはないもの。手に入れられないもの。そして欲しいと願うもの。

わたし、と思わず声が漏れた。

「山鳥の民に、なりたい」

目の前の人物がきよんとしているのにハフリはたじろいでしまつて、急いで「……です」と付け足す。

深い藍色の瞳が何回か瞬いて、あたりにつかのまの静寂が満ちる。少女は一瞬ハフリから目をそらして、どこか独り言のように言葉をこぼした。

「バツカじゃないの。あんたやっぱりなーんにもわかってない」

そしてもう一度視線をハフリに戻し、気を取り直すように小さく咳払いをする。そして、は、と乾いた笑いに乗せて「無理よ」と告げた。言葉が胸に刺さるのは、ツムギがハフリの不安を的確に示しているからだ。そして、彼女の姿が、彼女の目の中の光が、ソラトを彷彿とさせるから。彼にそう言われているかのように錯覚してしまっただった。

それでも、尚もツムギは繰り返す。あんたじゃ無理よ。あんたは???

「はい、ツムギそこまでな」

耳慣れない訛をもった声とともに、ふいに視界に入ってきたのは、鮮やかな赤だった。少女を後ろから抱き込むようにして現れたのは、ひとりの人物。束ねられ、しっぽのように風に舞うは、腰まではあるであろう長さをした髪。その色は炎よりも夕焼けよりも鮮烈で、深い色をしていた。

整った眉に、どこかいたずらっぽい愛嬌のある顔立ち。歳はハフリと同じくらいだろうか。声は少年のものであったが、もしかすると少女なのではと思わせる。

少女?? ツムギ越しに、少し赤みがかつた茶色の瞳と目が合うと、にやりと笑い返された。思わず会釈を返すと、その人物?? 恐らく少年?? は口を開いて、

「これからハフリちゃんはおれとおシゴトしに行くんやもんなー?」
おしごと、と思わずハフリが繰り返すと、そうそうとうなずかれる。次に反応を示したのはツムギだった。肩越しに振り返ると、眉根を寄せて気に食わないといった雰囲気明らかに出しながら、

「仕事ってなによ」

んー? と少年は一瞬考え込んで答える。

「馬の手入れ?」

「は? それは男の仕事でしょ!? しかも今明らかに考えたですよ!」

「そんなことあらへんって」

けらけらと笑い、ひらりとツムギから離れると、少年はおもむろにハフリの前にやってきて、手を取った。見かけにそぐわず固い手のひらに、一瞬ハフリは驚く。目の前にあるのは、赤茶色の瞳。ソラトよりも幼く、それでいて食えない笑顔だった。

「ってことで、いこか?」

促され、ハフリは立ち上がる。落としそうになった本と額当てを慌てて抱え直すと、ツムギと目が合った。ツムギは相変わらずハフリを、そして少年を睨んでいるが、これ以上は何も言わないようだった。

わけもわからずただ引つ張られながら、ハフリは考える。これで良かったのだろうか。彼女の、ツムギの前から逃げるように立ち去ってしまった。向き合わなくて良かったのだろうか。

?? 彼女が投げつけ、突きつけて来た『ほんとうのこと』と。

とん、たん、とととん。手を引く少年の足取りは軽快だ。尻尾のような長い赤毛は揺れては跳ね、時折ハフリの顔をくすぐる。まっすぐでつやつやとした綺麗な髪だった。思わず自分の、細くくせのある小麦色のそれと見比べてしまう。三つ編みにしているのだから、ほどいたらどうしようもなく広がるからなのだ。

周りにちらほら見えるのは羊や山羊たち。村を少し抜けて、牧場に入ったところに来ているのだった。たしかこの先には厩しゅまやがある。

そして、引つ張られるがままに走りながら、少年の名前を聞きそびれていることに思い当たった。さっきの少女？ ツムギの名前だつて、この少年が呼ばなければ知らないままだったかも知れない。

この村でハフリが名前を知っているひとの数なんて、両手で足りるほどだ。なかには薪運びの時にすれ違って声をかけてくれる人もいるのに、会釈を返すので精一杯で。

うつむくと、長い前髪がはらりと視界を覆う。

「それ、邪魔とちゃうん？」

歩調が緩み、少年がくるとハフリに向きなおる。思わずきょとんとしてしまうと、少年は空いている手で自分の開けた額を指差して「ま、え、が、み」と言った。確かに邪魔ではあるのでくりと頷くと「切らへんの？」と尋ねられる。なぜだか、その問い頷くのは逡巡してしまう自分がいた。

ま、いつか、と少年は呟いて、ハフリの手をぎゅっと握り直す。

「紹介遅うなつてごめんな？ オレはスオウって言っくんよ。どーぞおおきに」

目尻にしわを寄せてにしゃつと笑う少年？ スオウは、髪型も相まって中性的な顔立ちをしている。体つきもソラトと比べると若干細身だ。しかし何よりハフリが気になっていたのは、彼の耳慣れない言葉遣いだった。同じ言葉でも発音が微妙に違ったりする、なん

だが陽気でどこか食えない雰囲気を持つ、訛。

尋ねても良いのだろうか。気を悪くしたりはしないだろうか。いちいち、考えてしまう。けれども、訊かなければなにもわからない。知らないままにいるしかない。

何かが、自分には足りない。

くちびるをそつとなめる。言い表せぬもやもやと、問うことに対しての恐れを、唾をとまごくりと飲み込み、喉を震わせた。

「その、話し方は、」

ああこれ？ とスオウはこともなげに言っ

「これは《赤鷹の民》に伝わってる話し方やな。ハフリちゃんと話したんは初めてやもんね。他にも訊きたいことあったら遠慮なくきいてええに？」

気を遣って先回りしてくれているスオウの言葉に感謝しつつ、問いを重ねてみる。

「スオウ、は《山鳥の民》じゃないの？」

それに、ツムギだってそうだ。ここに住む人々は、唄鳥の民のような共通の容姿を持たない。それに、言葉遣いすら違う。まるで別々の領域に暮らす民がここに集まっているかのようだった。

一方スオウは、

「……ソラトのやつ、ほんまなんも教えんまま、出てったんやなあ」
仕方ないやつや、とこぼす。そして「ちよい、待って」と言ったかと思うと、指を口にくわえ、ぴいと甲高い音を鳴らした。続けて聞こえるのは、土を蹴る音。音のした方向に目を向ければ、一頭の馬が駆けてきていた。角度次第では赤みがかつても見える、茶褐色の毛並みをした馬だ。みるみるうちに近づいてきたその馬は、躊躇いなく顔をスオウにすり寄せる。スオウはよしよしとその顔を、首を、黒いたてがみをなでる。

「ホムラって言うんよ。オレの相棒」

促されたようにスオウの愛馬もあるじとともにハフリを見る。瞳は黒曜石のようで、まなざしはやさしい。ティエンとはまた違う、けれども惹かれる目をしていた。

すると「さてー」とスオウはつないでいた手を放す。そして、突然、ハフリの腰あたりを抱きしめ一気に持ち上げた。え、え、と状況がわからず目を白黒とさせると「ホムラにまたがって」と言われる。

「どうして、」

「イグサさまにちよいお使いを頼まれたんよ。ハフリちゃんにも一緒に行ってほしーなーと」

このまま抱っこしてるのもオレはいいんやけどー？ と言われたら、ハフリはホムラに乗るしかない。恥ずかしいやら驚いたやらで、頬が紅潮しているのがわかる。ティエンより大分高さのある馬の身体に、どうにかこうにか乗り上げると、前に軽々とスオウがまたがった。顔だけ振り向いて笑う。

「さーてじゃあ、オハナシしながらいこかー。おつかいに」

：
：
：
：
：

ふたりを乗せながら、茶褐色の馬は枯れた草の上を進む。開けた景色には灰色の空とくすんだ色の草原があるのみで、人影は見当たらない。ゆったりとした速度で歩きつつも、村からはだいぶ離れたところであった。乾いた風がスオウの長い髪とハフリのお下げをもてあそんで行く。スオウはソラトと比べてハフリとあまり体格差がないため、少し身体を傾くと前がよく見えた。落とされないようにスオウの腰に控えめに手を回しつつ、ハフリは彼の話に耳を傾ける。

なんでも近くを行商の民である《狗鷲の民》が通るそうで、そこにイグサから頼まれたものを買いに行くらしい。商いを生業とする人々と言えば《虎鷄の民》だったハフリは、他にも同じような民がいることに驚く。

「今日買うんは金屬類と、あとは糸や綿とかやなー」

「何かと交換するの？」

「だいたい布と交換するなあ。ハフリちゃんも見たやろ？ 結構このあたりじゃ有名やねん、あの刺繍」

しかし、ハフリが見たところスオウはそれらしいものを持っていない。怪訝なまなざしに気づかれたのか、スオウに

「あー、布はな、」

大丈夫、といたずらめいた口調で返される。首を傾げたハフリを、スオウはまーまーといなして「そんで、」と切り出す。

「今の《山鳥の民》は混血の民やな。もとは山奥に暮らす黒目黒髪の民やったんやけど、それが山を出て流浪の民になって、他の血と混ざり合い今に至っとる」

混血の民。思わずその言葉を口のなかで繰り返す。そつと自分の心臓に手をあてがう。とくとくと、血の巡る音がてのひらに伝わる。ハフリのなかには、ふたつの民の血が流れている。そして、ここに暮らす人々もそうなのだ。

「一時期はみんな好き勝手に色んなところで生活しとったらしいんやけど、今は基本まとまっとるな。そんで、とりあえず先祖が《山鳥の民》なら皆《山鳥の民》。そんなかで、だいたい皆もう一つの民の名前を冠しとる。まあ家の識別のためやな」

実際、と続けて、

「もう血も混ざりすぎて誰がどの民って言うのも正確にはわからへんし。結構皆好き勝手に名乗っとるな。あーでも“チカラ”の種類で区別したりもするかもしれへん」

「チカラ？」

そーそーとスオウは相づちをうつて、自分の赤茶色の目を指差した。

「オレら《赤鷹の民》やと、視覚と聴覚やなー。もとからよう見えるし聞こえるし、本気出したらかなーり遠くのことまでわかるねんで?」

にひひ、と自慢げに笑って、ホムラの手綱を繰りつつスオウは言葉を紡ぐ。

「せやから、ハフリちゃんのちっさい声もオレにはよう聞こえとるよ。まあもうちよい大きいと助かるけどなあ」

《山鳥の民》の女はみんな騒がしいやろ、と苦笑交じりに付け足した。傷ついたというのは大げさだが、なんだかちくりと胸が痛むふと考える。ソラトももしかしたら、耳が良いからハフリの声が聞こえていただけなのかもしれない。それは思ったよりもハフリの心に重く暗い何かを落としていく。その時ふいにホムラが止まって足を踏んだので、ぐらりと身体がかしいだ。ぼすつとスオウの背中に顔をうずめてしまっ。

「う、ごめんなさい!」

しかしスオウはそれには反応せず、振り向くと遠く後方を見るように目をすがめる。眉を寄せ、息を潜めて。

まずいな、と小さく呟いた。

「逃げんで」

ホムラ、と愛馬の名前を呼んで脇腹を軽く蹴ると、ホムラは進み始める。徐々に地面を蹴る回数が増えて、速度が上がっていく。

「なに、が」

あつたのと、切れ切れに問うと、スオウは前を見据えながらかたい口調で答えを返す。

「ちよつとまずい奴らに見つかったかもしれへん」

人攫いや、と付け足されるのを聞いて、ハフリは目を見張る。はつと後方を振り向くと、黒い一点が見えた。乗り手こそ見えないが、明らかにこっちへ向かってきている。

スオウはホムラに呟く。早く、もつと早く。風がホムラのしなやかな身体にまとわりつき、一体となる。ごう、と耳元で風が鳴り、乗っているハフリは上下に揺さぶられた。下手をすれば振り落とされそうで、一瞬ためらったもののスオウにしがみつく。

走る。走る。走る。ホムラがぶるといえない。蹴った土は煙となり、風すらも置いていくかのような速さ。しかし追手はどんどんと追い付いてくる。黒い馬が、猛然と迫る。ホムラの走りも相当速いというのに、明らかに差は縮まっていく。

黒馬の騎手の顔が見えそうなまでに近づいてきたとき、たまらずハフリは目をそらした。先刻謝ったのも忘れて、スオウの背に顔をうずめる。知らずのうちに腕には力がこもる。このままでは追いつかれる。

ホムラの走り方はある種の洗練された何か。風すら従えるようなものを感じさせたが、黒馬のそれはあまりに荒々しい。蹄が地面を削っているかのような音がする。風を破り、切り捨てるかのような走り。

後方から、声が聞こえた。何かを叫んでいる。怒気をはらんだ、高い声だった。

高い？

あのような馬に乗っているのだ、乗り手も相当いかつい人物ではないのだろうか。思わずそうつとふりむくと、黒馬の顔が眼と鼻の先にあった。きゃ、と小さく悲鳴が漏れる。このままじゃ、捕まる、このままじゃ

「ちよつとなんで逃げんのバカじゃないの待ちなさいよスオウ！」

一息に叫ぶ少女の音が聞こえたかと思うと、黒馬はものすごい勢いで。ホムラを抜かしていった。先回りとかそういうものではない

い。直進していく。止まれないようだった。

一方、ホムラは歩調をゆるめる。へ、とハフリは思わず声を発してしまふ。一体なんだというのだ。それに、この声はたしか、

「ああこら止まりなさいよバカタマー！」

青みがかつた黒髪の乗り手が、黒馬の上で憤然とした声を上げる。スオウが「乗り手に似たんやなあ」ののんびり呟いて、本当はウバタマって言うんよとハフリに耳打ちする。

ハフリはまだ状況がつかめずにきよとんとしたまま、スオウにしがみついていた。スオウはそんなハフリを見て、たまらずと言ったように嘖き出す。

「うそや、人攫いなんて、うーそ」

まあおるつちやおるけどな、ここにはおらへんよ。だましてごめん？ と謝ってる割にまったく悪気がない口調で言う。

「ツムギらの一族は《織鶴おりじろの民》。手先が器用で、刺繍も得意」

いまだに黒馬　ウバタマと格闘しているツムギを横目に、スオウは言葉を発する。よくよくウバタマを見てみると、なにやら荷物を積んでいる。おそらくあれが、ぬの。ヌノ。布。つまりは、

「えーと、もうしがみつかんで大丈夫やに？ オレとしてはうれしいけど」

いやはやまったく役得やったわ、とあっけらかんと言うスオウに、やっとなんてを理解したハフリは、咄嗟にあわてて手を放し

怪我こそなけれど、見事に落馬したのだった。

落馬をした。怪我はしなかった。けれども問題はそこではなかった。

落下した拍子に、ハフリが上衣の合わせに入れていた本がこぼれ落ちた。古びた本の背表紙は地面に叩き付けられた衝撃に耐えられずに裂け??結果、紙がまるで生き物のように、風とともに草原を走り出す。

父からもらった本。森を出てきた今となつては、ハフリと父をつなく唯一のもの。やすやすと風に引き渡すわけにはいかなかった。怪我こそ無かったものの鈍く痛む身体にも構わず、転げるように紙を追いかけ手を伸ばす。風に言つても仕方のないことなのに、祈るように心の中で叫ぶ。待つて。待つて。持つていかないで。

ハフリの尋常ならざる様子を察したのだから、ツムギとスオウも急いで紙を集め始める。そして??

「もー、なんなのよこの紙の量!!」

ツムギが地面から黄ばんだ羊皮紙をつまみ上げ、我慢できないように声を上げた。ハフリは「すみません」と縮こまりながら、ツムギの足元ではためいていた一枚を急いで右手で拾う。左手に抱えているのは紙の束だ。

枯れ草が覆う地面を、かさかさとした音を立てながらくると紙が踊る。空に舞い上がりそうになったそれをぱつと掴み取ったのはスオウだった。いやはや、とおどけたように、

「草原で紙拾いっつーのもなかなか貴重な体験やな」

ちろと舌を出して言う。それを聞いたツムギは眉を吊り上げ、青筋を浮かばせながら叫んだ。

「すべてアンタのせいよバカスオウ!!」

ツムギの悪態は尽きない。ぶつぶつと「信じられない」「バツカ

じゃないの」と繰り返す。けれども手は動かし続けており、ぱぱぱと数枚をまとめあげたかと思うと、突きつけるようにハフリに差し出した。

慌てて受け取れば、苛立ちもあらわな紺色の瞳と目が合った。ごくり、と思わず唾を飲み込む。悪いのはお前だと言われるのだろうか、と、身構えてしまう。

ツムギはそんなハフリを見て一瞬口を開きかけたものの、ふんと鼻息荒くそっぽを向き、紙を追いかけていたスオウの方につかつかと歩み寄る。そして、「ん？」と顔だけ振り向いたスオウの背中を、無言のまま思い切り蹴り飛ばした。どす、と鈍い音が響く。

中腰だったスオウはそのまま身体の均衡を失い、顔から地面に突っ込んだ。ざざっという乾いた音とともに、小さな砂塵が立ちのぼる。ハフリはどうしたものかとおろおろするしかない。

一方スオウは顔をさすりながら、苦笑しつつツムギを見上げる。

「めっちゃ痛いんやけど……」

自業自得よ、とツムギは返し、つむじ風にさらわれそうになった紙を俊敏な動作でとらえる。ハフリはと言えば、なかなか二人のようにはいかない。紙は指先を掠めて逃げてしまう。追いかけてようとすると左腕に抱えた束を落としそうになる。

「アンタって本当にとろいのね」

呆れたようなツムギの声とともに、ハフリが拾い損ねたものを含めた数枚が眼前に突きつけられる。その動作は決してやさしいものではないのに、手に取ったそれは角がきちんと揃えられていて。ハフリは思わずじいっと手元を見つめる。

ハフリはそうつと紙の角をなでた。この紙の塊が父の形見だと、ツムギは知らないだろう。そして、キリと同じように興味も持っていないように思われた。口調も態度も刺々しい。けれども、こうしてハフリの大切なものを丁寧に扱ってくれる。

顔を上げた。言わなきゃ。言うんだ。萎縮する必要なんてない。縮こまってしまったら、伝えられない。

息を吸う。喉をふるわせて、想いを込めた音をのせる。すると音は意味を持つ。いちばん伝えたい言葉になる。

「ありがとう」

ツムギは目を見開いたかと思うと、眉間にしわを寄せ、くちびるを引き結んだ。それは怒っているというよりも、どこかむずかっているような顔で。ハフリが解せないように小さく首を傾げると、むすりと声を放った。

「別にアンタの為じゃない」

原っぱにゴミが増えるのが嫌なだけ、と付け足す。そうなのかも知れない。そうでないのかも知れない。どちらでも構わないと思えた。

ふと横を見ると、にしゃりと満足げに笑うスオウと目が合い、ハフリも思わず笑い返す。ツムギはどこかばつ悪そうに目を逸らし、「こんなとろとろしてたら日が暮れる！」と言い、ウバタマにまたがった。

空は雲に閉ざされているが、相当の時間が経っていることはハフリにも察せられた。急いでホムラに駆け寄る。するとスオウが近づいてきて、おもむろに何かを差し出した。??本に挟んでいた額当て。散らばった紙に気をとられていて、すっかり失念していたのだ。

「これ、ハフリちゃんのもの？」

尋ねられ、こくと頷く。母の形見。《唄鳥の民》の証。

ふと、ツムギに言った言葉を思い出す。

??「わたし、《山鳥の民》になりたい」

ならばこれは自分には不必要なもの？ そんな考えが頭をよぎっ

た。けれども額当ては、本が父とのつながりであるように、母とのつながりで。ぐるぐると思考が回る。刺繍の極彩色が、目を、胸を、刺してくるかのような感覚がした。

ふいにスオウがハフリから紙の束を取り上げた。ハフリが驚いている間に、畳まれた大きめの布を懐から取り出し、それで額当てと紙を包む。そしてそれをまたハフリの腕のなかに戻して、「今度は落とさんようにな？」と笑った。一瞬、その顔がソラトと重なって見えて??

思わず、首を縦に振っていた。

《狗鷲の民》が行商をする馬車が見えてきたのは、ホムラに乗ってまたしばらく経ったところだった。草原のなかにぼつんと浮かび上がる白い幌のついた古い馬車。それをひくのは茶まじりの灰色の毛色をした口バだ。馬より足が短く、ぼてんとした印象を受ける。

その傍らには、頭巾付きの外套を目深に被った人物がいた。遠目に見ても、相当体格が良い。スオウが指笛をぴいつと鳴らすと、気づいたように顔をこちらにやり、太い腕を大きく振ってきた。

顔の確認ができないまま、ホムラから下馬して地面に降り立つ。すると、その男がハフリの頭3つ分はゆうに高いことがわかった。

その上、

「おー、来たか。赤鷹のがきんちよと織鶴のじゃじゃ馬」

放たれた声は、低く大きい。続けて響いた笑い声は、まるで銅鑼のように空気を振動させる。思わず気圧されてスオウの後ろに隠れると、「怖い人ではあらへんよ」と苦笑まじりに耳打ちされた。

一方、じゃじゃ馬呼ばわりされたツムギは、ウバタマから降り立つと、男に布が入った袋を投げるように手渡す。ちらりと目をやると、傍目にわかるほど機嫌が悪い表情だ。先刻紙を拾っていたとき

以上かもしれない。スオウがやれやれと言ったように「ツムギ、」とさす。ツムギは何も言わない。

それを見た男はがはたと笑った。尖った犬歯が顔をのぞかせる。ハフリは、そう言えば《虎鶉の民》も体格が良く犬歯が鋭かったことを思い出す。何かつながりがあるのだろうか？

「お、そのお嬢ちゃんは？」

突然声をかけられた上、頭巾の奥から視線を感じて、ハフリはびくりと身を跳ねさせる。スオウはくつくつと笑いながら「スルガのおっちゃん、まずは頭巾ぐらいとって挨拶しいや」と言う。男？スルガは「ああそういやそうだったな。最近どうにも都合が悪くてよ」と返し、大きな手を頭巾にかける。

同時、一迅の風が吹き抜けた。ハフリは一瞬目を閉じる。続いて開いた視界に入ってきたのは、色だった。空を覆う雲の色。いや違う。やや光沢を持った色合い。それは、銀。銀色の、髪。

私は。私はこの色をしっている。

風が止む。おとうさん、と。思わず声が漏れる。心臓の脈打つ音と耳鳴り、じいんと痺れにも似た感覚に支配される。

けれど？？自分を見下ろしていたのは、赤銅色の瞳だった。赤を交えた金、夕日に照らされたティエンの翼とよく似た色。髪だって、スルガの髪色は父のそれより薄く、白に近い。

違う。このひとは、違う。そう思った瞬間急に身体から力が抜ける。よろめきそうになった身体を慌てて立て直し、改めてスルガを直視する。歳の頃は三十頃だろうか。若々しくも見えるが、老成しても見えた。いつも困ったように笑っていた父とは、似ても似つかない。

そしてはつとする。自分は一体なんと呟いた？

気まずい沈黙が流れていた。ハフリがとりあえず口を開こうとする。そのとき、ひとつの影が割り込んできた。妙齡の女性だ。スル

ガとそろいの外套を羽織っている。背中を流れる髪は青みがかつた黒。前髪を一房編み込みにし、大きく出ている額が目立つ。ほほえみを浮かべた表情はみるからに温和そうだ。

しかし、その女性は、おっとりとしたやわい声でスルガにむかつて、

「??隠し子ですか？」

さらりととんでもないことを言った。

「断じて違う!!」

「ち、違います！」

叫んだのはスルガとハフリが同時だった。男に至っては相当焦っているのか、手をわたわたと動かしている。これは悪いことをしてしまったとハフリは思い、声を絞り出す。

「違うんです。あの、髪の色が、父に似ていて」

すみませんと頭を下げると、女性は「あら」と驚いたように目を見開いた。その目は夜空に良く似た深い青。あれ、と今更ながら思う。このひとは。

背後でツムギがぶすつと呟いた。

「目が笑ってなかったよ、マト姉」

ツムギの姉であるマトイは、数年前にスルガと結婚して村をでて、今はこうして各地を回っているらしい。小さな椅子に腰掛けつつ、スオウの話を聞いていると、マトイから湯気の立つ椀差し出された。受け取ると、少し渋めの、けれども落ち着くにおいぐゆる。中の液体は薄い緑をしていた。そつと口を付けてみると、香ばしい味が口内に広がる。身体もぼかぼかとあたたまる。思いのほか、草原の風に体温を奪われていたようだった。

おいしい、と声を漏らせば、「よかった」とぶつわりとほほえま

れる。姉妹でありながら、マトイとツムギでは雰囲気が大きく違う。一方ツムギと言えば、ハフリやスオウ、そしてマトイから離れたところで、ウバタマに背を預けて腕を組んでいた。スルガは布の見聞に勤しんでいる。

ハフリはこそつとスオウに尋ねる。

「ツムギさん、あんなところにいいの…？」

スオウは「あー、」と言ったあと、ぴらぴらと手を振りながら言う。

「あれは放っておけばええんよ。毎度のことやから」

それより、と続けて「さっきのバラバラになった本、出してみ。

多分マトイ姉ちゃんなら直せるで」と。

それは思ってもみない申し出だった。ハフリは一瞬固まったあとはつとして懐から包みを取り出し開く。

その間にスオウはマトイに経緯を簡単に説明していた。マトイはうんうんと頷いたあと、紙の束を手にとってしばらく触ったり眺めたりしたのちに

「表紙は別のものになってしまっけれども」

いいかしら？ と尋ねられる。ハフリは迷わずにくくくと頷いた。こうして包んで持っているよりもずっといい。また表紙をなでて、開いて、めくって、読むことができる??そう思うと、心がはねた。

スオウが「日が暮れるまでにできる？」と問うと、多分とマトイは答えた。すると、スオウは立ち上がり、ツムギの方に向かって叫ぶ。

「オレ、一カ所寄り道して届けにいかなあかんから、おっちゃんに品物もらって先ここ出るわ」

びくり、とツムギの眉が上り上がった。それは、とうなるようにツムギは言う。

「アタシに、その子を待つと一緒に帰れって？」

そーそー。ようわかっとなるやん、と能天気な声でスオウが返すと、

ツムギの顔はさらに険しいものになる。憤然とスオウに歩み寄り、睨みつける。

「いやがらせ？ アタシがここにいるのも、」

ちらとハフリに目をやって、一瞬迷ったそぶりを見せたものはつきりと

「この子のことも嫌いだって知ってて、そういうの？」

「もちろん」

スオウはにっこりと笑ってそう言う。ハフリは、どちらの内側もつかむことができなくて、歯がゆい。ツムギが自分を「嫌い」だと言ったことよりも、その声音のなかにあつた何かが気になってしまふ。

ハフリがなにもできずにいる間に、ツムギは大きく舌打ちをしてスオウに向かつて小さく声を漏らした。アンタって、アンタって本当におせっかい。

スオウは肩をすくめて、

「そりゃどーも。いわれ慣れとるわ」

そして、急に真面目な顔になると「暗くなつてきよったからな、あまり開けたところは通るんやないで。山沿いの、森から若干離れたところへんを歩いてけ。周りに気イ配れよ」と言う。

その言葉をツムギは気を取り直したように鼻で笑いながら

「バツカじゃないの？ そんなのずっと前から言われ続けてる。わかってるわよ」

そして目をそらしながら「アンタこそ、気をつけなさいよ」と、付け足した。

ふたりを見ていて、その会話を聞いて、ハフリはもやもやとする。見えないけれど確かに存在しているもの？ 甘やかではなくけれども優しいなにかが、ふたりの間に感じられて。欲しくなる。うらやましい。無意識にくちびるをきゅっと噛みしめていた。

そのとき、とんとマトイに肩を叩かれた。

「向こうで紙を、順番に並べてもらってもいいかしら？」

そして彼女は、少し声を潜めて「すこしおはなししたいな」とや
わらかくほほえんだ。

あたりはゆっくりと薄闇につつまれ始め、少し離れたところにある焚火の炎が明るさを増していくのが見える。

幌馬車から少し離れたところにしかれた敷物の上に並べられているのは、針と糸と紐、小さな壺に紙や布。そして手元を明るくする為に灯した蜜蝋だ。その灯りに助けられつつ、ハフリは頁の隅に書かれた文字をたよりに、紙を順番に並べ直し「いち、にい、さん」と小さく声を出しながら数えていく。そして「じゅう」にたどり着くと、ふうつと息をついてその束をマトイの傍に置く。その、繰り返す。今のところ、欠けている頁はない。残りの紙もあと少しだ。

一方、マトイは先刻「おはなししたいな」とハフリに言ったものの、集中しているのか口をあまり開かない。今も地面に敷いた布の上に座り、紙を一束手に取って考え込んでいた。

ハフリの本は、全体の厚さと頁の状態から、元の本と同じ製法で作り返すのが難しいと聞かされた。そして、先刻マトイと話し合った末二冊に分けることになった。なんでも東方で教わった方法で本の形にするらしい。

表紙は厚紙に色の着いた紙を貼付けて作られる。『ワシ』とマトイが呼んだその紙（マトイも名前の由来は知らないらしい）は、繊維による凹凸に素朴なあたたかみを感じられた。同じ色で染められているのに、一枚のなかに微妙な濃淡が見られ、目にも楽しい。ハフリが選んだのは、深緑の色紙。自らの瞳と似たその色を、ハフリは今まで好きではなかった。けれども、マトイに色とりどりの紙を見せられた時にいっとう惹かれたのはその色だったのだ。その紙を手を取ったことを、自分でも驚いてしまつて。そんなハフリにマトイはふうわりとほほえんで「深い森の色ね」と言ってくれた。

そのときのこそばゆさを思い出したとき、最後のいちまいを数え

終えた。なくした頁は、ない。よかった、と言葉がこぼれた。無意識に強ばっていた身体が、ゆっくりと弛緩する。心のなかでスオウとツムギに「ありがとう」とつぶやき、紙の束をぎゅうつと抱きしめた。

「その感じだと、すべてであったのかな？」

よかったね、とマトイは口元をゆるめる。ハフリはそれにこくりとうなずいた。最後の一束をマトイに渡し、ええと口ごもる。

「わたし、何をしなければいいですか？」

そうねえ、としばしマトイは考え込んで答えた。

「もし良ければ、馬車に乗せてある籠のなかでも見てみてくれないかな。私が作ったものを入れてあるの。気に入ったものがあつたら持って行ってちょうだい」

火を灯した蜜蝋を片手に、ハフリは幌馬車の幌をまくり上げた。

馬車のなかには色々なものが積まれている。大体は木製の箱に詰め込まれているようで、中身は窺えない。そんななか、あいた空間に籠がいくつか置かれていた。

ハフリは安定した場所に皿をおき、その上に蜜蝋を乗せる。そして、籠の上にかぶせられた布を取り除き 目を見開いた。

帯に、襟巻き。靴下に、赤子用の服。手に取らなくてもわかるほどに、丁寧な作られている。刺繍も細かく、縫い目もそろっており、非の打ち所がない。そしてそれらは、主張しすぎない色の糸や布で作られている。それゆえに、誰にでも似合い、誰にとっても好ましいもののように思われた。もちろん、ハフリにとっても。

好奇心に駆られて、もうひとつ籠を覗き込む。そこには白い毛糸で作られた、手のひら大の織物がたくさん入れられていた。その形は花のようでもあり、いつか本で読んだ”雪の結晶”というものにも似ている。一目一目が複雑かつ繊細で、うつくしい。何に使うの

かは判然としなかったが、それでも欲しいと思わせる魅力があった。ひとつを手に取ってそうつとなでると、そのやわらかさはまるで本当の花びらのようだ。知らずに、笑みがこぼれる。

ひとが五本の指で作ったもの。そういえば、先日見た《山鳥の民》の刺繍のなかにも、マトイの作ったものがあつたのかもしれない。《織鶴の民》手先が器用だとスオウが言っていたが、聞くのと見るのでは大違いだった。ほうつと感嘆の息がもれる。ずうつと眺めていたくなる。

しかし、たいらかな心の傍を、時折ぴりぴりちりちりとした、胸を逆なでるような感覚が掠めていく。それに刺激されたのか、心がざわりと波立つ。

その感覚の正体をつかもうと、ハフリは自分のなかに潜ろうと、目をつむってみる。

きれい。すごい。最初に感じたのは尊敬と憧れで。その向こうにあるのは、自分にならないものを羨ましいと思う気持ち。そして、それを欲するけれど届かない、焦燥と落胆。潜れば潜るほど、心は暗く陰っていく。どうしてどうしてどうして。どうしてわたしの手には入らないの？ 溢れ、押し寄せてくるのは、泥水のように濁った感情。心が黒く染まってゆく。そして行きついた先にあつたのは。

妬ましい。

嫉妬。それは、キリの歌に対して抱いていたものと同じ。時に相手を壊してしまいたいと思うほどに凶暴で、どろどろとした醜い想いだっただ。

その感情に触れた時、ハフリははつと目を見開き、身体を強ばらせた。風が一筋ぴゅうつと吹いて、蜜蝋の灯りが消える。暗くなつた視界のなか、白い織物だけが淡く浮かび上がる。ひかりを、放つ。

そんなもの、壊してしまえ。見ていても辛いだけでしょ？

闇のなかに潜む何かが　否、ハフリ自身の声がささやくのが聞こえた気がした。

無意識に手のなかにある織物を握り潰しそうになり、堪える。代わりに、唇を強く噛み締める。

（わたしは、どこにいても何ひとつ変わってない。ないものばかり欲しがって。こんな気持ちになって）

でも、

（それしかできないんだもの）

こうやって、何度も何度でも。きれいなものを見るたびに、自分の奥底にある汚いものを掘り返されるのだ。そして、自分に何もないことを突きつけられる。

こんなにも、手のなかにある織物はうつくしいのに。そう、うつくしくて、きらきらしていて、まぶしくて、まぶしくて。目を灼かれてしまいそうになる。

どうしていいのかわからなくて。ハフリは、籠のなかにしまわれた織物たちから、目を逸らす。そのまま、逃げるように視線をさまよわせた。すると、ふとあるものが目に留まった。

それは、隅の方に置かれた小さめの籠のなかにあった、一枚の膝掛けだった。丁寧に畳んでしまわれている。蜜蝋の炎も消えてしまった今、色もよくわからない。けれども、手はその膝掛けに伸びていた。

手に取るとごわごわとした毛玉の手触りを感じた。あまり新しいものではなさそうだった。目でみえない分、手で触れる。編み目もそろっていて、決して下手なわけではない。けれども直感的に思う。これはマトイの作ったものではない、と。作品から発せられる空気が、違うのだ。マトイの作ったものは慎ましやかな雰囲気を持っているが、この膝掛けは何かを訴えてくるような、覇気にも似たものがある。一体、誰が作ったのだろうか。考え込みそうになったそのとき、

「それ、ツムギがくれたのよ」

ぼつと横から、光が差し出された。膝掛けを灯りが照らす。それには、鮮やかな色を何色も使った、花の模様が編み込まれていた。薄闇のなかで感じた通り、マトイの作ったものとは似ても似つかない。

そして横を見ると、蜜蝋を持ったマトイが笑いかけてきた。言い訳のように「ちょっとだけ休憩」とつぶやいて、膝掛けを見て懐かしげに目を細める。

「結婚祝い、っていうのかしら。といつても、半分奪い取ったようなものなのだけれど」

マトイの口から『奪う』という言葉が飛び出たことに驚いて、ハフリがきよとんとすると、マトイは苦笑まじりに言葉を紡いだ。

「村を出る日になって、私からも膝掛けをあげたの。そしたらあの子、自分が作ったものを『あげない』って言うてきかなくて。結局母さんが張り手して取り上げたのよ」

ハフリは膝掛けを見つめ、そつと握りしめた。そのときのツムギの気持ちは何となくわかる気がした。恐らくハフリは、マトイやキリが自分の姉妹だったら、耐えられない。

一方マトイは、独り言のように続ける。

「その頃から、スオウくんに勧められて馬に入り込むようになったみたい。今じゃほとんど、何も作ってないって聞いている」

頑固な子なの。とつぶやいた声は、呆れているようで、さびしうでもあって。そして、染み入るような何かがあった。

マトイは、蜜蝋を持っていない方の手で、膝掛けに触れる。細くて、白くて、きれいな指だった。

人差し指、中指、編み物の上を指が滑る。ゆうつくりと、いとおしむように。

そして、一言。

「きれいでしょう、それ」

はい、とハフリは躊躇いなく答えた。さっきまでのどろどろした感情が、引いていくのを感じていた。それは、ツムギの膝掛けのおかげで、マトイの織物に刺激された劣等感から逃れられたせいかも知れない。あるいは、ツムギに勝手に共感して、同情して、安心しているだけなのかも知れなかった。

けれども。自分はこの膝掛けが「すき」だと、ゆらゆらと揺れる蜜蝋の灯りに照らされながら思った。

ハフリはツムギのことを良く知らない。耳に残っているのは高い声と刺のある言葉。目に残っているのは不機嫌そうな顔。そして、きちんと角のそろえられた紙の束。そして目の前にある膝掛け。

それらは、まだばらばらだ。ばらばらで、当たり前だった。ハフリが、組み立てようとしていなかったからだ。まるで世界には『自分』と、『それ以外のすべて』しかないように思い込んで、ひとつひとつを見ないでいたのだから。

進まなきゃ、変わらなきゃと、気持ちだけ必死になって、すべてを放り出していた。走って、焦って、結局同じ道をぐるぐる回っているだけだった。正直今も、どうしていいのかわからない。

「あの、」
ただ、ずっと前からわかっていたのは、たかさんのことから逃げてきたこと。
だからまずは、わかるるところから一つずつ、

「この白い織物、ひとつもらっていいですか？」

できるだけ、向き合ってみようと、そう思ったのだった。

ウバタマにまたがり、ツムギの腰に手を回す。あたりはすっかり闇に包まれ、周りの景色も判然としない。スルガとマトイは泊まっ
ていくことを進めたが、それをツムギが頑に拒否し、帰ることにな
ったのだった。

当のツムギはひたすらに不機嫌な表情のまま、落ち着きなさそう
に手綱を握ったり振ったりしていた。

マトイは、そんな馬上の二人を見上げながら、
「遅くなってごめんなさい。思っていたよりも、時間がかかっちゃ
つて……」

と申し訳なさそうに身をすくめる。それにハフリは首を横にぶん
ぶん振った。そして、できる限り深くこうべを垂れる。

「こちらこそ、ほんとうにありがとうございます」

ハフリが腕に抱くのは、砂色をした布作りの肩かけ袋。マトイが
本を入れる為にと譲ってくれたものだった。袋の端にはフウに似た
青い鳥が刺繍されている。

そのなか収まっているのは、マトイにもらった白い織物と額当て。
そして、二冊の深緑の表紙をした本だ。ハフリは布の上から、本を
なでる。たとえ見た目が変わっても？否、スオウとツムギに助け
られ、マトイに直してもらえたからこそ、この本が父の形見である
こと以上に、大切だと思えた。

すべてのことが、ほんとうにあったかくて、うれしい。けれど、
その気持ちを正しく言葉にすることができなくて。ただ、ありがと
うと繰り返す。

マトイは照れたようにはにかんで「喜んでもらえて嬉しいわ」と
言った。そして、もう一つ何かを、今度はツムギに差し出す。

それは、『ワシ』を木枠に貼付けて球体上にしたモノだった。そ
れはマトイの持つ棒につながっており、ぼんやりとした光を放って

いる。なかに蜜蠟がともっているのだ。

「これ、持っていて。いつもは明るい時間帯に返してあげられてたけど、今日はもう真っ暗だから」

しかし、ツムギは目をすがめて一言。

「いらぬい」

にべもない返事であったものの、マトイも慣れているのか苦笑まじりに、

「じゃあハフリちゃんにあげるわ」

しれっとそう言って、馬上のハフリに棒を握らせた。棒先に吊るされた球体が、淡い光をまといながら小さくゆらゆらと揺れる。けれども灯りは消えない。世の中には色々な道具があるのだなあと、ハフリは思わず感心する。これなら、夜道も多少は安全に進むことができるだろう。

すると、今度はスルガが歩み寄って、手のひら大の石の黒い球体をツムギに差し出した。

「ほらよじゃじゃ馬、これも持ってけ」

「いらぬい」

スルガは大仰に肩をすくめて、おどけたように返した。

「じゃあ俺もハフリちゃんにあげることにしようっ」と

ちよつと、とツムギが若干慌てたように、スルガの手からその物体をひったくった。そして、ぶすつとした表情のまま

「このとろい子にそんなもの持たせたら、アタシが大変な目に合うわ」

と言い「ホント、ろくなもん作らないわね」と小さく付けたす。

一方スルガは答えた様子もなく、犬歯を見せてにかりと笑った。

「まあそう言わずに」

「ウチに何個溜まってると思ってんの？ そろそろ全部埋めて処分してやるんだから。危ないったらありゃしない」

「ひでーなあ」

そのやり取りにハフリがきょとんとしていると、下から服を引っ

張られた。マトイだ。何かを言いたそうに背伸びをする彼女に、できる限り耳を寄せる。

「また、会いましょ」

あたたかい吐息が耳をくすぐる。心までくすぐりたい気持ちになる。ハフりはただ、こくりとうなずく。するとマトイは、音量を押さえた声で一言付け足した。

「ツムギを、よろしくね」と。

昼間は草原を突っ切ってここまで来たものの、帰りは遠回りをし、山の裾野に広がる森の側を進んでいた。

森、といつてもほとんどの木は葉を落とし、常緑樹ですら緑を失って、乾いた枝葉を伸ばしている。風が吹くたびに森は少し悲しげにからからと歌って、そこに時折野鳥の声が混じる。

ハフりは光を灯した球をぶら下げた棒を右手に持ち、左手でツムギの腰に手を回していた。馬に乗るのにはだいぶ慣れてきたものの、この状態は身体の均衡が崩れやすく、ぐらぐらとしてしまう。その度にツムギに怒られはしないかとひやひやする。しかし、ツムギは何を言うでもなく手綱を繰っていた。

後ろからでは、ツムギの表情は窺い知れない。灯りに照らされた彼女の髪は、まっすぐではあるものの、毛先があちこちに跳ねている。右に左に、後ろに前に斜めに跳ねるそれらを、なんとなくハフリは見つめた。何かがかめそうなのにつかめない、じれったい気分になる。そしてふと、ツムギの顔を見たいなあと、思った。

するとそのとき、前方から「ねえ」と声をかけられた。

「マト姉と、なに話してたの」

ぼそぼそと、振り向くことなくツムギは問う。ハフリは一瞬きよとんとしたものの、はっとして声を出す。

「そんなには、お話しなかった……んです。本を直す間は、集中してみたいで。話しかけちゃいけないかなあって」

あー、とツムギは声を漏らした。心当たりがあるようだった。そして、またしてもくぐもった声で「そーいうひとなのよ」とこぼす。拗ねたような口調だった。そして、沈黙。無言で続きを促されている気がして、ハフリも続けて口を開く。

「直してもらっている間は、ずっとマトイさんが作った織物とかを見ていて。ほんとうに、綺麗でした。ひとつもらっただんです。あ、あと??……ツムギさんの作った膝掛けも、見ました」

びっくりと、ツムギの身体が小さく震えた。もしかすると、もしかなくとも、この話題は彼女にとっては好ましくないものなのだろう。ハフリは、ごくりとつばを飲む。外に出かけた言葉が、うるうると喉をさまよう。

(わたしは、あの膝掛けが好き。たぶん、マトイさんの作ったものよりも)

けれども、その明確な理由を、ハフリは言葉にできない。自分でもまだわかっていない。

どうして、ツムギのものに惹かれるのだろう。全体を見るならば、すべてにおいてマトイの方が優れているのに。

あの色づかいが好きなのか、あの模様が好きなのか。それとも、他のなにかが好きなのか。

それをはつきり言葉にすることができなければ、ツムギを傷つけるような気がした。ハフリがツムギに伝えたいのは、慰めでも励ましてもなく、「好き」という気持ちなのだ。それを取り違えさせるような言葉を、考えなしに放ちたくなかった。正しく想いを伝えなかった。

心のなかで「ごめんなさい」と謝る。結局何も言えないなら、口にするべき話題ではなかったのだ。

森が鳴く。落ち葉が風に遊ばれて転がる音がする。夜の空気は冴え冴えとしていて、逃げることを許さないように張りつめている。

やわい光に照らされる世界の向こう、森の奥、先の見えない闇をハフリはしばし見つめ、言い訳するように思う。

(逃げない。逃げたりしない。ちゃんと、伝えたいことを、伝える。ただ今は、見つからないだけ)

そして、自らの失態で作ってしまった沈黙に身体を強ばらせた。すると、ぽつとツムギが声を漏らす。マト姉の、マト姉のつくるものはさ、

「すごいでしょ」

そこに含まれた、空気をぴりと震えさせた仄暗い感情の正体を、ハフリは知っている。

けれども、その一言はまっすぐで。最後にはすべてを乗り越えて、凜と響く。ハフリに厳しい言葉をぶつけたときさえ、ツムギの言葉には屈折も裏表も感じられなかったことを思い出す。だから素直に「すごかったです」答えた。ツムギが、確かに笑った気配がする。それは半分苦笑いではあったものの、まとう空気はやわらかい。その空気はマトイの持つそれと良く似ていて。やはり姉妹なんだなあと考える。

(姉妹、か)

ウバタマにゆられながら、ふと、自分のことに想いを馳せてみた。ハフリには、姉妹がいない。そして、フウ以外には家族もいない。森は豊かであったし、食べ物や住む場所に困ったことはない。その点でいうなら、この村の比ではないほどに裕福だった。

けれども、ハフリは森に帰ろうとは思わない。たとえ役立たずであっても、そのことを罵られても、ここにいたいと思う。もちろん、役に立つようにはなりたいたいけれど。

少し前までは、とにかく居場所が欲しくて、誰でも良いから自分

を認めて欲しくて、それでいっぱいいっぱいだった。けれど何故だか、今はいくらか落ち着いて考えることができる。

（わたしは、山鳥の村にいたい。他のどこでもなくて、ここにいたい）

乾いた空気も、枯れた草原も、曇った空すらも、いとおいしいと思えるほどだった。

空気が乾いていれば、水をありがたく感じる。枯れた草原は、鮮やかな刺繍にあたたかみを持たせてくれる。例え曇っていようと、この地の空は、木々に閉ざされていた森よりもずっと広く、息がしやすい。

そしてここには、たくさんひとのぬくもりがある。それに?? ソラトがいる。ハフリをここへと連れてきてくれた少年。獣のようになやかで、したたかなひと。

乾いてかさついていた大きな手を、その温度を思い出す。

ぽつりと、けれど強く、思った。

（……あいたいなあ）

今どこにいるのだろうか。また寝る間を惜しんで、雨を降らすすべを探しているのだろうか。空を仰いでみても、そこにあるのは星も見ることのできない黒い空間だけで。ティエンの金色の輝きも、あるはずがなかった。ぴゅう、と甲高い音を立てて風が吹く。ハフリは棒を落とさないよう握り直し??その冷たさに思わず身を震わせた。かたと二、三回咳が出る。喉が痛むことに気づく。風邪を引いたのかも知れなかった。

「寒いのか?」

思いもかけずツムギに声をかけられ、びくりと身体が反応してしまふ。「だいじょぶ、です」とたどたどしい言葉を返すと、「あつ

そ」と素っ気ない返事が飛んでくる。

(心配して、くれたのかな)

こっそりと、そんなことを考える。

そして少し悩んだ末、「あの」と口を開いた。

「どうして、森の傍を通るんですか」

「日が暮れると、アイツらが来るから」

『アイツら』といわれても、ハフリはそれが誰のことなのかわからなかった。そんなハフリの様子を感じたのか、やや苛立ったようにツムギは言葉を放る。

「《狩人》、人さらいよ」

ひとさらい、とハフリは小さく繰り返した。そういえば昼にスオウが口にしていたことを思い出す。あとき追いかけてきたのはツムギだったわけだが。

一方、ツムギは「アンタ、南から来たんだっけ」と独り言のようにつぶやいて

「アイツらは北から来るのよ。出始めたのも最近だし、アンタの暮らした方には、まだ辿り着いていないのかもね」

確かに、森ではそんな人たちの噂すら聞いたことがなかった。それに、《唄鳥の民》には『森の外には出ては行けない』という言い伝えがあるため、非常に森は閉鎖的な空間なのだ。《虎鶉の民》が物資を売りにくる回数だって限られている。

知らないことがたくさんあるな、と改めて実感する。そして、尋ねる。

「……《山鳥の民》でも、さらわれた人がいるんですか？」

わずかに震えた声。それに気づいたのだろうか、ツムギは若干声量を上げて話す。つん、と、少し自慢げに。

「いないわ。遠目に見て逃げてきたひとならいるけど。《山鳥の民》はこの近辺の他の鳥の民と交流があるから、情報には事欠かないのよ」

ほっと、胸をなでおろす。ツムギは呆れたように言った。

「《山鳥の民》は、アンタみたいにとろくさくないんだから。心配なんて、しなくて良いのよ」

それに、と続けて

「アイツらが近づいてきたら、すぐにわかるんだって。鳥も、獣も、風や樹木すらも、アイツらの気配を機敏に感じ取って、オカシクなるから」

その口調は、必要以上に明るくて。励ましてくれていることを、ハフリは確信する。

「だから、変だと思ったたらすぐにウバタマを走らせる。相手にする必要なんてない。逃げる。イグサさまが言ってたの。『鳥の民の翼は戦う為にあらず。巢を守り空に羽ばたく為にあり』って。あいつらはその誇りをなくした愚か者どもよ」

そしてふと、真面目な声で一言付け足した。

「……ううん、もしかすると、鳥の民ではないのかもしれない。アイツらは何かがアタシ達と違う気がする??って、アタシも直接見たことはないんだけど」

??鳥の民、ではない。

その言葉に、ハフリは少なからず驚く。考えたこともなかったのだ。鳥の名を冠するひとびと以外が、この世界にいるかも知れないことを。正直、想像もできない。

すると、ハフリが考え込んでいた際の沈黙を、ハフリが不安になって口をつぐんでいると思ったのか、ツムギが若干焦ったように声を張り上げた。

「で、でも、大丈夫よ！ もう村が見えてきたもの」

はっとして顔をあげて目を細めると、まだ随分距離はあるものの、ほんに小さな灯りが見えた。とりあえず、安堵する。

「アイツらは人里近いところには現れない」

そこまで言うと、ツムギは突然はっとしたように空を仰いだ。

突如、きん、と。激しい耳鳴りに襲われ、ハフリは思わず顔を歪めた。ツムギも同様に苦しげな顔をしている。

すると、風が止まる。風が消える。風が、死ぬ。冷たさも温さも持たない空気が、音も無く世界を満たした。その空気は、ハフリの肌の上を這い、まわりついてくる。そして、離れない。離れてくれない。それを理解したと同時に、身体の奥底から競りあがってきたのは、強い強い嫌悪感だった。ハフリのすべてが、ハフリの理解を超えて、何かを拒否していた。

鼻で息をしたら、死臭がする気がして。口で息をしたら、身体の内側から腐っていく気がして。息ができない。身動きもできない。頭も、働かない。

永遠に感じられた一瞬。そして

轟音が耳を貫く。それは、鳥達の鳴声と羽音、獣達の咆哮と地を蹴る音だった。刹那、風は停滞していた空気を押し流すかのように吹き荒れはじめ、枯の葉が風の唸りとともに夜空に舞い上がる。地面すら揺れている気がした。ハフリはツムギにしがみついて、震えるしかない。何が起こっているのかも理解できない。

一方ツムギは呆然とした様子で言葉をこぼす。うそ、うそ。もう村が見えてるのに、アイツらがくるなんて。

ツムギを叱咤するように、ぶるる、とウバタマが嘶いた。その声に弾かれたようにツムギは顔を上げ、背筋を伸ばす。そして、ハフリのほうを見やって、

「しっかり、つかまって」

振り絞るように声を放ったかと思うと、ウバタマの脇腹を強く蹴った。

ツムギは、村へ向かって直進する開けた場所を避け、森のなかへと手綱を繰った。ウバタマの走りは、昼間見て思った以上に荒々しい。身体が激しく上下し、時折腰が浮く。細かい枝葉も構わずに走るため、時折枝葉が髪に絡み付きそうになる。ハフリは、棒を握りしめ、ツムギに顔を押し付けるようにしがみついていた。棒の先の球体が、激しく揺れる。灯りが消えないことには助かったが、もしかするとこの灯りで相手に居場所が知れるかも知れない。しかしそれすらも考える余裕がない。

森のすべてが、まさしく『オカシク』なっていた。すべての音が混ざり合い、威嚇するような、はたまた悲鳴のような音を作り出す。さらにそれに、ウバタマが風をきる音も入り交じり、耳が変になってしまいそうだった。

そのとき、ツムギの舌打ちとともに、耳に蹄の音が飛び込んできた。後ろに何者かが、いる??。

ハフリは振り落とされないように注意をしながらそうつと後方を見る。

一頭だけだ。まだかなり距離はある。今日の昼間と同じ状況。ウバタマと良く似た、漆黒の馬。けれども、その馬は明らかに異常だった。距離があってもわかるほどに乱れた息づかい。闇夜にふたつ浮かび上がるのは、白目。狂ったように走っている。否、走らされている。

(くるしそう)

そんなことを考えている場合ではないのに、思ってしまうほどだった。

一方、乗り手は、黒い服で身を包んでいる。覆面のようなものを被っているかのようで、それ以外は良くわからない。下手をすると闇に溶けて見えなくなってしまうそうだった。

その騎手が、手綱から手を放し、何かを背中から引き抜くような動作をする。キラリと何かが光った気がした。それはまっすぐに飛んでくる。それは、

矢。

距離があるためそれはウバタマに届く随分手前で落下していったが、だからといって安心できるはずもなかった。

“矢”は、生きるものを傷つけるもの。いのちを奪うものだ。

《唄鳥の民》の主食は、植物。もちろん動物も食べるが、それは年に一度、祭の時だけ。その時に使われるのが“矢”と言うもので、ハフリにはある種神聖なものだった。それが、まさか自分たちに向けられるなんて。

ハフリは轟音のなか、甲高い悲鳴を聞いた気がした。鳥のものなのか獣のものなのかはわからなかったが、けれども、矢が害意を持って放たれていることだけは確信する。

(どうして、こんなことを)

《山鳥の民》の主食は、乳製品。次いで、動物 家畜だ。正直、今でも食べるのは気が進まない。けれどもハフリは知っている。屠殺された動物達は、血の一滴まで大切に扱われることを。血は腸に詰められ、肉は干して日持ちするようにする。女達は調理をする時に祈りの言葉を捧げ、食べる前には家族で手を合わせて感謝する。

だからこそ、今後方から放たれる矢が、弓を操っているであろう人が、ハフリには理解できない。理解できない故に、恐怖はさらに増し、身体ががくがくと震える。もし、射られてしまったら。あるいは、捕まってしまったら。

すると、呆然とするハフリに、ツムギが後ろ手に何かを突きつけた。前を向いたまま、固い声で言う。

「白い紐に蜜蝋から火を移して、思い切り後ろに投げて」

それは、先刻スルガにもらった石のような物体だった。確かに、

一カ所だけ白い紐が出ている。ハフリは棒の先の球体をどうにか片手でたぐり寄せる。

火をつけるには、どうやっても両手を放して支えのない状態にならなければいけないことに気づく。恐怖に、全身から冷や汗が吹き出る。もし、振り落とされてしまったら。そう思った刹那、ウバタマが跳躍し、ぐらりと身体が傾ぐ。

(怖い。怖い。怖い。でも??逃げないと。早くしないと)

早く、と思っっているだろうに、ツムギはそれを声に出さなかった。それは、走ることに集中しているせいかも知れなかったが??ハフリは、それをツムギのやさしさだと感じる。そして、ぐつと奥歯を噛みしめた。できる、できる。やらなくちゃ。

まずは球体のなかを覗き込む。底の皿のような場所に、大きい蜜蝋がひとつ灯っていた。そうつと、手を近づけると、当たり前ながら熱い。反射的に手が引つ込む。けれども、怖じ気づくわけにはいかなかった。蹄の音は少しずつ、けれども確実に近づいてきている。手を伸ばし、蜜蝋を掴む。皮膚が焼けるかのような感覚に、悲鳴をあげそうになる。それを堪えた拍子に、蜜蝋を残して球体と棒は馬上から落ち、闇に吸い込まれていった。

怖いし、熱い。じくじくと手のひらに痛みが走る。汗が頬を伝っていったのがわかった。

ハフリは、内股に力を入れる。震える身体に鞭打って、ついに両手に蜜蝋と黒い石を持つ。ぐらぐらと身体が揺れる。支えるものがないことを体感する。なるたけ前に重心を傾けて、蜜蝋の灯りを消さぬよう、胸元で抱え込むようにして持つ。

白い紐に、火をつけるだけ。たったそれだけなのに、身体はなかなかいうことをきかない。炎が揺らぐたびに、心臓が縮むような感覚を味わう。何度も何度も、紐と炎はすれ違う。手のひらの痛みも忘れるほどに、ハフリは集中する。

やっとのことで、紐に炎が届く。なかなか、火は灯らない。早く、早くついて、と祈るように思う。

ぼつつと、紐に炎が灯った。やった、と思わず声が漏れる。すると、ツムギが叫んだ。

「早く！ 早く後ろに投げて！」

はつとして、黒い石を後ろに向かって思いっきり振りかぶる。そして??投じた。

その反動で、身体が大きく揺らいで、馬から落ちそうになる。それを反射的にツムギが片手で引き寄せた。ハフリは慌ててツムギにしがみつく。後ろは見えない。

一瞬、音が消えた気がした。

否、それはあまりに大きな音だったのだ。あれだけ騒いでいた森の音達を、すべてねじ伏せるかのような音。そして、後方から砂塵が巻き上がったのを感じる。今度こそ耳はおかしくなり、なんの音もとらえることができない。身体がびりびりとした空気の震動を感じ取る。何かか??恐らく、あの石が破裂したのだ。ハフリは、爆発という言葉を知らなかった。

ゆつくりと音が世界に戻ってきたころ、ハフリは後方から蹄の音が聞こえないことに気づいた。蜜蝋もなくなり、あたりはひたすらに闇に包まれ、ぼんやりとしか周りの様子はわからない。けれども、不思議と怖くはなかった。すべては異変の前にもどり、やわらいだ風が頬をなでていく。

まだウバタマは走っていたが、少し落ち着いたようにツムギが言った。

「よし、多分逃げ切れた。道をわりだし次第、村に帰るわ」

そして、腰を浮かすようにしていた身体を座る体勢に戻そうとす

る??が、そこで、ツムギは硬直した。ウバタマ、と焦ったように口走る。

「ウバタマ、落ち着いて」

先刻の出来事に、そして音に驚き、おののいていたのは何もひとであるハフリだけではなかったのだ。

「ウバタマったら!!」

そうツムギが叫んだ刹那。

ふいに。本当に突然に、前が開けた。樹がない。草もない。地面もない。暗い視界のなかでも理解する。つまりそこは、崖だった。ぱっくりと口を開けた大地が、目の前に待ち受けている。

ツムギが思い切り、ウバタマの手綱を引いた。ウバタマは急停止し、大きく前肢をあげる。身体が宙に放り出され、ツムギの腰に回っていた腕がほどける。夜空色の瞳と目が合った。ほんの一瞬のことなのに、その瞳のなかに色々な感情が浮かんでは消えるのを、ハフリは目にした。ツムギが何を感じ考えていたのかは、わからない。ただ、身体を思い切り突き飛ばされた。崖と反対の方向に。

咄嗟に伸ばした手は届くことなく。ツムギの姿は、闇に吸い込まれる。

地面に叩き付けられる感覚とともに、ハフリの視界は完全に暗転した。

真つ暗な意識のなか、ふいにやわらかい何かに頬をなでられる感触があつた。その動作はハフリの様子を窺うかのように何度も繰り返され、時折、吐息のようなものが顔にかかる。身体がひどく重く感じられ、瞼をあげようにも言うことを聞かない。何があつたのかもうまく思い出せない。けれども起きなければいけないと思う。起きなければ、けれど、身体が。

すると突然、若干のぬめりを持った何かに顔を舐め上げられて？反射的に、ハフリの身体はバネ仕掛けのように飛び起きた。同時に身体の節々に痛みが走り、顔をしかめる。骨は折れていないものの、地面に打ち付けたようだ。視界で軽く閃光が散り、めまいがする。それらが引いた頃合いを見計らつて改めて顔を上げれば、ウバタマと目が合った。長いまつげに囲まれた潤いのある黒眸が、まっすぐにハフリを見ていた。その視線は、乗り手の少女に良く似ていて？ツムギさん、と掠れた声で呟き、ハフリは立ち上がってあたりを見渡す。草木のない土の露出した場所を見つけると、転げるように駆け寄つた。崖淵で膝をつき身を乗り出して下を見る。そこにあるのは深い闇だつたが、目を眇めていくばくか経つと、夜目がきき少しだけ周りの様子が分かるようになる。

先刻は咄嗟に崖だと思つたものの、実際は急な斜面と言つた方が近い。それでもハフリがいるところと底と思われる場所には、ハフリの身長のおよそ四、五倍ほどの高低差がある。ここから無防備なまま落ちてしまったら、怪我からは逃れられないだろう。ハフリは淵に付いた腕に力を込め、できうる限り目をこらす。

するとその底に、明らかに地面とは違う影を見つけた。はっきりとは見えないが、丸まつてうずくまっているようだった。

「ツムギさん……」

思わず叫ぶと、その影はもぞもぞと動く。白い何か？？恐らく顔

??がこちらを見上げる。表情は窺い知れなかったが、思いのほかしっかりとした声がハフリの耳に飛び込んできた。

「ウバタマに、荷がくくりつけてあるから」

持ってきて、と。ハフリが後ろを振り向くと、寄って来たウバタマがあるじの言ったことを察したかのように身体を屈めた。その首には、布袋がかけられている。その上、落馬したときに落ちてしまったのであろうハフリの肩掛け袋までくわえていた。ありがとう、と受け取って頭をなでてやると、早く行けというかの如く鼻を鳴らす。

しっかりと袋を肩にかけ、崖の淵に立つ。角度こそあるものの、座った姿勢で滑るように降りていけば危なくはない。ずるずると、砂煙を立たせながら慎重に降りていく。時折地面から突き出た石にひっかかりそうになったものの、最後は立ち上がって一気に駆け下りた。

「ツムギさん!!」

数歩分の距離を詰めればはつきりとツムギが視認できた。ツムギは膝を折って地面に座り込んでいる。こちらに向けられた左半分の顔が、安心したように弛緩した。しかしすぐに挑戦的な笑みをつくり、「……生きてるわよ、あいにくね」と憎まれ口も忘れない。ああ、良かったとハフリは胸を撫で下ろす。きっと大きな怪我はないに違いない??そう思ったとき、ツムギの顔がすべて自分の方に向けられて。ハフリの心臓は握られたかのように嫌な音を立て、身体は金縛りにあつたかの如く強ばった。

ツムギの顔の右側が黒い何かに覆われていた。それはツムギの顎から滴り落ち、地面にぼつぼつと斑点を作る。彼女が左手に持っているのは腰帯の布で、最早それは真っ黒に染まっていた。鉄臭い臭いがつんと鼻を刺す。ハフリは一瞬頭が追いつかず、ツムギを見つめた。これは

「血が……!!」

思わず声を漏らすと、「わかってる」と素っ気なくツムギは返し、

血だらけの左手を差し出した。

「ほかのぬの、かして。ふくから」

先ほどとは違う力の抜けた口調に、ハフリは背筋を凍らせる。ツムギから流れ出ているものが、単なる液体ではなく、彼女の命そのものだと思い知る。震えだす身体を自らの腕で押さえつけ、唾を飲み下す。

(どうにか、しなきゃ)

驚きおののく頭を必死で働かせながら、肩掛け袋のなかの本を思う。この暗闇では本を見ることはできない。浅く、息を吸って吐く。思い出せ、思い出せ。何度も読んできたじゃないの。

(頭の怪我は、傷が小さくても血がたくさん出るってあった。まずは、落ち着いて、)

書いてあることを思い出すのは、難しいことではなかった。確かに、覚えている。頭のなかで頁をめくる。指で文字を追う。

(圧迫 そう、圧迫だ。血を止めなくちゃ)

はっとしてツムギを見ると、ツムギは新しい布を待っているのか、傷口を押さえていない。それどころか、目に入るのが気に障るのか袖口で顔を拭っていた。ハフリは飛びつくかのようにツムギの持っていた布を取り上げて、もう一度傷口にあてる。血を吸った布の重さに怯んだものの、叫ぶように声を放った。

「しっかり押さえてください!」

ツムギは驚いた顔をしたものの、言われるままに傷口をもう一度押さえた。新しい布、新しい布を探さなければ。ウバタマからとりあげた袋を開いて、手探りでそれらしきものを探す。いちまい、それなりに厚みのある布を見つけて引き抜く。改めて見れば大きさも程よい。

「布、取り替えますね」

ツムギは何も言わずそれに従う。ハフリは血まみれの布を放り投げ、新しい布を傷口と思われる場所に押し付けた。そのまま数刻待つと、じわりと血が滲みだす。血はまだ止まっていなかった。

この暗さでは、傷口の大きさを確かめることはできない。大きな傷ではないことを祈りながら、ハフリは布を再度ぎゅうと傷口に押し付ける。止まって、止まってと心のなかで繰り返す。

けれども、と思う。他にも、ツムギは怪我をしているかも知れない。早く手当をしなければいけないものもあるかもと。現に、ツムギは布を押さえる左手にも力がない。

(この布を額に固定できればいいのに)

ひたい、と。口の端からこぼれた言葉に触発されるように、ハフリの手はマトイからもらった肩掛け袋に伸びていた。取り出すのは、極彩色の刺繍が施された額あて。

それを止血している布の上から巻く。強く絞めて、端と端を結ぶ。暗がりのなかでも鮮やかな刺繍に、黒い色が滲んでゆく。ふいに、さびしさに良く似た、けれども何か違う感覚が心に忍び寄る。しかし、頭を振ってそれをどこかに追いやると、ハフリはかがみ込んでツムギと目を合わせた。

「どこか、痛いところとありますか？」

ツムギはぱちぱちと瞬きをした。何か言おうとしたのか口を開くも、一度閉じ。弱っていながらもどこか不本意そうな口調で答える。

「右手。落ちたとき身体の下にしいちゃったから」

そういえば、布を押さえていたのは左手だったことに重い至る。

ハフリはそつとツムギの右手を自らの手で包み込んだ。いた、と小さくツムギが声を上げる。

「すみません…！」

反射的に謝ると、ツムギは「別に」と素っ気なく返して、声を出さないようにか唇を軽く噛みしめた。ハフリはあえて何も言わずに、もう一度ツムギの手を見た。腕も指も向くべき方向を向いている。折れてはいないように見受けられた。

「特に痛いところは、どこですか？」

手首、とツムギが簡潔に言う。ハフリは少し考え込む。

(ねんざだと良いのだけれど。どのみち、固定はしておいたほうが

いい)

待つていてください、と言いいいて、添え木になるものがないかとあたりを歩き回る。適当なものを一本見つけてツムギのもとに戻り、木を手首にあてる。そして自らの髪を結んでいた紐を解いて、木を腕に固定した。ふと顔を上げれば、ツムギと目が合う。その上額にあてた布からは、血は滴っていなかった。止血できたのだ。どうしようもなく安堵してしまって、ハフリはふにやりと笑みを浮かべた。

「気持ち悪いわよ」

ツムギが顔をしかめて言い放つ。しかしまったく気にならず、ハフリは相変わらずほほえみながら言葉を紡ぐ。

「気持ち悪くて、いいですよ」

そして「よかった」と続けた。ツムギはばつの悪そうな顔をした。ハフリはウバタマの荷を漁りながら、使えそうなものを取り出していく。水筒と干し肉、あとは布。血だらけのツムギの顔を見て、拭いてあげなければならぬと考えていると、

「アンタ、どこでこんなこと覚えたの？ 裕福で安全な森で暮らしてたんでしょ？」

ツムギが尋ねてくる。えっと、とハフリはちらと自らの肩掛け袋に目をやって答えた。

「父にもらった本に書いてあったんです」

「その袋のなかの？ 小屋の脇で読んでいたやつ？」

はい、と頷くと、ツムギはハフリから目を逸らす。何か考え込むように遠くを見て、一度目を眇める。そして、ぶんとハフリに勢いよく向き直り、

「アタシ、アンタが大嫌い」

何度も口にしてきた言葉を、改めて発して。小さく、それでもはつきりと、

「でも……助かった」

それだけ！ と叫んだツムギに、「はい」とハフリは笑って返す。

三つ編みがほどけて、夜の風にふわりとそよいだ。

「アンタも、手拭いたら。アタシの血で汚れたでしょ」

ツムギが、水筒のなかの水を吸わせた布で顔を拭いながら、ハフリに声をかける。出血も止まり、気分も良くなってきたのか、その口調はいつもと変わりない。ツムギが布を差し出してきたので、受け取るうと手を伸ばす。しかしツムギは思い直したように布を持ち直して言う。拭いてあげるわ、と。

「でも、ツムギさん右手が」

「片手でも拭けるわよ」

よこしなさい、と睨まればハフリは従うしかない。ツムギは布を左手でくるむように持って、ハフリの手を掴む。まず拭いたのは親指、次に人差し指。小指までいったあと、手のひらをぬぐう。同時、じくりとした痛みが走り、びくりとハフリは身体をはねさせた。その様子を見たツムギは、呆れたようにため息をつく。

「こんなことだろうと思ったのよ。蜜蝋握ったときでしょ？ 大したことはないと思うけど、あとで他の布を濡らして握ったときなさい」
その言い方は思いのほかやさしく、まるで姉が妹に言い聞かせるかのようで。ハフリはきょとんとしてツムギを見る。一方ツムギは、しまったと言うかの如く眉を潜めると、今度は口を尖らせて付け足した。

「なんか危なっかしいんだよね、アンタ」

うまくいえないけどさ、と。そしてふいに「アンタ、いくつなの」と尋ねる。

「十六です」

「じゃあスオウと同じ年なんだ」

「ツムギさんは？」

「アタシは十七」

えっと、とハフリは少しどもったあと

「……ソラトは？」

「十八ね」

ハフリの手を拭きながら、他愛ない話をツムギは紡ぐ。ツムギには妹もひとりいること。生意気盛りで最近言うことを聞かないこと。スオウは物追射が得意で、ソラトは料理がうまい。ふたりとは幼なじみで、幼い頃からずっと一緒に草原を走り回っていた？

ツムギの口調は明るく、楽しそうだ。ことさら、ソラトのことになると饒舌に聞こえるのは、ハフリが彼のことを気にしすぎているせいなのか。それとも、と思う。

ちらとツムギを見る。まだ若干血で汚れているものの、彼女はよくみると愛嬌のある顔立ちをしている。少しつり上がった眉も、気の強そうな瞳も、魅力的だ。もしかするとソラトだって??そう思うと、ずきんと心臓が痛む。

けれどもその痛みが引くと、すんと落ち着いてしまう自分もいるのだった。ツムギはハフリの手を、強すぎない力で慎重にきれいにしてくれる。散らばった本だって、丁寧に集めてくれた。ツムギとであって、たった一日。それなのに、受け取ったものはとても多くて。

彼女は、はじめて会ったハフリにこう言った。

??こんなところでこそこそして、なんになるの? あんたは何がしたいの?

朝はただ怖いと思った彼女の言葉が、決して感情に任せて投げつけられたもの、ハフリを傷つけるためのものだとは、今は思わない。(わたしのしたい、こと)

正直、まだわからない。けれども、もう少しで掴めそうな気がする。無意識に、指に力を込めそうになる。すると、ツムギが顔を上げる。

「痛いのか？」

いえ、と答えると、自然と顔がほころんだ。やさしいな、と思う。そして、すきだなあと。

「アンタさ、」

ツムギが、思案げにハフリを見て言う。首を傾げると、「あー」と曖昧な声を漏らして、

「何でもない。気にしないで。っていうか、にやにやし過ぎ。気持ち悪いから」

ぶつきらぼくに言い放つ。そして、はぐらかすように付け足した。「あとさ、前髪切りなよ、うっとうしいから。もしくはまとめたら？」

スオウにもそう言われたことを思い出す。完全に前におろすと、目を覆ってしまう長さの前髪。慣れてしまっているせいかな普段は気にならないものの、そんなに周りから見ると気にかかるものなのだろうか。

ハフリの胸中を察したのか、それでもないのか。ツムギはあさつての方向を見て、答えにならない答えを返した。

「見えるものも、見えなくなるわよ」

ハフリは口を開きかけた。しかしそのとき、風が変わる。地面に近い空気がざわめき、落ち着かなくなる。数刻前の出来事を思い出し、ハフリは思わずツムギにしがみついた。ツムギの身体も若干こわばっているのがわかる。

さわさわと木々の鳴く音がして、髪が天に向かってなびく。空に向かって吹く風が生まれはじめていた。あのときとは違う。そう思ったとき、ツムギも「ちがう」とつぶやいた。

「これは、“天馬”よ」

「テンマ？」

風が徐々に落ち着かなくなる。ツムギは空を見つめて返した。

「突風のことをそう呼ぶの。天帝さま　アタシたちがまつついでいる神様が乗る、天翔ける馬。風を起こして空へと駆ける。そのとき起こる風は」

雲を割るのよ。そう言つて、ツムギは左手でハフリの腰を引き寄せた。同時、轟音と共に地面を撫でていた風が全て、空へと向かった。速さも強さも、もしかすると狩人が現れた時より勝っているかもしれないなかった。髪も衣もひどく激しくなぶられていたけれども、不思議と怖くはない。砂が目に入らぬよう、目を閉じると、ほかの感覚が研ぎ澄まされる。空気が澄んでいる、とハフリは思った。

火蜥蜴の吐く分厚い雲を一瞬で分ける、疾風の馬。

その嘶きを聴いたような気がして、ハフリは小さく身を震わせた。ゆっくりと風は収まり、髪が降りてきて顔にかかる。それをツムギの手がどかしてくれたのを感じた。

「目、開けてみなよ」

ツムギは興奮したよう言い、続けた。アンタ、ついてる。滅多にこんな風吹かないもの。それに、それに。

「ほら、空が見える！」

ハフリは瞼を持ち上げる。一度目をつむったせいか、夜目がきかなくなり、辺りが先刻より数段暗く見えた。見えるようになるのを落ち着いて待ちつつ空を上げば、透明な風が吹き抜ける。空気は静かで、ぴんとしたはりを持っていた。天の馬が地上にあつたすべての空気をさらって入れ替えたような気がした。それほどまでに、肌に触れるもの、感じるものが違う。

見える？　とツムギが空の一点を指さして言った。その方向に目をやれば、たしかに、空が割れている。それは腕を伸ばして手をかざせば消えてしまうほどの大きさだったけれど、夜空の色がそこにある。空が雲に覆われていると、日が暮れただけでは見ることできかない色。深く澄んだ、藍。

小さな夜空を見上げながら、ハフリはふと考える。翳りのない水の底が見えるように、澄んだ空気のずっとずっと向こう側に、この藍色が??空の果てがあるのだろうか。

もちろんどんなに目を凝らしても、空の果てがどこにあるかなんてわからない。ただ、どこまでも、どこまでも続いているのを感じる。おわりなんて、ないかのように。

すいこまれそう、と思う。この藍色のなかに、目がそらせないまま溶けてしまいそうだ。冷たい風にさらわれてしまいそうだ。自分の存在が、とてつもなく小さいものに思えて、怖い。

なのに、夜空の欠片はただただ胸が痛くなるほどにきれいで。

夜目がきくようになったせい、星が藍色のなかを埋め尽くしそうなほどに存在していることが分かる。星の輝きは、光を弾く雫の輝きにも似ていて、はたまた火の粉のようにも思えた。さらさら、きらきらと星はまたたく。風がうねって通り過ぎていく。つかの間の沈黙の中に、自分の心音を聞いた。とくん、とくんと。星のまたたきは、心臓の鼓動のようだ。

きつと雲がすべてなくなったら、そこには星がたくさんあるのだろう。空を横断するように存在する、星の群れ。星の川、と。森では星の群れのことをそう表した。天空の川。銀の川。きめ細かくて繊細な星のあつまり。

「天の川、ですね」

思わずそうつぶやくと、ツムギが「それって、星のあつまりのこと?」と尋ねられる。こくりとうなづく、へえとツムギは声を漏らした。

「アタシたちは、星の帯って言うの。誰よりも優れた狩人だけが、天帝から授けられるの」

ほしのおび、とハフリは繰り返す。たしかに、そうも見えるかも知れない。夜空を見上げながら、想像する。きつと星が帯になったら、絹よりもたやすく指が滑り、紗よりも繊細で軽いものになるだろう。川ならば、光をはらんで、時に弾き輝く澄んだ水が流れるも

のになるだろう。

(おもしろいなあ)

同じ空を見上げて、違うものを見ている。それは不思議なことのようにあり、あたりまえのことだった。ハフリは、わたしは、わたしの、この目で。見て、考えるのだ、と。気づく。気づかされる。

ハフリは、思わず空に手を伸ばした。

「星の帯、ですか」

もちろんのこと、届くはずがない。ツムギがバツカじゃないの、と苦笑まじりに呟いた。

しばらく、何も言わずにふたりで空を見上げていた。雲は無慈悲にも、少しずつ、けれど確実に空を覆っていく。夜空が消える最後の一瞬まで、見のがさぬよう、自らに焼き付けるように見つめ続けた。

音もなく、空は雲に閉ざされる。ふうとどちらともなく息をついた。そして、顔を見合わせる。ツムギが一瞬目を逸らし、ちらと自らの額??傷にあてられた布、もしくは額当てを見た気がした。

じっと、ツムギに見つめられたじろぐと、

「そういえばアンタ、どこの民なの」

「唄鳥の民……です」

ふうん、と。自ら訊いた割にツムギは興味なさそうに呟いて、あくまでも素っ気ない口調で付け足した。

「アタシ達山鳥の民は、自分たちに流れる他の民の血も大切にしている。だからもう一つ民の名前を名乗る」

だから、と言った後の言葉はよく聞こえなかったが、ハフリはこう言われた気がした。だからアンタもそうしなさい、と。

ハフリは、ふるると身体を震わせた。一緒に心も震える。とくとくと心臓が跳ね回る。立ち上がって、走り回りたくなる。もちろんそうはしなかったけれど。

一方ツムギは、むずがゆそうな顔をして、落ち着かなそうに目線をさまよわせていた。最後には、ぐいっとハフリの肩を引き寄せて

「寒いし、こっち寄りなさいよ。寝よ。明日にはきつと誰かが探しにきてくれる」

こっくりとハフリは頷いて、そっとツムギにもたれかかる。

やわらかくて、あたたかくて、どうしよつもなくしあわせな気分だった。

閑話「夜と子羊」(ツムギ視点)

ツムギは小さく身じろぎした。同時に、自らの左肩に寄りかかる少女の頭も小さく揺れる。それにちらりと目をやって、「重い」と胸中で呟いた。

少女??ハフリは身体をくたりとツムギに預けている。長い前髪のせいで表情は伺えないものの、聞こえる寝息は穏やかで、どこかしっとりとしていた。父親に「いびきがうるさい女は嫁に行けんぞ」と言われたことがふいに思い出され、小さく舌を鳴らす。どーせアタシにはこんな可愛げありませんよと思いつつ唇を尖らせる。先日妹に「お姉ちゃんはいびきはウバタマの嘶きよりうるさい」というお言葉を頂いたばかりだ。

否が応でも視界に入るのは、ゆるく波打つ薄金色の髪。それは時折夜風にもてあそばされて、ツムギの頬をなでる。ひどくやわらかくて、くすぐったくて、むずがゆくて。落ち着かない気持ちにさせられる。悪く言うならば、苛々させられる。そして思い出す。そうだ、アタシはこの子が大嫌いなんだ。おどおどしているところも、背を丸めて歩くところも、顔を覆い隠すような前髪も、ちいさな声も、すべてがすべて、気に食わない。すっかり忘れていた。そう、忘れていた。

はあ、と深いため息をこぼす。つま先をしばらく見つめた末、うがーとうめくような声をもらして、空を仰いだ。そこにあるのは闇で染まった雲の天井だけで、あの果てない藍色は、夜空の欠片は、とうに消え去っている。

上を見ると、額にあてがわれた布も目に入る。それを固定しているものは、たしかこの少女がこの村へと持ち込んだもののひとつではなかっただろうか。あやういのよ、とツムギは思う。あやういのよ、この子。人の怪我は必死に手当てするくせに、自分の怪我には鈍感だし。そこまで考えるとあ、とまたため息が漏れた。何をこ

んなに考えているのだろうか、自分は。

アタシはこの子が嫌い。その理由をあげればきりがない。けれど、その一番の理由はハフリにとっては何となく理不尽なもので。身勝手だとわかっている。わかっているのに、心の奥底で弱い自分が叫ぶのだ。とらないで。アタシの居場所をとらないでと。

宙に向かって手を伸ばす。指先は空をかき、何もつかめはしない。澄んだ静謐な空気は平時は心地よいものであるのに、ふとした瞬間に不純物を弾いて浮かび上がらせる。普段どれほど目を背けてみても、弱い自分は消えやしないことを思い知る。柄にもないと強がってみても、鳩尾のあたりに例えようのない重さが溜まっていく。

おさまっていた額と手首の痛さまでぶりかえしてきて、いよいよ落ち込んできたそのとき、ぎゅむ、と。もそもぞと動いたハフリがくるりと身体を反転させて？抱きついてきた。げ、と反射的に思っでやんわり引きはがそうとすると、がっちり腰に腕を回される。「離しなさいよ」と声を放つてみたものの、意識は寝たままなのか反応はない。そのくせしがみつくように抱きしめてくる。まるで言葉の分からぬ赤子か、聞き分けの悪い幼子を相手にしているようだ。ふう、と息が漏れる。けれどその息は先刻まで吐き出していたものよりもずっと軽くて。自分でも驚いて目を見張る。数回まばたきを繰り返したのち、しがみつくハフリの身体を少し動かして、膝に頭が乗るようにしてやる。長い前髪をそつとのけてやると、このうえなく安らかな表情をした顔があった。口を小さく開けて息をして、時折閉じてはなにやらもごもご動かしている。その様子を見ていると、身体の力がすんと抜けて。苛々も鬱々も通り越し呆れてしまう。

衣越しに伝わるぬくさは、子羊のそれに似ていた。子羊だと思っでおこうと考える。それなら、それならば、きつとすこしだけやさしくなれるから。

そつと子羊の頭をなでながら、ツムギは目を伏せる。徐々に身体

を包み込むまどろみは、綿のようにやわらかく、あたたかかった。

ハフリが瞼を持ち上げると、思った以上に明るい世界がそこにあった。光をはらんだ雲は、時折太陽よりも広がりのあるまぶしさを有している気がする。ぼんやりとした思考のなか、この明るさからすると昼を回っているかも知れない、と考える。そして幾度か目をこすった末、自分の頭がツムギの腿の上にあることに気づいた。ツムギはまだ眠っているようで、いびきを交えた寝息を漏らしていた。その表情は穏やかで血色も良く、額に巻かれた布、そして額当てにも乾いた血がしみ込んでいるのみだ。よかった、と改めて胸をなで下ろす。

ツムギの太腿からそうつと退いて地面に寝転ぶと、もう一度空を仰ぎ、目を細めた。なんとなく口を動かそうとすると、唇がかさつき、口内がねばついていることに気づく。水は昨晚で使い切ってしまったが、不思議とあまり不安はなかった。

徐々に明るさに目が慣れてくる。淡く光を放つ雲。今日の雲はいつもと比べると厚さが薄いのかも知れない。わずかながら、素肌に陽光のあたたかさを感じた。風は穏やかで、昨日の出来事が嘘のように感じられる。

目を閉じると、血潮が透けて見えた。開くと、また光に世界が白んで直視できない。思わず顔を背けようとしたそのとき？星が見えた。反射的に飛び起きて、空を仰ぐ。手でひさしを作つて、見極めようとする。それは、ひかりだった。そして、直感的に思う。あれは、翼をもつ金色の獣だと。

「ティエン」

思わず名を口にする。来てくれた。やっぱり、来てくれた、と。まだ姿形を捉えたわけではなかったが、心はもう確信を抱いていた。けれど、と思う。ここからハフリが叫んで、彼に声が届くだろうか。手で喉元を押さえる。自分に問いかける。私は、叫ぶことができる

の？ いつもあんな小さな声しか出せないのに。

ちらと背後で眠っているツムギを見る。視線をおろおろとさまよわせ、結局、ツムギの肩をそつと揺すった。数回揺さぶれば、ツムギもうつすらと目を開けて。「なに」と不機嫌丸出しの声で応答する。一瞬気圧されたもののかるうじて「空に、たぶん、ティエンが」と伝えた。

すると、ツムギはかつと目を見開いて、身を起こし立ち上がる。

その俊敏な動作にハフリが驚いている間に、すうつつと音が聞こえるほどに空気を吸って、口許に手をやって、

「バカスオウー！ 聞こえてるんでしょー！」

全身をふるわせ、一気に縮ませ、跳ねさせ、空気を割るような声を出した。耳が痛くなるほどの、音量。スオウも上空にいるのだからかと考える。そう言えば赤鷹の民は視覚と聴覚が優れていると、彼が言っていた。といつても、ツムギの声の大きさならどこまでも聞こえそうに思われたが。

びりびりと、しばらくの間余韻が肌をなでていった。空を見上げれば、金色の星のきらめきが増す。翼が見える。蹄の前肢がわかる。騎乗しているのは、赤髪の少年と？ 焦げ茶色の髪の少年。

金色の翼が上下するたび、小さく砂塵が舞い上がる。着地する前に飛び降り、駆け寄ってきたのはスオウだった。その瞳孔は、普段の赤茶色ではなく真紅に染まっている。炎よりも濃く、血の色よりも鮮烈な色だった。驚きのあまり「目が」と呟くと、ハフリの前にやってきたスオウは笑って「あー、これはチカラを使うところなんねん。すぐ引いてくから、気にせんといて？」と言う。そして、ぺたぺたとハフリの肩や頭を触り、顔を覗き込んだ。

「怪我ない？ 大丈夫か？」

「だいじょぶ、です」

あーよかったホント良かった、と大仰なまでにスオウは声を上げる。すると、その横から

「ちよつとアンタ、こつちみなさいよこつちを」

とツムギがこめかみに血管が浮き上がってきそうな顔をして言った。一方、スオウはまじまじとツムギの額、そして固定された右手を見て「おー、無事やったんやな」とこともなげに声を放つ。ばこん、と容赦なくツムギは左手でスオウの頭を叩いた。

「これが無事に見えるわけのスカポントン」

もーいいわソラトに心配してもらうから、と頬を膨らませてそう付け足すと、ツムギは足取りも軽やかにテイエンの方へと向かっていった。「ソラト、おかえり」と、伸びやかな声が響く。ハフリもツムギが向かう先に目をやろうとした。しかし、何かが視界の隅で動いたのが見えて。思わず傍らの赤毛の少年へと視線を戻す。動いたのは手だった。スオウは片手を持ち上げ、けれど指先で空気だけを掴んでゆっくりと下ろす。同時、ふうと息をついた。その響きからは確かな安堵と、一抹の乾き？寂しさに似たものが感じられて、思わずスオウの顔を窺い見れば、彼はツムギの駆けていった方向、否、彼女自身を見つめていた。やさしく目を細め、けれど瞳に少しの影を落として。その影が、光が遮られできるものではないことをハフリは知っていた。森にいた頃、水に映った自分はいつもあの影を瞳にまとわせていたから。そして、先刻のツムギに対しての態度とはまったく違うその様子に戸惑いながらも、何かを掴んだ気がした。

ふいに、スオウの視線が自分に向けられる。お互い一瞬きよとんと目を合わせてしまったものの、先にスオウが破顔して。とんとハフリの背を押すと「なーに遠慮しとんの。いかな」と言った。その反動で一步前に進む。思考が切り替わって、全身の感覚が数歩先に傾けられる。しかし、それ以上動くことができなくて、木偶のように突っ立っていた。ほどいたままの髪が風に揺れ、視界を遮る。なのに、その間から見える景色が、そのひとが、ひどくひどく鮮明で、どうして良いのかわからなくなる。ただ、見つめることしかできなかった。

硬そうであるのにしなやかに風に揺れる焦げ茶色の髪。ぶ厚めの

外套をまとっているということは、さらに北の方へ行っていたのだろ。心なしか、目の下の隈は濃さを増している気がした。けれども、瞳は。樹液のような色と艶を持ったその瞳は、相も変わらず強い光を宿して見えて。ああ、このひとはほんとうにいきっているんだ。当たり前のことであるのに、強く意識した。ぶる、と身体が小さく震える。そのとき、

「ハフリ？」

低く掠れた声でつくられたみつつの音が、耳からハフリの内側に滑り込む。ほしみたいだ、と意識の隅で思った。藍色の空に浮き上がったみつつの星。小さくて、けれども瞬くたびにさらに小さな光の粉を振りまく。そしてその粉がまた新たな星になって、あつまつて、水になって、川となる。ゆれる。あふれそうに、なる。ふつつと浮きがってくる想いは、消えない泡のようだった。わたしは、わたしは。ずっとこの声を聞きたかった。このひとに名前を呼んで欲しかった。??ソラトに、あいたかった。

心はあつという間に星で埋め尽くされ、星の水は川ではなく海となる。波が波を呼び、とぷりとぷりと音を立て、時折大きくさんざめく。目でソラトを見ているはずなのに、光で視界が覆われているような感覚におちいつて。なんなのこれは、と。喘ぐようにそう思った途端、呼吸するのも苦しくなる。心臓が大きく鼓動し、内側から身体を震動させる。血が、熱を増す。なにかが喉の先まで出かかっている。けれども外に出すのは躊躇われて。その感情の正体もわからないまま、ただこうように「ソラ、ト」と言葉がこぼれた。けれども、小さくつたない三音は風に吹かれ、すぐに空気に融けてしまふ。

ゆっくりと。光のようなものも引いていった気がした。そこには、こちらを見つめるソラトがいて。思わず唾を飲み下す。彼の瞳に自分が写っている??そう認識した途端、反射的に顔は地面を向いて

しまった。そんな自分に戸惑う。息はまだ、苦しいままだった。

砂と靴が擦れる乾いた音が数回響いて、足許に自分の靴より一回り大きい靴が現れた。革で作られた靴は、丈夫であるはずなのに傷だらけだ。つま先がひときわ擦れているのは、彼がつま先から地面に付いて歩くからだだろうか。なんとなく、意外な気がした。足を大きく上げ、踵からしつかり地面に踏み込む姿の方がソラトには似つかわしく感じたから。

ハフリ、と。小さく呼ばった声は、わずかな逡巡を含んでいた。目を合わせなければと思う。合わせたいと思う。けれどもなぜだか、怖くて。

「けが、なかったか」

降ってくる声に、かろうじてこくりと頷く。そっかよかった、とソラトはぼそぼそと呟いた。きつと困らせている。沈黙が、重い。

「ちよつとスオウト、相談してくる」

言い訳のようにそう言つて、きびすを返す気配がした。そのとき、片手が咄嗟にソラトの服の裾を掴んでいた。自分が一体何をしたいのかわからない。なにが、したい？ 自分に問いかける。握る手に力を込めて、無意識に唇も噛みしめる。一度ゆつくりと目を閉じて、開いて?? 顔を上げた。動いた勢いで前髪が視界から消える。気がほどけたような感覚があつて、息が吸えるようになる。風がすこく冷たく感じられて、それは自分の頬が紅潮していたせいだと思つた。ひどい顔をしているかもしれない、と思う。けれども、最早目を逸らすことはできなくて。一方、ソラトは驚いたようにハフリを見つめていた。映っているものが見えそうなまでに澄んだ、焦げ茶色の瞳孔。そのなかにある、ひかり。ああ、やっとみれた、と思つた。自分から避けていたはずなのに、目が合ってしまったえうれしくて。思わず顔がほころぶ。

裾を握った手とは逆の手で、喉を押さえた。震える、喉。音となり声となれ。いくつもたどたどしい音をもらして、さいごに、
「おかえりなさい」

たった一言をはなつ。大きな声ではなかった。けれども、風に流されることはなく、まるでソラトやツムギやスオウの言葉と同じようにまつすぐに響いた気がした。そつと、喉をなでる。同時、頭のうえに何かが乗せられた。ソラトの、てのひら。ハフリの髪？？ほめて広がり、所々絡まっている薄金色のそれをすくようになでる。そして、頬に触れた。ソラトの指先はひどく荒れていて、ささくれがハフリの肌を浅くひっかく。それに気づいたのか、ソラトはしまったというように手を引っ込めた。その手を引き止めたい衝動に駆られたものの、身体は動かさず、ハフリはただソラトの顔を見上げていた。ソラトは一瞬目を逸らしたあと、口許を緩めて笑う。それは無邪気な少年の笑い方ではなく、どこか大人びた笑い方だった。かすかな不安が、浮かんで消える。

そのとき、ソラトの胸元から風音のようなさえずりが響いた。続けて「オカエリナサイ」と、ハフリに似せた声が聞こえる。ソラトの胸元に目をやれば、そこには古びた方位磁針と小さな袋がかかっていた。袋のなかにいたのは、空色の小鳥。

「フウ」

名前を呼ぶと、フウは羽毛を逆立て身体を膨らまし、不服そうにもぞもぞと動く。ソラトが首から袋につながっている紐を取り上げ、ハフリに手渡してくれた。

「こいつ、俺が出かけようとしたらえらく鳴くもんだからさ、連れてきたんだ」

ソラトが苦笑まじりにそう言う。目元の笑うその表情に、ハフリはひどく安堵して。「ただいま」と、フウのやわらかい羽毛に頬を寄せた。

崖の上へとティエンで登り、ソラト達が持ってきた水と少量の食料をツムギとともに平らげて数刻。ティエンに乗せられたツムギは、

不満そうに声を上げた。

「なーんでアタシがスオウとティエンで帰んなくちゃ行けないわけー!?」

ティエンの傍らに立つスオウは苦笑し、その隣に立つソラトは、ウバタマの手綱を持ちつつ呆れたように「お前は怪我してんだろ」と言い放つ。そしてツムギが口を挟む隙を与えずに「スオウは明け方からチカラを使いつぱなしでかなり疲労してる」と付け足した。ツムギはまだもの言いたげな顔をしていたものの、数歩離れたところにいるハフリをちらと見て?小さく嘆息する。そしてまだ騎乗していないスオウを見て「早く乗りなさいよノロマ」と口を尖らせた。

光の粉を振りまいて、ティエンが翼をはばたかせる。風が生まれ、空へと獣を導く。空へ向かって吹く風には、“天馬”に似たものを感じられる。徐々に浮き上がり、天を駆け空の一点になるまで見送った後、ソラトがウバタマを指して言った。

「ウバタマは疲れてるだろうから、引いていく。歩けるか?」

ハフリはこくりと頷く。そのとき、ひら、と空から何かが舞い降りた。白と黒の混じった、何か。肩に乗ったそれを指で掴もうとすると、さらと崩れる。冷たくもなく、熱くもない物体。灰だ、と気づく。この地には、こうして時折灰が降る。火蜥蜴の山から、雲に紛れ風に乗る、やってくる。村に帰ったら掃き掃除をしなくてはいけないな、と考える。でなければ、しがみつくように生えているわずかな緑すら消えてしまうから。

ひらひらと、あまりにも軽やかに灰は降る。そしてゆっくりと積もっていく。村の状況は、刻一刻と悪くなっていく。灰は燃え尽き死んだものだ。生きているものには馴染まず毒となる。このままでは大地は灰に侵され、馬や羊の食べる草すら生えなくなってしまうだろう。

「どうにかしないとな」と。ソラトが遠くを見つめながら、うな

るように呟いた。その様子と語調から、今回の旅も徒勞に終わったことが察せられて。声をかけることもできず、立ち尽くす。

一步、ソラトが踏み出した。つま先が地面をこする。まるで何かを詰り、蹴りつけるように。そして、ハフリに背を向けたまま、問うた。

「お前、この村に来て良かったと思う？」

その答えに、迷う必要などなかった。うん、とうなずく。そっか、と表情を見せることなくソラトは言った。その声はどこか息苦しうにも感じられて、ずきんと心が痛む。胸元で手を握る。やるせない気分になる。自分の無力さを思い知らされる。

無意識に、一步踏み出して。もう一步、駆けるように進む。追いついた背中を見上げて、力なくぶら下がる片方の手を、両手で包み込んだ。おおきくて、乾いていて、ささくれていて　ひどく冷えた、手。ぎゅっと力をこめる。手を握って安心したかったのは自分の方なのかも知れないと考える。けれども、伝える言葉が見つからないから、できることがなにもないから。ただ、握り締める。体温くらいならぜんぶあげてしまってもいい、そう思った。

おそろおそろ顔をあげると、ソラトは呆然としたようにハフリの握った手を見つめていた。急に不安になって手を解こうとした刹那、躊躇いがちに握り返される。それほど力を入れていないだろうに、ハフリの握力よりもずっと強い。力になりたいと思うのが、おこがましいのかも知れなかった。でも、でも、と思う。わたしはこのひとのちからになりたいと。

帰るか、と手をつないだままソラトが言った。こくりとうなずいて、歩きだす。少しずつあたたかくなっていく彼の手に神経を集中させながら、心の中で「ここにいるよ」と小さくつぶやいた。

朝靄にけぶる景色のなか、カン、カンと、軽やかな金属音が響き渡る。その音はいつしかふたつ、みつつと、村中の幕家の傍らから奏でられ、広がる。時折調子を変えて、カンカカ、カカカンと。

徐々に靄がひいてゆくと、ちらほらと女達の姿が見える。小さく鼻歌を交えながら、彼女らが叩くのは筒??幕家の煙突だ。

山鳥の民??ことさらに女達の朝は早い。雲に覆われた空がうつすらと白んできた時間に目覚め、忙しく働き始める。毎朝、食事より何より先にすませるのは、煙突の煤落としだった。幕家から取り外した煙突を、棒で叩いて煤を落とす。そして一日のはじまりに焚く炎の煙には、きれいな煙突をくぐらせる。

ハフリも棒を片手に、腰を屈めながら煙突を叩く。ふと、唄鳥の民も炎を大切に扱っていたことを思い出す。炎には神や精霊が宿るのだとセトが昔言っていた。

棒で叩くたびに筒が細かく震え、音が反響する。筒の外に飛び出た音は、周りの音とともに草原を跳ね回る。眠気も一緒に飛んでゆく。

横で見守ってくれているのはソラトの母、オウミだ。ちらと目をやると、やわらかなまなざしが向けられる。ふふとオウミは口許を緩め「そうそう、そんな感じよ」と。それだけでうれしくて、笑いそうになってしまう。けれども自らの口を閉ざし、唇を落ち着かなそうにもごもごとさせるに止める。手を動かして煤を落とす。

カンカン、カカカン。高らかに、まるで何かの祭りの音楽のように響く。朝の音。山鳥の民の一日のはじまり。その営みにハフリが慣れてきたのはここ最近、ソラトが帰ってきた頃からだ。そこからさらに数日が経っていた。

そういえば、とぼつりと思う。ここに来たばかりの頃は、過ぎ行く日にちを毎日数えていたものの、今となってはあまり頓着しない

ようになっている。一体どれほどの日にちが経ったのだろうか？
？そこまで考えたとき、最後の煤がはらりと地面に落ちた。

「あ、終わりました」

手で顔を軽く拭い、ぱつと顔をあげオウミを見る。するとオウミは一瞬驚いたように目を見開いたあと、くすりと吹き出して、

「あらあら、顔に煤がついてるわ。拭ったときに付いちやったのね」
自分の手に目をやると、確かに煤で黒く汚れている。服も所々汚れていて。その上、気づけば他の女達は仕事を終えていたようで、聞こえてくるのは羊の鳴き声だけだ。う、と声にならない声が漏れる。

「すみません、今日もまた、」

消え入りそうな声を放つと、オウミは相変わらず微笑んだまま「気にしないで。ありがとう」と答え、ハフリの頭をやさしくなでる。そしてハフリの手から煙突と棒を取り上げて「これは戻しておくから、手と顔を洗っていらっしやい」と。

こくりと頷き、きびすを返して水場に向かう。下唇を軽く噛みしめ、拳に力を込める。

（まだ、だめだ）

いつになったら、周りと同じようにできるようになるのだろうか。情けない気持ちと、申し訳なさが、ぐるぐると内側で渦をまく。そのまま巻き込まれてしまいそうになる。けれども、足を止めて、視線を上げる。空を仰ぐ。そこにあるのは青空ではなく灰色の雲だけだ、

（『まだ』なだけだもの）

そう自分に言い聞かせる。オウミが、この村の人たちが許してくれているあいだに、なるだけ早くできるようにするのだ。明日は、叩き方を変えてみようか。それとも筒の角度を変えようか。そんなことを考えながら歩を進める。

水場といっても、森と違って泉があるわけではなく、置かれているのは大きな水瓶が数個だけだ。蓋を開けると、なみなみと水が入

つていた。水は毎朝何人が馬に瓶を積んで汲みにいく。今は一番近い川が枯れてきているので、別の川へと遠出しているときいた。

澄んだ水はわずかな光でもはらんできらめく。ふるふると震える水面が綺麗で、思わず指を伸ばし？？しかしとどめる。草原での生活で水はとても貴重なものだ。無駄にするようなことはできない。傍らに置かれた大きめの桶に水をくみ上げる。それを持ち上げ水を飲み、口をゆすぐ。地面に置き、両手を早く洗う。そして手で水をすくって顔を??

「おはよ」

地面に何かが置かれる重い音、そして震動。それらとともに、高い声が降ってくる。手にすくった水を落として目をやれば、そこにいたのはツムギだった。置かれたのは大瓶だ。彼女が今日の当番だったのだろう。瓶を運ぶのに力んだのか、頬が赤く染まっていた。幼子が入れる程の大きさがあるのだ、運ぶのは一苦労に違いない。

「お疲れさまです。あ、あと怪我の調子は、」

そこまで言いかけたハフリの口を、ツムギの手が制する。彼女は呆れたようにため息をつき「何日経ってると思ってるのよ。ほら」と額を指差した。そこには昨日まであった当て布はなく、けれども小さな傷跡が残っていて。額を大きく出すツムギの髪型では、それなりに目立ってしまった。

ハフリの表情が曇ったのがわかったのだろう、ツムギはハフリの顔を両手で挟み込むと、ぐいっと押しつぶした。そして、眉をひそめ目を眇めてあのねえと。

「人間生きてれば怪我のひとつやふたつできるわけ。バツカじゃないの、って、」

ぐぶ、と。喉の奥で空気を押しつぶした音がしたかと思うと、ぶは、と吐き出される。あはは、と両手をハフリから離してツムギが笑う。腰を丸め、目尻にしわをつくり、肩を揺らす。収まったかと思えば、目が合って。するとまたしても発作のように笑う。そしてきょとんとしているハフリの顔を指差すと、アンタヒゲ生えてるわ

よじ。

瓶のなかを覗き込むと、見事に鼻と唇の間に黒い筋が付いている。道理でオウミも笑うはずだ。急いで屈み、桶を手元に引き寄せる。が、後方から足音が聞こえて。なぜか振り返ってしまふ。そこにいた人物は寝癖のついた濃茶の髪をがしがしとかきながら、眠たげに目を細めた。視線が交差する。身体が強ばる。頭のなかからすべてが吹っ飛んでしまつて真っ白になる。

「……はよ」

放たれた低い声が挨拶だと、咄嗟には理解できなかった。ただ、真っ白な頭のなかに濃茶の瞳がふたつ焼き付く。どくんと心臓が鳴つて、何かが奥の方からわきあがり、あふれそうになる??が、

「ひげ、」

ソラトのつぶやきに、それらは一斉に引いてゆく。同時に、血の気も。しかし次の瞬間にはかっとなえるような感覚とともに一気に顔中が熱くなつて。「こ、これは!」と、叫ぶように声を放つていた。自分で自分の声量に驚き、更に呆然としているソラトそしてツムギを見て慌て、たどたどしい言葉を吐き出す。

「その、えつと、えんとつそうじ、で、だから、」

ツムギがやれやれと言つたように苦笑する。ソラトは、若干目を逸らしたあと

「わかつた、わかつた」

くすくすと笑つて、ハフリの頭をなでた。手のひらの大きさこそ違えど、先刻オウミに同じようにされたことを思い出す。けれども、どうしてソラトだとも落ち着かない気持ちになるのだろうか。その手を、掴みたくなるのだろうか。彼の手は、今はあたたかいのだろうか。それとも、また冷えているのだろうか。触れて確かめたい。できることなら、握り返して欲しい。離れていく指先の軌跡が、冷たい乾いた風になつて、薄金の髪を揺らした気がした。

「……顔、洗わないの?」

数秒の沈黙のあと、ツムギが尋ねる。んー、とソラトは考え込ん

で、ツムギの方に目をやると。

「先にティエンの様子見てくる」

そう言つて、厩がある方へと向かつていった。固まったままの身体をほぐすように、指を曲げて伸ばしてみる。指先が、小さく震えていることに気づいた。頬はまだ熱い。ほう、と肩の力を抜いて漏らした息は、熱が残っていたのか白くたなびき空気に融けていった。「なにカチコチになつてるのよ、アンタ」

ツムギはハフリに一歩近づくと、ソラトの去つていった方向を見ながら小さく付け足す。

「久々に笑つてるところ見た」

え、とハフリが思わず声をあげれば、不機嫌そうに「なによ」と返されて。口を閉ざしていると「いつも口数少ないし、無愛想じゃない」と。

確かに、帰つてきてからのソラトはいつも眉間にしわを寄せているし、声も唸るように低く、放つ言葉はひどく簡潔だ。それはハフリのなかの彼と違つていて、正直戸惑うこともある。けれどもツムギは、ハフリが『いつもと違う』と思つていたソラトが『いつもの彼だと言う。無意識に、胸に手を当てていた。』

「小さいときはホントやんちゃというか……くそがきだったけど、落ち着いたもんよ」

幼い頃から一緒にいた彼女がそう言うのなら、そうなのかもしれない。けれども、

「少し、心配なんです。イグサさまと話したあととか、いつも考え込んでいる顔をしてるから」

ハフリの声が切実さを含んで響く。ツムギはそれに気圧されたのか、ぱちぱちと数回まばたきをした。そのあと、耳元に手をやって髪をかきあげると、

「イグサさまと話して考え込んでるんだとしたら『お告げ』のせいかもしれないわね」

お告げ？ とハフリが首を傾げると、ツムギはやや面倒くさそう

に、けれども丁寧に説明してくれる。

「ソラトたちに流れているのは山鳥の民の血と、時鳥の民の血よ。時鳥の民には未来をみるチカラがあるの。といっても好きなときに見れるわけじゃないみたい。突然言葉が降ってきたり、寝てるときに断片的に予知夢をみるんだって」

そのなかでも、と続けて

「イグサさまはすごいチカラをお持ちなの。ソラトがあちこち飛び回ってるのも、多分イグサさまから指示が出ているからよ」

しじ、とおうむ返しに繰り返すと「そーそー」と投げやりな返事がよこされる。投げやりと言っても、それは事柄を軽く捉えていると言うよりは、ハフリが重く考えそうな分を取り除こうとしてくれているように感じられて。また心配をかけてしまってるなど、紺色の瞳を見つめれば、ほっぺたをつねられる。ツムギは幼子に言い聞かせるように顔を寄せて、

「だからアタシたちは、イグサさまが落ち着いているならきつとどうにかなるって信じられるのよ」

にっこりと。強く、不敵に笑った。ハフリも、つられてほほえむけれども、自分のおくの何かが、軋んだ音を立てた気がした。同時、喉が引き攣るように痛む。咳が数回、まるで身体を捻られるような痛みとともに漏れる。ちよつと、と心配そうに覗き込むツムギに「だいじょうぶです」と掠れた声で答える。??ここ数日、このようなことが数回起きていた。

咳が止まった後は、身体中から空気が抜けたようになる。大きく、深く、息を吸う。先刻軋みを感じたのは、咳のせいだったのか。それとも……なんだった？ うまく考えがまとまらない。予知。指示。誰の。どうして。

「大丈夫なの？」

弱々しい声にはっとして顔を上げる。

「心配かけて、ごめんなさい」

「心配なんて、してないわよ。バカ」

ぎゅ、とツムギに手を握られ、引かれる。やわらかく、あたたかい手だった。それにひどく安堵してしまう。

「次は、乳搾り行くわよ。アンタ、まだやったことないでしょ」「ちらと振り向いて、むずがゆそうな顔をしていう彼女に「はい」と笑い返す。前を歩く少女の背中から、空に視線をやる。指先で喉をなぞり、胸に触れる。

なぜだろう。

雨の降らないこの地で、どす黒い嵐雲を目にした時のような気持ちになるなんて。

つかれたーと吐き出した声は、言葉の割に軽やかに響いた。村はずれの小屋。その壁に寄りかかり、ハフリは腰を降ろす。あのあとツムギに連れられて牛の乳搾りを手伝いにいき、朝食を食べたあといつも通り薪を運んで今に至る。時間が空いたときにここに来てしまうのは、最早癖になっていた。今は理由がひとつあるのだが。

ふう、と息をつくくと、胸元からおうむ返しに同じ音がする。目線を落とすとそこにいるのは空色の小鳥。普段一緒にいるハルハが熱を出して寝込んでしまったのだ。ハルハは気管支があまり強くないらしく、体調が悪い時は動物の羽毛が障るのだという。

心なしか元気がなく見える小鳥の喉元をなでてやると、気持ち良さげにさえずって顔をすりよせてくる。こうして、ひとりと一羽でいる時間も大切だなと実感する。例え鳥であろうとも、フウは森にいたときから一緒に過ごしてきた家族なのだから。

(森、か)

最近、ひとりになるとよく考える。緑の木々に覆われた深い森。そこで暮らす、金髪緑眼のひとびと。帰りたいわけではなかった。けれども、気にかかる。それは多分

??アタシ達山鳥の民は、自分たちに流れる他の民の血も大切にしている。

ツムギの言葉が心に残っているからだ。こうして時間を見繕っては、密かに歌う練習をしているのもそれ故のこと。と言ってもそう簡単に歌えるようになるはずがなく、毎回ひどく落ち込むのだが。

それでも“今日こそ”という想いを捨てきれず、すう、と空気を吸う。フウのつぶらな瞳と目が合い、ふわりとほほえむ。冷たく乾

いた、けれども澄んだまるやかな空気が肺を満たす。??が。

鳥よ、われらに調べを与えよ

風よ、われらの歌を運べ……

いつもいつも、ここの空気は澄んでいるのに、吐き出されるものは歪み淀んで聞こえる。しかしそれを理解してもなお、諦めきれない自分がいた。もう少しで歌える気がするのだ。けれどもそれは未だ、

いのちあるものに幸あれ

すべてのものに癒しあれ……

独りよがりな想いにすぎなかった。小さな口からこぼれる音は、キリのように滑らかで整った音程も持たず、やわらかくやさしい響きも感じられない。

自分の内側をさまよって音を探す。あれでもない、これでもない。こんな音を出したい訳じゃない。こんな歌を歌いたい訳がない。キリのように歌いたかった。誰にも笑われない、憐れまれない歌を歌いたかった。なのに、

われらの声、まさしく……

違う。違う違う違う!! 喉を押さえる。否、無意識のうちに絞めつけていた。声はさらになくなり、掠れる。そんなことにも気が回らなくて。体調の悪さも相まり、視界が揺れる。思考が同じところを廻る。昨日も一昨日も同じことの繰り返し。

われらの声、まさしく“き……き……き……”

ついに呼吸が苦しくなり、喉から手を離すと荒く息を吐いては吸う。いつもここで歌詞は止まり、それ以上を口にすることができない。

唄鳥の民にとって歌は神聖なものだ。それは歌えないハフリにとっても同じで、捨て去ることのできない感覚だった。その証拠に、おのれの意志とは無関係に唇はわななき、喉は歌詞をただ紡ぐことすらをも拒否する。

(……私に、歌う資格はないってことだよな)

目を伏せ、膝を引き寄せ抱える。ハフリは、祈ることも祝うことも知らない。ずっとひとりだったから。否、ひとりの殻に閉じこもっていたから。実のところ、今もまだ膝を抱え閉じこもったままなのかも知れない。外の世界に出たつもりになっているだけで。

冷たい風のため息をひとつ乗せようとしたものの、思いとどまる。代わりに唇を噛みしめ、顔を上げて前を見た。見えるのは、灰色ではあるけれど森よりずっと広く感じる空と、枯れながらもしたたかに根をはる草達。ここにきて、自分は変わった??そう思うのは、思い上がりなのだろうか。

フウが心配そうな声でさえずる。だいじょうぶだよ、と答えた声はひどく震えていて。まるで、いばらの道のなかでうずくまっていた自分に戻っていくようだった。毎回こんな思いをしてまで、歌おうとする意味があるのだろうか。歌えるようになるのだろうか。わからない。けれど、諦めたくない。なのに、負けそうになる。

「……ソラト」

思わず、口の端から言葉がこぼれた。

「???なに」

低い声とともに、足音が響く。慌てて音のした方を見れば、そこにいたのはかの少年で。懽然とした表情で、けれどもしつかりとハフリを見据えていた。ハフリは反射的に立ち上がる。答える声があったことに驚き、なにより恐怖する。まさか、

「きいてたの?」

ソラトは一瞬逡巡したあと、うなずく。血の気が引いていく。聞かれた??その事実がハフリを追い立てる。一步後退し、さらに一步よろめくように下がる。するとソラトが歩み寄ってきて。弾かれるようにきびすを返した。

「どうしたんだよ」

しかし逃げることは叶わず、腕をつかまれ引きよせられる。その力強さに、縋るように振り返ってしまふ。同時、わたしは、と内心自嘲する。わたしはこの人なら助けてくれると思って、甘えている。名前なんて呼んだりして。泣く気にもならないほどの自己嫌悪が、身体のかなかで渦を巻く。

「へたくそ、だったでしょ」

わたしの歌、と。うつむき、吐き捨てるようにつぶやいた。

「決められた音律の通り歌えない。綺麗な声すら出せない」

どうしてこんなときだけ口は良く回るのだろう。

「小さくて、掠れてて、調子はずれで。想いすら、籠らない?」
そこまで口にしたとき、腕をつかむ手に力が加わったのがわかった。おれは、と唸るように放たれた声は低く。思わず身を強ばらせて恐る恐る表情を伺えば、彼の目は、ハフリの顔を通り越して足許にあった。眉を潜め、どこか苛立たしげに言葉を吐き出す。

「そつという言い方、好きじゃない」

「ごめんなさい、と消え入るような声で謝ると、ソラトは空いている片方の手で乱暴に自らの髪をかき乱す。彼が自らに爪を立てている気がして、痛々しくて。ハフリが手を伸ばそうとしたそのとき、小さく「……悪い。怖がらせた」と。ハフリは上げかけた手を下ろし、首を横に振る。ソラトは相変わらずハフリから目を逸らしたまま難しい顔をしていた。その姿が酷くいきぐるしそうで、心配になる。

「ソラト」

上背のある彼の顔を見上げ躊躇いがちにその名を呼ぶと、まなざしを向けられた。その瞳を見ただけでは、ハフリは彼の胸中を察す

ることなどできない。ただ、見つめ返すだけ。虎目石の色にも似た、深く鋭くつやめかしい茶色。考えることも息をすることも忘れ、吸い込まれそうになる。

ふいと、再度目を逸らされる。ソラトは掴んでいた腕を放し、踵を返しながら言った。

「そこ座って、待ってて」

数刻して戻ってきたソラトは、手に筒状の何かを持っていた。その表情は先ほどと比べ少し和らいでいて、ほっとする。おかえりなさいと声をかけると、小走りで歩み寄ってきた彼は、手に持ったそれをハフリの前に差し出し尋ねた。

「これ、何かわかる？」

「……笛？」

そう、とソラトは答えるとハフリから数歩離れた地面にどかりと腰掛ける。ハフリが居ずまいを正そうとすると「楽にしてて」と制される。そして、笛を見聞するように角度を変えて眺めながら、独り言のように言葉を続けた。

「さっき『決められた音律』が云々って言ってただろ。俺にはそれが、わからない」

つぶやくように放たれる言葉は、ぶつきらぼうでありながらも落ち着いていて、ハフリに何かを伝えようとする意志が感じられた。ごくりと、思わずつばを飲む。ソラトは、笛の穴に手を当てる。ハフリの知識で言うなら、穴を端から順に話せば、階段のように規則的に連なった音が響くはずだった。しかし、

「え……？」

ひとつ、ふたつ、穴から指が離れるたびに出る音は、どんどん高くなっていく。しかしどれもこれもハフリが聴いたことのない音ば

かりだった。それどころか音と次の音の高さは、近かったり遠かったりで、規則性がない。

なのに、これっぽっちも不快には感じないのだった。むしろ、風に溶け込むその音は、優しくハフリの耳に馴染んでくる。ソラトは一度笛から口を離すと「吹くのは久しぶりだな」とつぶやいた。懐かしげに目を細めて、笛をそつとなでながら

「山鳥の民はさ、自分の楽器は自分で作るんだ。もとより、材料なんて草とか木の枝くらいしかないんだけど。そのなかで、じいちゃんばあちゃんたちの知恵を借りながら丁寧を作る。できた楽器はそれだけのもので、それだけの音??つてわけ」

自慢気にそう言つて、ひよろろと笛を鳴らした。つづけて、ひゅと吹く。少し間が抜けていて、それなのに何だか懐かしく、やわらかな音色だった。

「こつやつて、調子を合わせるんだ」

こつしてるとな、とどこか恥ずかしそうに笑いながら「笛と自分が重なるときがあるんだ。そしたら、吹ける」

来た、と嬉しげに呟いて一言、「???聴いてるよ」と。

息が音となり、音が糸となって耳に飛び込んでくる。高い音は身体の内側で細かく反響したあと勢いづき、頭のなかで渦巻くものを連れて脳天から飛び立つ。低い音は心臓に直接触れ、やわらかく包むかのような。音が肌に触れ、手を差し伸べてくる。それらは自由で奔放で、飄々としていた。作られたのではなく、産み出された、生まれてきた音だった。音が生きていた。踊って、広がって、流れて、融けて、染み渡ってゆく。どうしようもなく心地よい。

刹那、ハフリの目の前を透明な風が吹き抜けていく。

一瞬目をつぶると、急に視界が開けていた。風にさらわれた前髪が、視界の隅に見える。??開けた世界は、一変していた。

音は風とからみあい、まざりあい、時にほどけて散らばる。目の前に広がっているのは灰色の空と枯れた草原であるのに、散らばった音の欠片に鮮やかな色を感じた気がした。否、殺風景な景色そのものを、青空と緑の草原と同等にうつくしいと感じた。そう思えるのは、きつと、

(ソラトが、変えてくれるからだ)

心の奥の奥で、何かを見つめる。それは、今まで感じたことのないような感情だった。まだつぼみすらつけていない、土から出たばかりの芽もとても瑞々しくつややかで、伸びやかで、いとおしくて。双葉がふわりと揺れるたびに光を振りまく。その芽が振りまくひかりが、今まで時折溢れそうになっていた感情の源だと気づく。

心臓が高鳴った。その音に、自分が生きていることを意識させられる。私は生きている。だからソラトに会えた。そんな当然のことが、とても大切に思えて。

ふと、目があう。濃茶の瞳。しなやかな獣のような彼の目に、自分はどう写っているのだろうか考える。不安と期待が入り交じり、

感情はどんどん判別がつかなくなっていく。そんななかで、ただただ光があふれる。その光は、やさしく甘い、けれども強い衝動。想い。わたしは。私は、ソラトのことが？？

「お、おい」

唐突に音が止んで、ソラトの焦ったような声が降ってきた。彼は慌てたように立ち上がると歩み寄り、膝についてハフリの顔をのぞきこむ。

「なんで泣いてるんだ」

え、とハフリは自分の目尻に指をやった。ついてきた雫に呆気にとられる。泣かないと決めていたのに。顔を上げるとソラトが明らかに弱った顔をしているのが見えて、慌てて涙を拭う。あのね、とただたどしく言葉をもらす。

「ソラトの音が、綺麗だったから」

「そんなことで泣いたのか」

ソラトは呆れと安堵が混ざったような顔をして言った。その顔が思いのほか近くにあることに気づき、顔が一気に熱くなる。ちかいとやつのことで小さな声を搾り出す。フウが「ひよろろ」とソラトの笛を真似して鳴く。ソラトは一瞬解せないような顔をして、その直後

「うわ！ 悪い」

と飛び退るように離れた。なんとなく気まずい沈黙が流れる。ちらと目の前の少年を見れば、心なしか彼の頬も赤く染まっている気がして。余計に身体の温度が上がる。そんな自分が恥ずかしくなつて、俯く。すると、

「おまえ、さ」

ソラトの唸るような声がして、顔を上げた。彼は地面を見つめ、何かを言うか言うまいか悩んでいるようだった。そのまま、しばらく落ち着きなく視線をさまよわせる。

ハフリの頬の火照りが引いてきた頃、ソラトは意を決したように顔を上げた。まっすぐなまなざし。声が、空気を貫く。

「歌えるよ、きつと」

一瞬何を言われたかわからず、ハフリはまばたきを繰り返した。ソラトは明らかにしまったと言つような表情をして目を逸らし、両手で髪をかきまわす。そこまできてようやく、耳から入ってきた言葉がすとんと落ち着いて。そつと息をつき思い返す。歌えると、ソラトが言ってくれた。先刻、身体の奥から炎が湧き出るような熱さとは違い、その言葉からゆっくりとやわらかな温かさが広がっていくのを感じた。

あさつての方向を見ていたソラトと、視線が交差する。ありがとう、と言葉がこぼれた。しかしそれは、いつも以上に小さな声で、いい加減情けなくなつてきて肩を落とすと、

「礼をいうことじゃねえよ」 とぶつきらばうな、でもハフリにとつてはやさしい声が返ってきた。

「そろそろ、戻るか」

ソラトが立ち上がる。じゃら、と何かが音を立てる。それは鎖。連なるのは銀色の方位磁針だ。錆は、もしかすると森にいた時よりも酷くなっているかもしれない。けれども、

「つけて、くれてるんだね」

そのことがうれしくて。本当にうれしくて、ハフリは立ち上がる。背中を向けて歩き始めていたソラトを抜かし、一步前にでる。彼に背を向けたまま、一度空を仰いだ。息を吸う。いまはまだ歌えなくても、声を出すことならば今でもできる。

くるりと振り向く。ふわりと金色のお下げが舞う。突然の動きにフウが不機嫌そうな声をあげたけれども、それすらも胸のあたたかさに加わるようで、いとおしくて。頬がゆるむ。目が細まる。口許がほころぶ。心の奥の芽が揺れる。あのね、とささめいて

「私、ここに来てよかったよ」

ソラトはしばし驚いたように目を見開いていたものの、破顔して「そっか」と、いつかと同じ言葉を返した。笑っているはずなのに、その表情がどこか曇っているように感じたのは、気のせいだったか。疑念を確信も払拭もできぬ間に、ソラトはハフリを追い抜く。すれ違いざまに、かすかにハフリの頭をなでて。その触れるか触れないかの距離に、胸のざわめきを覚えて、ハフリは思わず「待って」と声を放っていた。ソラトがゆっくりと振り向く。ええと、とハフリは慌てながら即興で「あの小屋のなかには、なにがあるの？」と尋ねた。ソラトは訝しげに目を細めたものの、

「確か本だったかな。おばさまとか先代の長老が、自分で書いた行商の民から買ったものだったさ。難しい字が多くて、読んだことないけど」

本、と口のなかで反芻する。その単語に心惹かれるのは、この村に来てからあまり書物を読んでいないせいかも知れなかった。

「あ、ソラト！　こんなところにおったんか。イグサさまが呼んでるぞ」

割り込んできた声のした方から、ひとつに束ねた赤い髪を跳ねさせて少年が駆けてくる。ソラトの表情が一瞬だったものの明らかに曇ったのを、ハフリは見逃さなかった。しかし、それを問いたただす間もなく「先に、いくから」とソラトは走り出す。スオウと一言一言交わしたようだったが、みるみるうちに背中はずかしくていった代わりにスオウがひよこひよここと寄ってくる。にしゃりと笑うとからかう口調で「もしかして、お邪魔やった？」と。ハフリが焦って必死に首を横に振れば、声を立てて笑う。どちらともなく、村の方へと歩き始める。

「ちゃんと話せたん？」

思いのほか真面目な声の問いかけにハフリがきよとんとすると、スオウは苦笑まじりに「えらいソラトの前やと固まってるみたいやったから」と言った。だいじょうぶでした、と返すとよかったと微笑まれる。

「仲ええよなあ」

「え？」

「ハフリちゃんとソラト。ソラトって結構気難しいんやで。ハフリちゃんがこの村に来た時は、ソラトが嫁さん連れてきたって噂になったもんやけど、あながち嘘やないかもなあ。ほら、山鳥の民は昔は他の民から嫁さんもらってたやろ？」

ハフリの感情や理解よりも一足飛びの言葉に、思わず首を傾げてしまう。そういえば？？初めて会った時オウミは何か言おうとしていた気がする。一瞬赤面しかけたが、オウミが口にするのをソラトが止めたことを思い出し、目を伏せた。

「そんなこと、あり得ないです。私、お荷物ですし。ここにも、無理言っただけで連れてきてもらったようなものだから」

スオウは「そーかなー」とのんきな声を出し、けれどもそれ以上は何も問わなかった。

幕家の並びに入る。煙突からはもくもくと煙が出ており、夕飯の準備をしていることが察せられる。遠くには放牧から帰ってきた羊達が群れをなしているのが見えた。

ふいに思い浮かんだのは、ツムギの何気ない言葉だった。

??ソラトがあちこち飛び回ってるのも、多分イグサさまから指示が出ているからよ。

なにかが、引っかかる。あの、とスオウを見あげる。

「私、何か意味があつてここに連れてこられたのかな」

その言葉に、スオウは不意打ちを食らったような顔をして、口を

開きかけた。しかし

「あー！ バカスオウそこ踏んだら殴る！」

鼓膜を破るような大声が飛んできて、びくりとふたりで足を止めた。駆け寄ってきたのはツムギだ。

「なんやねん一体」

スオウが呆れたように問うと、ツムギは胸を反らしてどこか自慢げに答える。

「足もと見なさいよ足もと」

そこにあつたのは、小さな緑の芽だった。萎びた草のなか、つやつやとした若葉が精彩を放つ。それを見たスオウは興味無さげに「放牧するところにはそれなりに生えとるやん」

「それはここから離れたところでしょ。こうして灰が降る場所でも一生懸命芽を出したんだから」

ハフリはかがみ込み、その芽をじいつと見つめた。てらいなく「きれいですね」とつぶやく。「でしょ」とツムギも横で膝を折ると、やわらかそうな葉に指先でそつと触れ、おだやかな笑顔を浮かべた。「アタシの予想では、多分花が咲く植物だと思うのよねー」

「おやおや、ツムギの口から花なんて乙女な単語が飛び出るとはなあ」

茶化すようにスオウがそう言うと、「なによ悪い？」と頬を紅潮させ唇を尖らせる。そんなふたりのやり取りを見守っていると、背後から「ハフリ」と高く幼い声が聞こえた。

ふらと、幕家の影からよろめくように現れた影は小さく頼りない。ハルハ、と呼ばうと、紅潮した顔をこちらに向ける。瞳は熱っぽく潤み、足取りは覚束ず、お世辞にも体調が良いようには見えない。ハフリが急いで駆け寄ると、身体を支える為か、足にしがみついてくる。その呼吸は荒く、服越してわかるほどに身体が熱い。どうしたの、と問えば足に回した腕にぎゅうと力を入れ、幼子とは思えぬ深く重い息をひとつ。そして、力を緩めると一歩離れて、まっすぐにハフリを見る。小さな口からこぼれ出たのは、ひどく簡潔な、け

れども切実な響きを持った一言だった。??にげて、と。

その場にいたハルハ以外の三人は、まず等しく首を傾げた。誰が、どこから、何故逃げなければならぬのだろうか。心がざわめく。

ハルハは誰の目を見て逃げると言った？

ハルハはハフリの手を握ると、力なく引つ張る。

「にげない」と

「わたし、が？」

躊躇いがちに問うと、こくりと頷かれる。

「お兄ちゃんとおばあちゃんが、さっき言ったの。ハフリは“イケニエ”なんだって。火蜥蜴の山にササゲルんだって。よく、わからないけど」

よくないことでしょう、と。続けられた声はハフリの耳に入ってきたものの、うつろに反響したのみで。感じたのは、鼓膜を揺らす震動のみだった。言われたことが、理解できない。すべての言葉は意味を持たないただの音となり、風に融けて消えゆく。イケニエ。オニイチャントオバアチャンガ。

うそ、とつぶやいたのは、自分だったか。それともツムギか、あるいはスオウだったのか。ただ、無意識にハルハの手を握り返していた。ちいさな、ちいさな手。平時より高い体温が染み入るようで、けれどもあまりにもちいさくて。あの手が、あのひとが、恋しくなる。乞うように、名前を呼びそうになる。??背後から足音が響いたのはそのときだった。

振り向いたそこには、ハフリが今まで見たことのない表情をした少年がいた。いつも光をはらんで輝いていた瞳は曇り、何の感情も見いだせない。一步、また一步と彼は歩み寄ってくる。ひどく静かに、踵から足を付いて。その足の下にあったのは、細く幼い、けれどもひかりをまとっていた緑の芽。それが折れた、あまりにつたない音をハフリは聞いた気がした。

一筋、乾いた風が吹く。枯れた草達は揺れることなく沈黙する。

辺りを包む静寂は、温度を持たず、ひたすらに無機質で。雲に覆われた空は薄暗く、夜の訪れを告げようとしていた。

唄鳥の民が暮らす森。その上に広がる夜空は澄み渡っていて、銀色の星明かりがまぶしいほどだった。けれども、その大部分は樹々に覆われてしまっていて、夜になると全てのもの見分けが付かなくなってしまう。父がいたときは森の外へと出て星読みをしたものだったが、ひとりになってからは行っていない。

蝋燭の炎は闇夜の漆黒と戦うかのようにきらめき、目に痛いほどだ。その輝きに耐えきれず、いつもハフリは眠気に包まれる前に火を消してしまう。そして真っ暗になった天幕のなかで、父のくれた本とともに自らの膝をぎゅっと抱えるのだ。なかなか訪れない眠気に唇を噛み締めて、身体の震えを押さえつけるようと腕に力を込める。

父が亡くなったのは、ハフリが十二の頃。とうに身の回りのことは出来るようになっていたけれども、寂しさも心細さもなくなることはなかった。日の出ている間はセトの庵で本を読んだりできたものの、こうして夜は必ずひとりぼっちになる。だからハフリはことさらに、夜が嫌いだった。

山鳥の村の日暮れは早い。薄暗くなったと思えば、あつという間に夜の帳が辺りを覆う。けれども、雲を介しているせいかその暗闇の色はぼんやりとされていて、淡い。炎を焚くと、なおのことその色は淡くなり、炎の苛烈な赤をやんわりと包み込む。和らいだ灯りはひとびとの輪郭を、その表情を縁取っていつて。すると、まるでひとが光をまとっているかのように見える。ハフリは、その様を見るのがすきだった。

この地の夜は、寒い。もとより寒冷地ではあるが、日没とともに

一気に気温が下がる。羊たちは寄り添いあい、人もまた、開けた場所に大きな篝火を燃やして、ひとり、またひとりと集まり始める。放牧から帰った男達は馬乳酒の入った皮袋を片手に陽気に語り始め、女達は彼らが顔を赤らめた頃に夕飯を運んでくる。そこからはまるで小さな祭りのようだ。きらめく火の粉のなか、子供達の影が軽やかに踊り、娘達が小鳥のように歌い始める。すると不思議なことに、寒さを忘れてゆく。むしろあたたかく感じるほどになる。山鳥の村の夜は、一日のなかで一番あたたかい時間でもあるのだ。

ハフリは夜を迎えるたびに、この場所がすきになる。そしてほんのちよっぴり、夜も好きだと思えるようになる。

今日もまた、遠くから男達の笑い声がかすかに聞こえてくる。立ち並ぶ幕家に人の気配はない。皆夕飯の準備に取りかかり始めているのだ。そのなか。誰もいないはずの幕家のあいまで、ハフリはソラトと向き合っていた。ハルハの手を握り、背中越しにツムギとスオウの気配を感じながら。

空気が凍てついてゆく。否、凍てつくと表すのは正しくない気がした。敢えて言うなら?? 全てのもものが停止していく。或いは、消え去っていった。音も温度も感じられない。うつろだった。それは《狩人》が現れた時の状況に似通っていたが、あの時の理解を超えた不気味さは存在していない。けれども、徐々に逃げ場をなくされていくような焦燥感が、爪先から脳天までを痺れとともに迸ってゆく。逃げられない。いきが、くるしい。喉が絞め付けられてゆく。身体は磔にされたかのように、指一本動かすことができない。

ハフリはただ、立ち尽くしていた。瞬きすることすらも叶わぬまま、目の前の少年を見つめていた。

??ハフリは“イケニエ”なんだって。火蜥蜴の山にササゲルんだって。

先刻のハル八の言葉が脳裏に蘇る。蘇る、のだけれども、理解できない。単なる音が連なったものにしか思えなかった。それなのに、身体が内側から震える。恐れている。動けと身体に命じつつも、止まったままでいて欲しいと願っている。

しかし、その願いは、ツムギが一步踏み出した音で破られた。彼女は、ハフリとハル八を挟んで対面しているソラトへと躊躇せず歩み寄る。そして彼を見上げ　？？腕を振りあげた。刹那、頬を張った高い音が響く。その音は空気を棘の如く変質させ、ハフリをも貫いた。身体が反射的に竦み、止まっていたすべてのものが動き出す。流れ出し、崩れる。

垣間見えるツムギの横顔。紺色の瞳には困惑が揺れ、同時に何よりも怒りが燃え盛っていた。射抜くような視線をソラトに向ける。抑えた声で、唸るように呟く。

「今のは、アンタが踏みつぶしたもんの分、だから」
一方、ソラトは微動だにしない。赤くなってゆく頬を気にすることもなく、感情の見えない瞳でツムギを見下ろす。光を写さない濃茶の瞳はひたすらに深く暗い色をしていた。その色を覆うのは、嵐雲にも似たひどく重々しい影。

ツムギは苛立たしげに顔を歪める。自らの目線と並ぶ位置にあるソラトの胸ぐらを掴みあげ、噛みつくように叫んだ。

「何か……何か、言ったらどうなのよ！」
ソラトは数秒置いたあと、ひどく緩慢な動作で、けれども強く自らの髪をかき回した。小さく口を開けて、閉ざし、瞼を持ち上げる。睨みつけるといふよりも、相手を押さえつけるかのような、硬質で底の見えないまなざしをツムギに向ける。

「何を言えって？」

低く抑揚のない声。ツムギがもう一度腕を振り上げる。それを掴んで止めたのはスオウだった。いつ、彼が自分を追い抜かしていったのかもハフリはわからない。頭が、回らない。ハル八が一步後退して、ハフリの身体に寄り添う。衣服越しに伝わる小さな身体の火

照りだけが、妙に頭のなかを占める。そうだ、ハルハは体調を崩しているのだ。早く、幕家に連れて行かないと??。

「放してよ!」

宙を漂っていた思考は、ツムギの叫びによって引き戻される。ツムギはスオウに食って掛かったが、スオウは腕を放すと「落ち着け」と囁いた。でも、と言い募るツムギを、再度視線で以て諫める。

スオウは、今度はソラトに顔を向ける。その表情は硬く、

「あの言い伝えのことか? 火蜥蜴の山に神女を捧げるっていう」
声は慎重だった。探り、窺うような言葉。ソラトは「ああ」と、まるでため息を漏らすかの如く、億劫そうな返事を寄越した。簡潔すぎる返答は、全てを雄弁に語っていた。向き合うしかなかった現実が、ハフリを浸食してゆく。

ちらと、スオウがこちらを見る。そのとき、前髪が風に吹かれてはらりと落ちた。恐らく、ハフリ表情は見えなくなっているだろう。それでいい、と思った。ハルハが握った手にぎゅっと力を込めるのを感じた。遮られた視界と人肌のぬくもりに、少しだけ心が落ち着く。筋肉が弛緩する。もう、動くことができる。けれど、ハフリは動かなかった。動けなかった。小さく浅い呼吸を繰り返しながら、前髪の向こうを見つめる。

てつきり、とスオウが話を切り出した。牽制するかのよう、先刻より語気を荒げて、

「そんな言い伝え、本のなかのお伽噺やと思っとなわ。それにそれ、他の民??土着のやつらに伝わる話やないか。オレらは、今こそこの村に留まるとるけど、遊牧の民やぞ。そんな、自分らにとつて云われもわからん話を信じるんか」

スオウの反論は、矛盾している。土着の民に伝わる話であるならば尚更、額面通りではなくとも何らかの根拠はある筈だからだ。それは、山鳥の民??多くの民の血を取り入れ、様々なひとびとと触れあってきた彼らならば、わかりきっていることでもあった。庇われている。もしくは、スオウも否定したがっている。この事実を。

しかし、

「おばさまの予言と照らしあわせた結果だ」

ソラトの返答はにべもなく、微塵の揺らぎも感じられない。

つと。濃茶の瞳孔が動く。ハフリが知るその瞳は、いつだって光と生气に満ちていた。なのに、今自分に向けられるまなざしのなかに、それはない。何も、見だせない。

ハフリを一瞥し「それに、」とソラト言葉を続けた。

「俺も、夢を見た」

再度、風が吹く。前髪をさらってゆく。夜の空気が、まるで手のようにハフリの両頬を包み込む。掴む。固定、する。逃げることを許さぬ空気の温度は、死人のそれに似ていた。昔々にハフリが触れた、動かぬ父の手。まるで石のような硬さと、冷たさ。肌が粟立つ。やだ、と口の端から漏れた言葉は、誰にも届くことなく消えた。耳を塞ぎたかった。目を閉ざしたかった。いやだ、いやだいやだいやだ。

なにひとつ抗えぬまま。ソラトの声は、鈍器のような堅さと重み、衝撃を持って、ハフリを殴りつける。

「ーそいつを、火口に突き落とす夢だ」

ついに、ハフリは認めた。すべて、あらかじめ決まっていたことなのだ。出会ったときから。或いは、会おう以前から。ソラトにとってハフリは生贄でしかなかった。理解した刹那、一瞬視界が暗転し、糸が切れたように膝が折れた。ハルハが小さく悲鳴をあげ、ツムギが駆け寄ってくる。

「そんなことバラしてもええんか？ 誰が聞いとるかわからへんで？」

スオウの挑戦的な問いかけにも、ソラトが動じることはない。

「人がいないのは確認済みだ。ハル八が聞いていたのは、誤算だったけどな」

それに、と続けて

「お前らだって、このことは誰にも言えない。お前らが一番わかっているだろ？ 村の奴らのから元気も、危うさも」

ハフリも、それは理解していた。どんなに明るく振るまっていようと、村のひとびとは常に空から降る灰と、枯渴していく水に神経を尖らせ、すり減らしている。村長であるイグサ？？彼女の予言は、村人達の支えでもあるのだ。彼女の無言は、平穩の存続を意味していた。村人達は皆、彼女が言葉を発しない間は、危機的状况には陥らないのだと信じている。ハフリもそのひとりだった。予言が外に出ることなく、自分を巻き込んでいたなんて考えてもみなかった。ただ、外に出たくて。ソラトに付いてゆきたくて。ただ、それだけでここに来たのだ。

ソラトがこちらへと、数歩近づく。びくりと身体がこわばる。薄闇のなかでも、はっきりと表情の見える距離。

ソラトは、笑った。明らかかな嘲笑だった。憐れむように眉を歪めて、乾いた息を吐き出す。上げられた口角は引きつっているようにも見えた。

「お前、本当に可哀想な奴だよな。俺みたいな奴のこと信じて、ほいほい付いてきてさ。同情するよ、本当に」

淡々と放たれた声に、身震いした。言葉とソラトの内心は真逆である気がした。このひとは。私のことを可哀想だなんて思っていない。同情も、していない。

以前ツムギと出会ったとき、彼女に浴びせられた言葉がソラトに言われているかのようで辛かった。けれど実際は、役立たずだと、愚か者だと面と向かって罵られた方がずっとずっと楽だと感じる。身体の内側が、痛い。土足で踏みじられ、踵で抉られるかのよう

な、痛み。こんな酷い痛みを、ハフリは知らない。息をしても痛い。動かなくても痛い。いきているだけで？？痛い。

ほんの少し腕や脛に力を入れれば、耳も目も塞ぐことができる。そうすれば、少しは痛みが和らぐ気がした。けれども身体は動かない。見たくないと思うのに、縋るように彼の瞳を見つめてしまふ。そして、こんな状況でも吸い込まれそうになるのだ。曇っつていようと陰っつていようと、ハフリは彼の瞳を見ずにはいられなかった。まるで小鳥のすりこみのようだ。馬鹿みたいだ。そう思うのに。眼前の少年の声が、剣のようにハフリに突き刺さる。

「優しくされて嬉しかっただろ？ 何も知らないままいけばよかったのに。そうすれば、最後まで優しくしてやったのに。まあ、どのみち？？」

そのとき一瞬、彼の姿が今にも泣き出しそうな幼子に見えた気がして。ハフリは目を見開く。痛みも忘れて、思わず名前を呼びそうになった。しかし、

「逃がすつもりは、ない」

突きつけられた言葉は、何をかも拒否していた。吸い込んだ空気は、声になることなくハフリの外に吐き出される。ツムギがハフリを抱きしめ、ソラトを睨みつけた。

「自分が何言ってるか、わかってるの」
「わかってるさ。余計なこと考えんなよ、ツムギ。お前らはコイツがどこから来たのかも知らないだろ」

容赦なくそう言い捨てて、ソラトはきびすを返す。スオウは一步踏み出したものの、そのまま止まった。ハル八が潤んだ瞳で自分を見つめている。抱きしめてくれているツムギに腕に力がこもる。

足腰に力が入らない。へたりこんだまま、ハフリは視線をさまよ

わせた。そして、目をとめる。そこにあつたのは、芽。踏みつぶされてしまったそれは、くたりと地面に身を横たえていた。瑞々しい光を放っていた翠の小さな葉は砂にまみれ、茎は根本からぽつきりと折れてしまっている。かろうじて根へと繋がるその姿が、あまりに痛々しくて。ハフりはそっと目を伏せた。

心の奥の痛みが、体中を侵してゆく。目の奥が熱く、痛い。今なら、泣いても許される気がした。けれども、涙は出てこなかった。

いったい、どうすればいいのだろうか。なにも、なにもわからなかった。

からからと寂しげな音を立てて枯れ葉が地面を転がってゆく。ハフリはツムギに抱きしめられたまま、ただ息を吸って吐いていた。衣越しに伝わるツムギの体温はあたたかく、腕で包まれ風から守られているのに、寒気がして仕方がない。

傍らに立ち尽くしていたスオウが顔に手を当てて深くため息を吐く。それを見やったツムギは固い声を放った。

「知ってたの」

「……なんとなく、な」

力のないスオウの返答に、ツムギは口を開きかけたものの閉ざす。そして、眉を歪めてハフリの方を見ると、抱きしめる腕に力を込めた。

「……返さないと」

ツムギの独白にも似た呟きに、身体が強ばった。返される。帰る??森に。あの場所の樹々が生み出す、溢れんばかりの光を孕んだ濃密な空気を思い出す。喉が、水を欲するかのごくりと鳴った。同時、身体が軋む。その、内側から萎びて枯れて徐々に粉々になっていくかのような感覚に、身体が震えた。このままではどうなるのかを本能は理解し、森に帰るべきであると理性は告げている。けれど、

「わたし、」

ハフリの奥にある、本能とも理性とも相反するものが小さく、けれども確かに鼓動する。弾みに押し出された空気は声になり、切実な響きをもって口の端から零れた。

「ここにいたい」

ツムギが目を見開いてハフリの顔を覗き込んだが、一番驚いたのはハフリ自身だ。自分が口にしたことを思い返し、おろおろと視線を彷徨わせる。身体の動きとともに、胸元に光る金色の方位磁針が、

しやらんと涼やかな音を立てた。その音が耳からゆっくりと身体中に染み込んでいく。鼓動が、先刻よりはつきりとしたものになる。けれどもその正体はわからず、縊るように顔を上げるとスオウの視線とぶつかった。

赤茶色の瞳が思案深げに眇められ、スオウは呟く。

「別段、ハフリちゃんが帰る必要はあらへん」

え、とハフリは声を漏らし、ツムギは眉を潜めて「なにか手があるの」と尋ねた。

まあな、とスオウは答えて一呼吸おく。一瞬だけ瞳が陰り、浅く吐き出された息はどこか乾いていた。けれど、ハフリが疑問を持つよりも早く、彼は一転して眦を緩める。強く微笑んで、声を放つ。

「ハフリちゃんが、オレのお嫁さんになればいい」

笑みを絶やさぬまま、大したことないと言っように。

「そしたら、ソラトも手出しできへんやろ？」

囲炉裏の炎が、時折ぱちりと音を立てては揺らめく。幕家のなかの空気は外の寒さが嘘のようにあたたかく穏やかだ。敷布の上には、色とりどりの小布と様々な裁縫道具が散らばっている。

そんななかに座り込み、ハフリは小布を寄り集め縫い合わせ、一枚の大きな布を作っていた。基調は深緑で、落ち着いた色合いをしている。継ぎ合わされた布の色目が描くのは、直線的な幾何学模様だ。表側には縫い目が現れぬよう、しっかりと丁寧に針を進めていく。他のことは何も考えず、ただ目の前の布にだけ意識を集中させる。

ハフリの作業速度はお世辞にも早いとは言えなかったが、ツムギに「とにかく休まず作れ」と言いつけられていた。これらの布は中綿を入れれば掛け布にもなるし、美しいものは壁飾りにもされる。特に前者は寒いこの土地では一枚でも多いにこしたことはない。

「ハフリを作る模様っておもしろーい」

ふいに、傍らの少女が身を乗り出してハフリの手元を覗き込んできた。ツムギの妹??コソデだ。ふたつに束ねた黒紺の髪が動くたびにしつぽのように跳ねている。彼女の手にもハフリと同じく継ぎはぎした布があり、色は赤などの暖色、その模様は十歳の子供が作ったとは思えぬ、曲線を主体とした複雑なものだ。

紺色の瞳を輝かせるコソデにハフリは微笑みかけ、手を止めた。鉄を手に取り糸の端を切ると、天上を仰ぐ。幕家の天上の中心には一カ所だけ窓があり、その向こうには相も変わらず曇った空が広がっていた。ゆつくりと、息を吐き出す。吐き出した息は重く、そのままのろのろと落下して地面を這う。

あの日から、数日が経った。何が変わったかと言えば、ハフリがいるのはソラト一家の幕家ではなく、ツムギ一家??織鶴の民の幕家だということくらいだ。オウミ達に適切な理由を説明して、この幕家で暮らすようツムギが手配してくれた。急かすように連れてこられたもあり、フウはそのままハルハのもとにいるし、父から譲り受けた本も肩掛け袋ごと置いてきてしまっている。取りに戻る気にもなれず、村のなかを歩く気力も湧かないまま、ハフリは一日の大半を幕家のなかで過ごしていた。幸いなことに、織鶴の民の仕事は、手先の器用さを活かした手芸や生活必需品の作成という屋内作業が多い。

ツムギは一日のほとんどをウバタマとともに村の外で過ごしている。水を汲みに行ったり、羊の放牧をしたりと忙しそうで、顔を合わすのは食事のときくらいだ。彼女の口数が徐々に減り、表情が曇ってきていることに、ハフリは気づいている。そして、決めなければと思う。自分がこれからどうするのか。

??ここにいたい。

何よりも強い想い。けれども、自分がそう思う理由を掴みきれず

にいた。森へ帰ることに、スオウの提案にも頷くことの出来ないまま、無為に時間だけが過ぎてゆく。そして、時間が経てば経つ程「ちよっと、外に出てくるね」

コソデにそう言いおいて、ハフリは幕家から出る。急いでいることを気取られぬよう、自然な風を装って。息を止め口許を押さえ、人目のない幕家の裏側に回り込む。身体を丸めてかがみ込んではいめて、ようやく息を吐き出した。刹那、全身が軋むように痛む。続けて吸い込んだ空気は喉を通過したとたん発火したかの如く熱を持ち、また息を吐き出せば喉が焼ける。繰り返す。肩で息をしながら、両腕で身体を包んで押さえ込み、なるたけ音を立てぬようにする。目尻に涙が浮かび上がるも、歯を食いしばって耐える。耐えていれば、いずれこの症状は治まるのだと、ここ数日の経験上理解していた。

肌に触れる冷たい風も、体内でのたうち回る熱を鎮めてはくれない。無意識に胸を押さえる。そこにあった方位磁針を両手で包み込み、きつく目を閉じた。暗転した視界がぐらりと揺れる感覚があった、声が、聴こえた。

??お前、この村に来て良かったと思う?

脳裏に浮かぶのは向けられた背中。続いて振り向いた彼は、顔を歪めて嗤う。否、

??お前、本当に可哀想な奴だよな。俺みたいな奴のこと信じて、ほいほい付いてきてさ。

そう言って、今にも泣きだしそうな顔をする。何故だろう、記憶のなかの彼は時が経つ程にぼろぼろになって、今にも崩れ落ちそう

に見えてくるのだ。そして、手に伝わる金属の冷たさは、彼の手の温度を彷彿とさせる。まだ、彼の手は冷たいままなのだろうか。そう思うと、ハフリはその名前を呼んで駆けつけたくなる。彼が自分をここに連れて来た理由も、投げつけられた言葉も、傷ついた事実も、どうでも良いことのように思えてしまう。そしてそんな自分に戸惑うのだ。

(どうすればいいんだろう)

荒い息を繰り返しながら、思う。

身体のこととは別として、ハフリが“山鳥の村こむらにいたい”と願うなら、スオウの提案は悪いものではない。スオウとハフリが、お互いそれで良いと思うのなら。けれど、スオウの真意がわからない。そしてそれ以上に、頑なにスオウの提案を拒絶する自分がいる。

ハフリがいたいと思う場所は“ここ”だ。けれど不思議なことに、スオウと結婚したら、ハフリがいたいと願う場所が消え失せてしまふ気がして。

(一体私は、どこにいたいっていうの。……それに、)

もしスオウと結婚してハフリが生贄にならなかったとしたら、この村はどうなるのだろう。イグサの予言が真実ならば、ハフリが生贄にならねば村の状況は悪化するばかりではないのか。遊牧の民であつた彼らがこの地に定住したのは、何か意味があるに違いない。

けれど、灰が積もり水が枯れ植物が朽ちた土地で、山鳥の民は暮らして行けるのか。この村には身体の弱いハルハもいるのに。そして、

(……ソラト)

目の下に深く刻まれたクマ、疲れた笑顔、擦り切れた靴の爪先、冷えきつた手。思い出すだけで我がことのように苦しくなつて。随分呼吸は楽になつてきたけれど、ハフリはうずくまつたまま目を伏せていた。閉ざされた視界、黒い空間の奥で何かが蠢いている。ゆっくり息を吐き出すと、頭の一点が妙に冴えたような感覚があり、散らばっていた思考が一本にまとまっていく心地がした。

このままでは、遠からず自分は死ぬ。けれど、“ここ”にいたい。

ならばいつそ。そうしたら、彼だつて??

「ちよつとアンタ、どうしたの!？」

背後から飛んできた声に、ハフリははつとして瞼を押し上げ、背後を見やる。目の奥が刺すように痛んで視界が白んだものの、ぐつと堪えて前を見据えれば、ツムギがこちらに息せき切つて駆けてきていた。ああ、また心配をかけてしまったなとハフリは苦笑を浮かべて立ち上がる。

「大丈夫です。ちよつと咳がでただけで」

先刻まで熱を持っていた身体が、冷たい風になぶられて一気に冷える。ぶるりと身体が震え、それを咎めるようにツムギは眉を潜めた。

「風邪、引くわよ」

手を引かれてそのまま幕家へと連れ戻される。強く引き結ばれた唇が一瞬見えた。

ツムギは下手な慰めも気休めも口にしない。ただ、村人達が炎を囲んで夕食をとるなか、自分とハフリの分の食事を幕家に持つてきて、他愛のない話をしてくれる。そして、彼女が水汲みや放牧の合間をぬつて、森の位置に関する情報を集めていることを、ハフリは薄々とながら知っていた。それ故に、申し訳なくて。

「ごめんなさい、と小さく呟いた。

「お帰りツム姉」

ただいま、とコソデに言いおくと、ツムギはハフリをさりげなく囲炉裏の傍へと座らせる。そして、「そうだ」と懐から何かを取り出した。

「遅くなつたけど、返す。血はちゃんと洗つたから」

手のひらに置かれたのは額当てだった。心なしか色褪せてしまっていたものの、手触りは以前より柔らかい。恐らく丁寧に洗つてく

れたのだらう。

「あ、ハフリが作ってるのと同じ模様だ！」

コソデが興奮したように覗き込み、「触って良い？」と首を傾げた。良いよ、と言つて手渡すと、掲げるように両手で持つ。山鳥の縫物や織物のなかでは浮くかのように思われた極彩色の額当ては、不思議と壁掛けや敷布と調和しているように感じられる。なんだかそれが嬉しくて、ぼつりとハフリは言葉を零した。

「これは、お母さんのものなの」

コソデが掲げる額当てを見上げながら、懐かしげに目を細めて

「一人前のあかしにね、お母さんが額当てを作ってくれるの。あと、綺麗な羽もひとつ。これは、お母さんが付けていたものなんだけど」この額当ては、森を出た今母とハフリを繋ぐ唯一のもの。そしてこの額当てのお陰でツムギを助けることが出来た。けれど、これは、唄鳥の民にとって“一人前のあかし”。身につけることは許されない。

先日的一件から、歌の練習をやめていたことを思い出す。そして、

??歌えるよ、きつと。

声が聞こえて。胸が、痛い。何が本当で何が嘘だったのか推し量ることができなくて、辛い。ぐるぐると、感情が入り交じる。

「……森に帰りたい？」

ふいにそつと、ツムギが囁くように尋ねた。恐らくハフリの様子から胸中を察し違えてしまったのだらう。はっとして彼女の方を見ると、ひどく真面目な顔をしてこちらを見つめている。森に帰る？ハフリが一番傷つかぬ方法を、ツムギは提示している。その為に動いてくれている。そう思うと、すぐさま否定することはできなくて。

ツムギはハフリの沈黙で察したのか、更に問いを重ねた。

「じゃあ、スオウと結婚するの？」

今度は、迷わず首を横に振る。何か言わなければと思い、口を開いた。

「ここに、いたい。それだけなの。でも、自分でもわからなくてよるめくようにツムギに手を伸ばし、彼女の衣を握りしめる。

「ただ、ここにいたい」

言い募るハフリにツムギが目を見開く。囲炉裏の炎を弾いて、紺色の瞳のなかで赤い星がきらめいた。ツムギの深い藍の瞳は、雲間に垣間みた夜空の色に似ている。夜空の果ての、魂を持って行かれそうな色。不意に思い出したのは、幼い頃に読んだ本に書いてあったことだった。??故人の魂は、空へと向かい星になるのだという。ああ、とハフリは思う。それなら、生贄になるのだから悪くない。そしてそれが、森に帰ることでも、スオウと結婚してここに居続けることでもなく、自分の本心に最も近いものであると気づく。無意識のうちに、淡い笑みが口の端からこぼれた。

アンタまさか、とツムギが渴いた声を漏らす。そのとき、

「ごーもこんにちはっ」と

ひよっこりと扉を開けて顔を覗かせたのはスオウだった。

「えーっと、なんかお取り込み中？」

おどけたように肩をすくめるスオウに、ツムギは目を眇める。

「コソデ、アンタちよっ」と外に出てなさい」

えー、とコソデは口を尖らせたものの、ツムギのまなざしの温度は下がるばかりだ。さすがに状況を理解したのか、すすすごとコソデは上衣を羽織って幕家から出て行った。

そのあと続いた沈黙を破ったのは、ツムギだった。スオウを睨みつけ、「何しにきたの」と強ばった声を放つ。先日的一件から、ツムギとスオウもまともに口をきいていない。

スオウはというと、ツムギを一瞥して「用があるのはハフリちゃんほう」とあっさりとした応えを返す。そして、ハフリに向き合

うと、清々しいとも言える笑みを浮かべる。

「来て早々悪いんやけど、考えてくれた？」

その笑顔には、一分の隙もなく。声には躊躇いも感じられない。

「オレのお嫁さんになるかって話」

はらり、と。落ちた前髪がハフリの視界を覆う。目の前がよく見えなくなる。彼は今、どんな顔をしているのだろうか。何を思っているのか。言葉を口に出しているのだろうか。先日も、そうだった。こうして前髪が邪魔をして、否、前髪に庇われて、見るべきものから目を逸らした。

ハフリは初めて、自らの長い前髪を煩わしいと思う。強く、強く、強く、強く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9791q/>

響空の言祝【きょうくうのことほぎ】

2011年11月26日01時54分発行